Cisco Prime Collaboration Deployment 管理ガイド、リリース 10.5(1)

初版：2014 年 05 月 07 日

シスコシステムズ合同会社
〒107-6227 東京都港区赤坂9-7-1 ミッドタウン・タワー
http://www.cisco.com/jp
お問い合わせ先：シスコ コンタクトセンター
0120-092-255 （フリーコール、携帯・PHS含む）
電話受付時間：平日 10:00～12:00、13:00～17:00
http://www.cisco.com/jp/go/contactcenter/

Text Part Number: OL-31941-01-J

【注意】シスコ製品をご使用になる前に、安全上の注意（**www.cisco.com/jp/go/safety_warning/**）をご確認ください。本書は、米国シスコ発行ドキュメントの参考和訳です。リンク情報につきましては、日本語版掲載時点で、英語版にアップデートがあり、リンク先のページが移動/変更されている場合がありますことをご了承ください。あくまでも参考和訳となりますので、正式な内容については米国サイトのドキュメントを参照ください。また、契約等の記述については、弊社販売パートナー、または、弊社担当者にご確認ください。

© 2015 Cisco Systems, Inc. All rights reserved.

目 次

はじめに 1

Cisco Prime Collaboration Deployment の概要 1

Cisco Prime Collaboration Deployment のインストール 3

インストールのシステム要件 3

ブラウザ要件 4

IP アドレス要件 5

仮想化ソフトウェアのライセンス タイプ 5

インストールに関する FAQ 情報 5

インストール前の作業 7

インストールの開始 15

Cisco Prime Collaboration Deployment のインストール 15

PCD_VAPP.OVA ファイルの抽出 15

仮想マシンのインストール 16

Cisco Prime Collaboration Deployment の仮想マシンへのインストール 17

CLI を使用した Cisco Prime Collaboration Deployment のアップグレード 19

インストール後の作業 21

管理者パスワードとセキュリティ パスワードのリセット 21

Cisco Prime Collaboration Deployment 機能 23

Cisco Prime Collaboration Deployment の考慮事項 23

サポートされているリリース 26

クラスタ インベントリ 27

クラスタの検出 28

ESXi ホスト サーバの追加 29

移行クラスタの作成 30

フレッシュ インストールのために新規クラスタを追加 32

タスク管理 34

移行タスク 35

はじめる前に 35
移行タスクの作成 36
移行タスクの実行 38
クラスタ内の Cisco Unified Communication Manager ノードの移行後タスク 39
IM and Presence の移行後タスク 40
移行手順のフローチャート 42
単純な移行 42
リリース 8.0.1 前の CUCM Network 移行 43
リリース 8.0.1 以降の CUCM Network 移行 44
送信元クラスタのリカバリ 45
すべての送信元ノード上の Cluster Manager Service のステータスの確認 46
アップグレード タスク 47
アップグレード タスクの作成 47
前のタスクからのシーケンスの再利用 50
バージョン切り替えタスク 50
バージョン切り替えタスクの作成 50
サーバ再起動タスク 53
サーバ再起動タスクの作成 53
再アドレス付けタスク 55
再アドレス付けタスクの作成 55
再アドレス付けタスクの実行 58
再アドレス付け後のタスク 58
インストール タスク 58
インストール タスクの作成 58
インストール タスクの追加 59
インストール タスクの実行 62
インストール後タスク 62
タスク ステータスのモニタ 63
[Monitoring（モニタリング）] ページに表示される可能性のある [Action（アクション）] ボタン 64
[Auto Refresh（自動更新）] 64
管理ツール 64

E メール通知 64
電子メールが送信される場合 64
電子メール アドレスの入力 65
SFTP データストア 66
移行またはフレッシュ インストール タスク 67
アップグレード タスク 67
Cisco Prime Collaboration Deployment GUI 上で ISO ファイル名を検証または表示する方法 68
Cisco Prime Collaboration Deployment GUI を使用して Cisco Prime Collaboration Deployment SFTP サーバ上で ISO または COP ファイルを削除する方法 68
Cisco Prime Collaboration Deployment 管理インターフェイス要素 69
共通の管理インターフェイス要素 69
モニタリング ビュー要素 70
タスク ビュー要素 75
Cisco Prime Collaboration Deployment の設定および管理 113
サービス 113
制限事項 117
CLI コマンドおよび DRS 119
Cisco Prime Collaboration Deployment の CLI コマンド 119
Cisco Prime Collaboration Deployment サーバの DRS バックアップの作成 121
DRS バックアップと復元の重要事項 122
Cisco Prime Collaboration Deployment のバックアップの復元 122
CTL 更新 125
CTL 更新 125
証明書の一括管理 125
ベスト プラクティス 127
クラスタ検出 127
アップグレード 128
ESXi ホスト 128
VM の移行およびインストール 128
移行前 128
TFTP ディレクトリのディスク使用率の確認 129

TFTP ファイルの削除 129
移行後 129
タスクの検証 130
Cisco Prime Collaboration Deployment シャットダウン 130
タスクのモニタリング 130
SFTP データストアでのファイルの管理 131
Cisco Prime Collaboration Deployment の COW との使用 131
移行中のシーケンス 131
サーバの再アドレス付け 131
パブリッシャおよびサブスクライバのフレッシュ インストール 132
Unified CM および IM and Presence クラスタのフレッシュ インストール 132
E メール通知 132
テスト電子メール 132
Cisco Prime Collaboration Deployment のトラブルシューティング 133
移行用のディスク容量 133
一般的なトラブルシューティングの問題 134
[View Log（ログの表示）] に表示されるエラー 135
ロック エラー 139
NFS データストア 139
[Monitor（モニタ）] ページの一時停止状態 140
スケジューリング 140
サーバ接続 141
再起動によるタスクの失敗 141
インストール タスクの失敗 141
アップグレード タスクの失敗 143
移行タスクの失敗 147
バージョン切り替えタスクの失敗 147
タスク再アドレス付けの失敗 149
サーバ再起動タスクの失敗 152
タスクのスケジューリング 153
タスクのタイムアウト 153
移行とインストールのアップグレード 154

現在のタスクがキャンセル状態の場合の新規タスクの実行 155
フレッシュ インストール タスクの再実行 155
移行タスクの再実行 155

第 1 章

はじめに

- Cisco Prime Collaboration Deployment の概要 , 1 ページ

Cisco Prime Collaboration Deployment の概要

Prime Collaboration Deployment は、Unified Communications アプリケーションの管理に役立つように設計されたアプリケーションです。ユーザは、クラスタの古いソフトウェアバージョンの新しい仮想マシンへの移行、フレッシュ インストール、および既存クラスタのアップグレードなどを実行できます。

Cisco Prime Collaboration Deployment には 4 つの主要な高度機能があります。

- Unified Communication（UC）サーバの既存のクラスタを新規クラスタに移行（これは MCS から仮想、または仮想から仮想が可能です）
- 既存のクラスタ上での操作の実行（8.6.1 以降）。 これらの操作の例には以下のようなものがあります。
  - アップグレード
  - バージョンの切り替え
  - 再起動
- 既存の Release 10.x クラスタでのクラスタ内の IP アドレスまたはホスト名の変更

重要 このドキュメントで言及されている IP アドレスはすべて IPv4 アドレス形式にのみ適用されます。

- 新規 Release 10.x Unified Communication のフレッシュ インストール

（注） Cisco Prime Collaboration Deployment 機能は、特定のソフトウェア バージョンに対してサポートされます。 各 Cisco Prime Collaboration Deployment 機能と互換性があるソフトウェア バージョンに関する詳細は、サポートされているリリース，（26 ページ） を参照してください。 ソフトウェア バージョンに関係なく、Cisco Prime Collaboration Deployment は、Cisco Unified Communications Manager Business Edition 5000 サーバをサポートしません。

第 2 章

Cisco Prime Collaboration Deployment のインストール

- インストールのシステム要件，3 ページ
- ブラウザ要件，4 ページ
- IP アドレス要件，5 ページ
- 仮想化ソフトウェアのライセンス タイプ，5 ページ
- インストールに関する FAQ 情報，5 ページ
- インストール前の作業，7 ページ
- インストールの開始，15 ページ
- Cisco Prime Collaboration Deployment のインストール，15 ページ
- CLI を使用した Cisco Prime Collaboration Deployment のアップグレード，19 ページ
- インストール後の作業，21 ページ
- 管理者パスワードとセキュリティ パスワードのリセット，21 ページ

インストールのシステム要件

以下は、Cisco Prime Collaboration Deployment のインストールに使用される必要がある OVA での定義に基づくサーバ要件を示しています。

表 *1*： *Cisco Prime Collaboration Deployment* インストール サーバの要件

要件	注意
製品	Cisco Prime Collaboration Deployment
バージョン	10.x

要件	注意
CPU	2 vCPU
メモリ	4 GB（RAM）
ハードドライブ	80 GB（1）
ライセンス	Cisco Prime Collaboration Deployment にはライセンスは必要ありません。

ブラウザ要件

Cisco Prime Collaboration Deployment は、システムの設定および管理に使用できる GUI インターフェイスを提供します。以下のリストに示されるブラウザおよびオペレーティング システムを使用して、インターフェイスにアクセスできます。

（注） シスコは、その他のブラウザに対するサポートおよび動作検証を行っていません。

Cisco Unified Communications Manager Administration は以下のオペレーティング システムのブラウザをサポートします。

Microsoft Windows 7

- Microsoft Internet Explorer (IE) 9
- Mozilla Firefox 18 ～ 22 および Firefox ESR 17
- Google Chrome 23 ～ 29

Apple OS X 6 以降

- Apple Safari 5.1
- Firefox 18 ～ 22 および Firefox ESR 17
- Google Chrome 23 ～ 29

ネットワーク内の任意のユーザ PC に対して、Cisco Prime Collaboration Deployment を実行するサーバを参照し、管理者権限でログインします。

（注） 多数のユーザが Cisco Prime Collaboration Deployment Administration GUI に同時にログインしようとするとパフォーマンスに影響が及ぶ場合があります。 同時にログインするユーザおよび管理者の数を制限してください。

（注） Cisco Prime Collaboration Deployment Administration はブラウザ内のボタンをサポートしません。設定作業を行うときは、[Back（戻る）] ボタンなどのブラウザ ボタンを使用しないでください。

IP アドレス要件

サーバが確実に固定 IP アドレスを取得するようにするため、静的 IP アドレッシングを使用するように Cisco Prime Collaboration Deployment を設定する必要があります。

仮想化ソフトウェアのライセンス タイプ

VMware vSphere ESXi の一部のライセンスは必須の VMware API を有効にしないため、Cisco Prime Collaboration Deployment は、VMware vSphere ESXi のすべてのライセンス タイプとは互換性を持ちません。

以下のものが Cisco Prime Collaboration Deployment と互換性があります。

- Cisco UC Virtualization Foundation（vSphere Client で「Foundation Edition」と表示）
- VMware vSphere Standard Edition、Enterprise Edition、または Enterprise Plus Edition
- 評価モードのライセンス

以下のものは Cisco Prime Collaboration Deployment と互換性がありません。

- Cisco UC Virtualization Hypervisor（vSphere Client で「Hypervisor Edition」と表示）
- VMware vSphere Hypervisor Edition

インストールに関する FAQ 情報

この項では、よく寄せられる質問とそれに対する回答を記載します。 この項は、インストールを開始する前によく確認してください。 ここでは、次の内容について説明します。

インストールにはどのくらい時間がかかりますか。

Cisco Prime Collaboration Deployment インストール プロセス全体は、インストール後タスクを除いておよそ 30 分かかります。

どのようなユーザ名とパスワードを指定する必要がありますか。

（注） システムはパスワードの強度をチェックします。 強固なパスワードを作成するガイドラインについては、「強固なパスワードとは何ですか。」のセクションを参照してください。

インストール中に指定する必要のあるユーザ名およびパスワードは次のとおりです。

- 管理者アカウント ユーザ名およびパスワード
- セキュリティ パスワード

管理者アカウント ユーザ名およびパスワードは、以下にログインする際に使用します。

- Cisco Prime Collaboration Deployment GUI インターフェイス
- Command Line Interface

管理者アカウント ユーザ名およびパスワードを指定する際は、次のガイドラインに従ってください。

- 管理者アカウントのユーザ名：先頭を英文字にする必要があります。英数字、ハイフン、下線を使用できます。
- 管理者アカウント パスワード：6 文字以上の長さであることが必要です。英数字、ハイフン、および下線を使用できます。

コマンドラインインターフェイスを使用して、管理者アカウントパスワードを変更したり、新しい管理者アカウントを追加したりできます。 詳細については、「Cisco Prime Collaboration Deployment のコマンドライン インターフェイス」のセクションを参照してください。

セキュリティ パスワードは、長さ 6 文字以上にしてください。パスワードには英数字、ハイフン、アンダースコアを使用できます。

強固なパスワードとは何ですか。

インストール ウィザードは、入力されたパスワードの強固さをチェックします。 強固なパスワードを作成するには、次の推奨事項に従ってください。

- 大文字と小文字を併用します。
- 文字と数字を併用します。
- ハイフンと下線を含めます。
- 長いパスワードほど強固であり、短いパスワードよりも安全であることに留意してください。

以下のようなパスワードは避けてください。

- 固有名詞や辞書に載っている単語など、意味を持つ単語は使用しないでください。また、これらと数字を組み合わせて使用することも避けてください。

- 意味を持つ単語を逆向きに読んだ語句も使用しないでください。
- aaabbb、qwerty、zyxwvuts、123321 など、一定のパターンの語句や数字は使用しないでください。
- 他の言語において意味を持つ単語は使用しないでください。
- 誕生日、郵便番号、子供やペットの名前など、個人情報は使用しないでください。

仮想マシンに他のソフトウェアをインストールできますか。

承認されていないサードパーティ製アプリケーションをインストールまたは使用することはできません。 システムがアップロードおよび処理できるのは、シスコが承認したソフトウェアのみです。

承認されたソフトウェア インストールおよびアップグレードは CLI を使用して実行できます。

インストール前の作業

次のテーブルは、Cisco Prime Collaboration Deployment を正常にインストールできるように実行する必要があるインストール前タスクのリストを示しています。

表 *2*：インストール前の作業

	タスク
ステップ 1	このマニュアルをすべて読み、インストール手順をよく理解します。
ステップ 2	Cisco Prime Collaboration Deployment のインストールを予定しているサーバが DNS で正しく設定されていることを確認します。
手順 3	インストールするサーバの設定内容を記録します。

ネットワーク トラフィックの許可

このセクションは、Cisco Prime Collaboration Deployment のサポートのために設定する必要がある最低限のポートについて説明します。 以下のテーブルは、企業のファイアウォール上に設定する必要があるポートの概要を示しています。 このテーブルに示されるポート設定は、デフォルトの設定に基づいています。 デフォルト設定を変更した場合、これらの設定を更新する必要があります。

ネットワーク上で必要なほかのサーバ/ポートがある場合、そのトラフィックを考慮する必要があります。

表 *3*：企業ファイアウォールの設定

方向	ソース	宛先	プロトコル	ポート	説明
着信	Cisco Prime Collaboration Deployment	FTP サーバの IP アドレス	TCP	21	ライセンス/ソフトウェアのアップロード、アップグレード、および CLI アクセスのための Cisco Prime Collaboration Deployment への FTP アクセス
着信	Cisco Prime Collaboration Deployment	SFTP サーバの IP アドレス	TCP	22	ライセンス/ソフトウェアのアップロード、アップグレード、および CLI アクセスのための Cisco Prime Collaboration Deployment サーバへの SFTP アクセス
着信	内部ネットワークまたは任意の管理ワークステーション	Cisco Prime Collaboration Deployment サーバ IP アドレス	HTTP	80	セキュアでない GUI および Web API（ログイン ページなど）への HTTP アクセス
着信	UC アプリケーション サーバ	Cisco Prime Collaboration Deployment サーバ IP アドレス	TCP/UDP	111	NFS
着信	内部ネットワークまたは任意の管理ワークステーション	Cisco Prime Collaboration Deployment サーバ IP アドレス	HTTPS	443	セキュアな GUI および Web API への HTTPS アクセス

方向	ソース	宛先	プロトコル	ポート	説明
着信	UC アプリケーション サーバ	Cisco Prime Collaboration Deployment サーバ IP アドレス	TCP/UDP	662	NFS
着信	UC アプリケーション サーバ	Cisco Prime Collaboration Deployment サーバ IP アドレス	TCP/UDP	892	NFS
着信	UC アプリケーション サーバ	Cisco Prime Collaboration Deployment サーバ IP アドレス	TCP/UDP	2049	NFS
着信	UC アプリケーション サーバ	Cisco Prime Collaboration Deployment サーバ IP アドレス	HTTPS	6060	アプリケーション サーバからの非同期 SOAP メッセージ
着信	内部ネットワークまたは任意の管理ワークステーション	Cisco Prime Collaboration Deployment サーバ IP アドレス	HTTPS	8443	HTTP Alternate
着信	内部ネットワークまたは任意の管理ワークステーション	Cisco Prime Collaboration Deployment サーバ IP アドレス	HTTP	8080	HTTP Alternate
着信	UC アプリケーション サーバ	Cisco Prime Collaboration Deployment サーバ IP アドレス	UDP	32769	NFS
着信	UC アプリケーション サーバ	Cisco Prime Collaboration Deployment サーバ IP アドレス	TCP	32803	NFS

インストール用の情報収集

Cisco Prime Collaboration Deployment に関する情報を記録するには以下のテーブルを使用してください。 すべての情報を入手する必要はありません。システムおよびネットワーク設定に関連する情報のみ収集してください。

（注） フィールドの一部は省略可能であるため、設定に適用されない場合があります。

注意 フィールドの一部はインストールを完了すると、ソフトウェアを再インストールしない限り変更できなくなります。そのため、適切な値を入力するように注意してください。 表の最後の列は、インストール後にフィールドを変更できるかどうかを示します。可能な場合は適切な CLI コマンドが表示されます。

表 *4* : サーバの設定データ

パラメータ	説明	インストール後のエントリ変更の可否
Administrator ID（管理者 **ID**）	このフィールドは、Cisco Prime Collaboration Deployment 上の CLI へのシェル アクセスをセキュアにするために使用する管理者アカウント ユーザ ID を指定します。	不可。インストール後、エントリは変更できません。 （注） インストール後、管理者アカウントを追加作成することはできますが、元の管理者アカウントユーザ ID は変更できません。
Administrator Password（管理者パスワード）	このフィールドは、CLI へのセキュアなシェル アクセスのために使用する管理者アカウントのパスワードを指定します。 このパスワードは adminsftp ユーザとも使用します。 adminsftp ユーザを、ローカル バックアップ ファイルへのアクセス、サーバ ライセンスのアップロードなどのために使用できます。 パスワードは 6 文字以上の長さになるようにしてください。英数字、ハイフン、および下線を使用できます。	可。インストール後、次の CLI コマンドを使用してエントリを変更できます。 CLI > **set password user admin**

パラメータ	説明	インストール後のエントリ変更の可否
国	一覧から、インストールを行う該当する国を選択します。	可。インストール後、次のCLIコマンドを使用してエントリを変更できます。 CLI > **set web-security**
DHCP	シスコでは、DHCP オプションで [No（いいえ）] を選択する必要があります。 [No（いいえ）] を選択した場合は、ホスト名、IP アドレス、IP マスク、ゲートウェイを入力する必要があります。	不可。インストール後、エントリは変更できません。
DNS Enable（DNS 有効）	DNSサーバがホスト名をIPアドレスへ、またはIPアドレスをホスト名へ解決します。 Cisco Prime Collaboration DeploymentではDNSサーバを使用する必要があります。 [Yes（はい）] を選択して、DNS を有効にします。	不可。インストール後、エントリは変更できません。
DNS Primary（DNS プライマリ）	プライマリ DNSサーバとして指定する DNS サーバの IP アドレスを入力します。 IP アドレスは、ドット付き 10 進表記（ddd.ddd.ddd.ddd）で入力します。	可。インストール後、次のCLIコマンドを使用してエントリを変更できます。 CLI > **set network dns** DNS およびネットワーク情報を表示するには、次のCLIコマンドを使用してください。 CLI > **show network eth0 detail**
DNS Secondary（DNS セカンダリ）（省略可能）	オプションのセカンダリ DNS サーバとして指定するDNSサーバのIPアドレスを入力します。	可。インストール後、次のCLIコマンドを使用してエントリを変更できます。 CLI > **set network dns**

パラメータ	説明	インストール後のエントリ変更の可否
ゲートウェイ アドレス	ネットワーク ゲートウェイの IP アドレスを入力します。 ゲートウェイがない場合も、このフィールドを 255.255.255.255 に設定する必要があります。ゲートウェイがない場合は、通信対象がサブネット上のデバイスに限られます。	可。インストール後、次の CLI コマンドを使用してエントリを変更できます。 CLI > **set network gateway**
ホスト名	サーバに対する一意のホスト名を入力します。 ホスト名は最大 64 文字で、英数字とハイフンを使用できます。ただし、最初の文字をハイフンにすることはできません。 **重要** どのタスクの実行中にもホスト名を変更しないでください。	可。インストール後、エントリを変更できます。 CLI > **set network hostname**
IP アドレス	サーバの IP アドレスを入力します。	可。インストール後、エントリを変更できます。 CLI > set network ip eth0
IP マスク	このマシンの IP サブネット マスクを入力します。	可。インストール後、次の CLI コマンドを使用してエントリを変更できます。 CLI > **set network ip eth0**
場所	サーバの場所を入力します。 組織内の識別できる任意の場所を入力できます。 たとえば、サーバが設置されている都道府県や市区町村などを入力します。	可。インストール後、次の CLI コマンドを使用してエントリを変更できます。 CLI > **set web-security**

パラメータ	説明	インストール後のエントリ変更の可否
MTU サイズ	最大伝送単位（MTU）は、ホストがネットワーク上で送信する最大のパケットをバイト単位で表したものです。 使用するネットワークのMTUサイズをバイト単位で入力します。 ネットワークの MTU 設定が不明な場合は、デフォルト値を使用します。 デフォルトは1500バイトを指定します。	可。インストール後、次のCLIコマンドを使用してエントリを変更できます。 CLI > **set network mtu**
NTP サーバ	同期する 1 台または複数のネットワーク タイム プロトコル（NTP）サーバのホスト名または IP アドレスを入力します。 最大 5 台の NTP サーバを入力できます。 （注） 発生する可能性のある互換性の問題、精度の問題、およびネットワーク ジッターの問題を回避するには、プライマリ ノードに指定する外部 NTP サーバを NTP v4（バージョン 4）にできます。 IPv6 アドレッシングを使用する場合、外部 NTP サーバは NTP v4 でなければなりません。	可。インストール後、インストール後にエントリを変更できます。 CLI > **utils ntp server**

パラメータ	説明	インストール後のエントリ変更の可否
マニュアルの構成	組織の名前を入力します。 **ヒント** このフィールドを使用して、複数の組織ユニットを入力できます。 複数の組織ユニット名を入力するには、エントリをカンマで区切ります。 カンマを含むエントリは、エントリ内のカンマの前に円記号を入力します。	可。インストール後、次のCLIコマンドを使用してエントリを変更できます。 CLI > **set web-security**
セキュリティ パスワード	セキュリティ パスワードを入力します。 このパスワードは、6文字以上の英数字にする必要があります。パスワードにはハイフンおよび下線を使用できますが、先頭は英数字にする必要があります。 **（注）** このパスワードを保存してください。	可。インストール後、次のCLIコマンドを使用してエントリを変更できます。 CLI > **set password user security**
状態	サーバが配置されている場所を入力します。	可。インストール後、次のCLIコマンドを使用してエントリを変更できます。 CLI > **set web-security**
タイムゾーン	ローカル タイム ゾーンおよびグリニッジ標準時（GMT）との時差を指定します。 マシンの場所に最も近いタイムゾーンを選択します。	可。インストール後、次のCLIコマンドを使用してエントリを変更できます。 CLI > **set timezone** 現在のタイムゾーン設定を表示するには、次のCLIコマンドを使用してください。 CLI > **show timezone config**

インストールの開始

このセクションは、Cisco Prime Collaboration Deployment をインストールする方法について説明します。 1 つのインストール プログラムを実行することでオペレーティング システムと Cisco Prime Collaboration Deployment をインストールします。

インストール ウィザードでの操作方法については、次の表を参照してください。

表 *5*：インストール ウィザードの操作

目的	使用するキー
次のフィールドへ移動する	タブ
前のフィールドへ移動する	**Alt+Tab**
オプションを選択する	Space バーまたは Enter
リストを上下にスクロールする	上下の矢印キー
前のウィンドウへ移動する	Space バーまたは Enter を押し、[Back（戻る）] を選択（使用可能な場合）
ウィンドウに関するヘルプ情報を参照する	Space バーまたは Enter を押し、[ヘルプ（Help）] を選択（使用可能な場合）

Cisco Prime Collaboration Deployment のインストール

PCD_VAPP.OVA ファイルの抽出

手順

ステップ 1 pcd_vApp_UCOS_10.xxxxx.iso ファイルから PCD_VAPP.OVA を抽出します。
新しい PCD_VAPP.OVA ファイルが作成されます。 ファイルサイズを確認します。ISO および OVA ファイルのサイズは異なっています。

ステップ 2 Cisco Prime Collaboration Deployment をインストールするために vCenter に PCD_VAPP.OVA ファイルを展開します。

vSphere クライアントを使用している場合、このファイルの名前は PCD_VAPP.OVA である場合があります。 VMware vSphere Web クライアントをファイルを展開するために使用している場合、ファイルを展開する前に名前を PCD_VAPP.ova（小文字）に変更する必要があります。

仮想マシンのインストール

Cisco Prime Collaboration Deployment のインストールには、この手順と VMWare のマニュアルを使用してください。

はじめる前に

この手順を開始する前に、次のことを確認または実行する必要があります。

- OVA イメージのダウンロード
- インストール前のタスクの項 を参照してください。
- 使用しているインストール タイプに応じてローカル ドライブに OVA のコピーを配置します。

インストール タイプ	ファイル名	ESXi Host のソフトウェア バージョンで使用
OVA	PCD_VAPP.OVA または PCD_VAPP.ova （注） OVA ファイルの名前は、ファイルの展開に vSphere Client または VMware vSphere Web クライアントを使用しているかどうかによって異なります。 詳細については、PCD_VAPP.OVA ファイルの抽出, （15 ページ） を参照してください。	4.1、5.0 および 5.5

- Cisco Prime Collaboration Deployment に対して仮想マシンを作成して必須ポート グループをマッピングするための以下の情報を取得します。
  - インベントリ フォルダ内で固有で、80 文字以下の新しい Cisco Prime Collaboration Deployment の名前。
  - Cisco Prime Collaboration Deployment をインストールするインベントリ フォルダがあるホストの名前。
  - VM ファイルを保存するデータストアの名前。

- VM に使用されるネットワーク ポート グループの名前。

手順

ステップ 1 vCenter へのログイン

ステップ 2 [vSphere Client（vSphere クライアント）] で、[File（ファイル）] > [Deploy OVF Template（OVF テンプレートの展開）] を選択します。
[Source（送信元）] 画面が開きます。

ステップ 3 OVA ファイルの場所を指定し、[Next（次へ）] をクリックします。
[OVF Template Details（OVF テンプレートの詳細）] 画面が開いて、ファイル サイズや VM ディスク サイズを含む製品情報が表示されます。

ステップ 4 [Next（次へ）] をクリックします。
[Name and Location（名前および場所）] 画面が開きます。

ステップ 5 VM の名前を指定し、OVA が展開される場所を選択します。 [Next（次へ）] をクリックします。
[Host/Cluster（ホスト/クラスタ）] 画面が開きます。

ステップ 6 OVA をインストールするデータ センターまたはクラスタを選択して、[Next（次へ）] をクリックします。
[Storage（ストレージ）] 画面が開きます。

ステップ 7 適切な VM ストレージ プロファイルを選択し、[Next（次へ）] をクリックします。
[Disk Format（ディスク形式）] 画面が表示されます。

ステップ 8 適切なディスク形式を選択します。 [Next（次へ）] をクリックします。
[Network Mapping（ネットワーク マッピング）] 画面が表示されます。

ステップ 9 必要に応じて、OVA が展開に使用する必要があるネットワークを選択します。 [Next（次へ）] をクリックします。

ステップ 10 選択したオプションを確認し、変更が必要ない場合、[Finish（完了）] をクリックして OVA インストールを開始します。

ステップ 11 一度インストールが完了したら、新規インストールされた仮想マシンが vCenter 内の選択したロケーションに表示されます。

Cisco Prime Collaboration Deployment の仮想マシンへのインストール

Cisco Prime Collaboration Deployment は OVA インストールの一部としてインストールされますが、設定する必要があります。

手順

ステップ 1 [vCenter] ウィンドウで、新しくインストールされた仮想マシン コンソールを開きます。

ステップ 2 仮想マシンの電源をオンにします。 インストールが自動的に開始されます。

ステップ 3 既存の設定情報があるかどうかを確認されたら [Continue（継続）] をクリックして先に進みます。

ステップ 4 [Platform Installation Wizard（プラットフォーム インストール ウィザード）] 画面が表示されます。[Proceed（続行）] をクリックして、ウィザードを続行します。

ステップ 5 [Basic Install（基本インストール）] 画面で、[Continue（継続）] をクリックします。

ステップ 6 [Timezone Configuration（タイムゾーン設定）] 画面で、タイムゾーンを選択し、[OK] をクリックします。

ステップ 7 [Auto Negotiation Configuration（自動ネゴシエーション設定）] 画面で、[Continue（継続）] をクリックします。

ステップ 8 OS デフォルトの MTU サイズを変更するかどうかを尋ねられたら、[No（いいえ）] をクリックして続行します。

ステップ 9 ネットワーク設定では、ノードにスタティック ネットワーク IP アドレスを設定するか、Dynamic Host Configuration Protocol（DHCP）を使用するかを選択できます。 スタティック IP アドレスの使用が推奨されます。 DHCP を使用する場合は、スタティック DHCP を使用してください。

- ネットワーク内に設定されている DHCP サーバがない場合に DHCP を使用するときは、[Yes（はい）] を選択します。 ネットワークが再開され、[Administrator Login Configuration（管理者ログイン設定）] ウィンドウが表示されます。
- ノードにスタティック IP アドレスを設定する場合は、[No（いいえ）] を選択します。 [Static Network Configuration（静的ネットワーク設定）] ウィンドウが表示されます。

ステップ 10 DHCP を使用しないことを選択した場合は、静的ネットワーク設定の値を入力して [OK] を選択します。
[DNS Client Configuration（DNS クライアント設定）] ウィンドウが表示されます。

ステップ 11 DNS を有効にするには [Yes（はい）] を選択し、DNS クライアントの情報を入力して [OK] を選択します。
ネットワークが新しい設定情報を使用して再開され、[Administrator Login Configuration（管理者ログイン設定）] ウィンドウが表示されます。

ステップ 12 管理者ログイン情報とパスワード情報を入力します。

（注） 管理者ログインは、先頭がアルファベットで 6 文字以上必要です。英数字、ハイフン、およびアンダースコアを使用できます。 Cisco Unified Communications Operating System Administration、コマンドライン インターフェイス、および Disaster Recovery System にログインするには、管理者ログインが必要です。

[Certificate Information（証明書情報）] ウィンドウが表示されます。

ステップ 13 証明書情報を入力します。

- マニュアルの構成

- 単位
- 場所
- 状態
- 国

ステップ 14 [OK] をクリックして続行します。

ステップ 15 Network Time Protocol（NTP）クライアント設定情報を入力します。 この設定をテストするには、[Test（テスト）] をクリックします。

ステップ 16 NTP を設定するには、[Proceed（続行）] をクリックします。

ステップ 17 画面の指示に従って、セキュリティ パスワードを入力します。

ステップ 18 プラットフォームの設定が完了したら、[OK] をクリックしてインストールを完了します。 このタスクは完了するまで数分かかります。

CLI を使用した Cisco Prime Collaboration Deployment のアップグレード

Cisco Prime Collaboration Deployment のソフトウェア バージョンをアップグレードするには、**utils system upgrade initiate** CLI コマンドを使用します。 外部ファイルシステムのどこに新規 iso を置いたか、または Cisco Prime Collaboration Deployment 自体の上に置いたかによって 4 つのオプションがあります。

はじめる前に

この手順を開始する前に、Cisco Prime Collaboration Deployment からアクセス可能なネットワーク ロケーションまたはリモート ドライブに ISO を置く必要があります。

手順

ステップ 1 Cisco Prime Collaboration Deployment 上に ISO を置く場合は、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバの /upgrade フォルダにアップロードします（これはアップグレード タスクで使用される ISO のアップロードと同じ方法で実行します）。

- sftp adminsftp@<PCD IP>
- cd upgrade
- put <name of iso file>

（注） リモート ファイル システムを使用する場合は ISO ファイルをそこに置きます。 SFTP または FTP でアクセスできることを確認します。

ステップ 2 次に、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバの CLI インターフェイスにログインし、**utils system upgrade initiate** CLI コマンドを使用します。
ISO が置かれる場所によってオプションを選択するように要求されます。

まずアップグレードをキャンセルしてからウィンドウを閉じてください。

- 警告：アップグレードをキャンセルするまでこのウィンドウを閉じないでください。
- 1) SFTP 経由のリモート ファイルシステム
- 2) FTP 経由のリモート ファイルシステム
- 3) ローカル DVD/CD
- 4) ローカル アップロード ディレクトリ
- q) quit
- オプション（1 ～ 4 または q）を選択してください：

ステップ 3 ISO が Cisco Prime Collaboration Deployment の /upgrade フォルダにある場合、オプション **4** を選択します。

ステップ 4 ISO ファイルがリモート ファイル システム上にある場合、SFTP または FTP を使用するかどうかに応じてオプション **1** または 2 を選択します。

ステップ 5 システムは特定のディレクトリでアップグレードする適切なファイルを検索し、これらのファイル名を表示します。 Cisco Prime Collaboration Deployment システムをアップグレードするファイルを、そのファイルの数を指定することで選択します。

ステップ 6 アップグレードに成功した場合にシステムが自動的にアップグレードされたバージョンに切り替えられるかどうか指定します。

例：
Automatically switch versions if the upgrade is successful (yes/no): yes

ステップ 7 インストールの開始
Start installation (yes/no): yes

- The upgrade log is install_log_2013-10-07.20.57.17.log
- Upgrading the system. Please wait...
- 10/07/2013 20:57:18 file_list.sh|Starting file_list.sh|<LVL::Info>
- 10/07/2013 20:57:18 file_list.sh|Parse argument method=local_upload_dir|<LVL::Debug>
- 10/07/2013 20:57:18 file_list.sh|Parse argument source_dir=|<LVL::Debug>
- 10/07/2013 20:57:18 file_list.sh|Parse argument dest_file=/var/log/install/downloaded_versions|<LVL::Debug>

インストールが開始されます。

ステップ 8 インストールが完了したら、**show version active** CLI コマンドを使用して、Cisco Prime Collaboration Deployment ソフトウェアの現在のバージョンを表示します。

- Active Master Version: 10.0.x.xxxxx-xxxx

- Active Version Installed Software Options
- No Installed Software Options Found.

インストール後の作業

手順

ステップ 1 バックアップを設定します。 Cisco Prime Collaboration Deployment を頻繁にバックアップするようにしてください。 バックアップ スケジュールをセットアップする方法の詳細についてはCLI コマンドおよび DRS, （119 ページ）を参照してください。

ステップ 2 有効な Network Time Protocol（NTP）があることを確認します。 この確認を実行するには、Cisco Prime Collaboration Deployment コマンド行インターフェイスにログインし、**utils ntp status** を入力します。

管理者パスワードとセキュリティパスワードのリセット

管理者パスワードやセキュリティ パスワードがわからなくなった場合、次の手順に従ってパスワードをリセットします。

パスワードをリセットするには、システム コンソールを使用してシステムに接続します。セキュア シェル セッションを介してシステムに接続している状態ではパスワードをリセットできません。

（注） この手順中、物理的にシステムにアクセスできるか確認するため、有効な CD または DVD をディスク ドライブから取り出し、再挿入する必要があります。

手順

ステップ 1 次のユーザ名とパスワードを使用してシステムにログインします。

- ユーザ名：pwrecovery
- パスワード：pwreset

[Welcome to platform password reset（プラットフォーム パスワードのリセットへようこそ）] ウィンドウが表示されます。

ステップ 2 任意のキーを押して続行します。

ステップ 3 ディスク ドライブに CD または DVD が入っている場合は、ここで取り出します。

ステップ 4 任意のキーを押して続行します。
CD または DVD がディスク ドライブから取り出してあるかが確認されます。

ステップ 5 有効な CD または DVD をディスク ドライブに挿入します。
（注） このテストでは、音楽 CD ではなくデータ CD を使用する必要があります。 ディスクを挿入したかが確認されます。

ステップ 6 ディスクが挿入されていることをシステムが確認した後、次のいずれかのオプションを入力して続行するよう要求されます。

- **a** を入力して、管理者パスワードをリセットする。
- **s** を入力して、セキュリティ パスワードをリセットする。
- **q** を入力して、終了する。

ステップ 7 選択したタイプの新しいパスワードを入力します。

ステップ 8 新しいパスワードを再入力します。
このパスワードは、6 文字以上にする必要があります。 システムが新しいパスワードの有効性を確認します。 パスワードが有効性テストに合格しない場合、新しいパスワードを入力するよう要求されます。

ステップ 9 システムが新しいパスワードの強度を検証したら、パスワードがリセットされます。 任意のキーを押してパスワード リセット ユーティリティを終了するよう促されます。

第 3 章

Cisco Prime Collaboration Deployment 機能

- Cisco Prime Collaboration Deployment の考慮事項，23 ページ
- サポートされているリリース，26 ページ
- クラスタ インベントリ，27 ページ
- タスク管理，34 ページ
- 管理ツール，64 ページ

Cisco Prime Collaboration Deployment の考慮事項

Cisco Prime Collaboration Deployment を使用すると、ユーザはインベントリ内のサーバ上でタスク（移行やアップグレードなど）を実行することができます。

Cisco Prime Collaboration Deployment の使用を開始するには以下のステップにしたがってください。

ステップ	タスク
ステップ 1：インベントリの作成	タスクを実行するには、まずインベントリ内にクラスタが存在する必要があります。 Unified Communication アプリケーションをすでに実行している UC クラスタをインベントリに追加するには、[Inventory（インベントリ）] > [Clusters（クラスタ）] > [Discovery Cluster（ディスカバリ クラスタ）] 機能を使用します。 既存のクラスタを新規仮想マシンに移行するには、[Inventory（インベントリ）] > [Clusters（クラスタ）] > [Define Migration Destination Cluster（移行宛先クラスタの定義）] に移動します （移行タスク, （35 ページ） を参照）。 新しいクラスタをインストールするには、[Inventory（インベントリ）] > [Clusters（クラスタ）] > [Define New UC Cluster（新規 UC クラスタの定義）] 機能を使用します （インストール タスク, （58 ページ） を参照）。 既存のクラスタから新規マシン クラスタに移行する場合、または新規クラスタをインストールする場合、[Inventory（インベントリ）] > [ESXi Hosts（ESXi ホスト）] を使用して、これらの仮想マシンを含む ESXi ホストをインベントリに追加する必要があります （ESXi ホスト サーバの追加, （29 ページ）を参照）。

ステップ	タスク
ステップ 2：タスクの作成	インベントリ内のクラスタ上で操作を実行するためのタスクを作成できます。 タスク作成時にオプションで以下のことを実行できます。 • クラスタの選択 （注） これは必要なクラスタのタイプによって異なります。たとえば、検出されたクラスタまたは移行クラスタである場合があります。 • タスクを実行するタイミングの決定 • タスクを個別に実行するか、手順間で一時停止するか決定します。 これらのアクションのいずれかを実行するには、以下の手順から選択します。 • 既存のクラスタから VM マシンの新規クラスタに移行するには、移行タスク，（35 ページ）を参照してください。 • 既存のクラスタの Unified Communications Manager バージョンをアップグレードするには、アップグレード タスク，（47 ページ）を参照してください。 • 既存のクラスタのバージョンを切り替えるには、バージョン切り替えタスク，（50 ページ）を参照してください。 • 既存のクラスタを再起動するには、サーバ再起動タスク，（53 ページ）を参照してください。 • 既存のクラスタ内の 1 つ以上のサーバのホスト名または IP アドレスを変更するには、再アドレス付けタスク，（55 ページ）を参照してください。 • VM マシンから新規 UC クラスタを作成するには、インストール タスク，（58 ページ）を参照してください。
ステップ 3：タスクのモニタ	一度タスクが作成されたら、タスクを表示またはトラッキングするために [Monitoring（モニタリング）] ページを使用できます。 このページはタスクをキャンセル、一時停止、または再開するためにも使用できます。 作成したタスクを表示するには、タスク ステータスのモニタ，（63 ページ）を参照してください。
ステップ 4：管理タスク	電子メール通知を設定できます。 E メール通知，（132 ページ）を参照してください。

サポートされているリリース

次のリストは、各タスクのサポートされるリリースを示しています。

クラスタ検出

- サポートされる Unified CM リリース：6.1(5)、7.1(3)、7.1(5)、8.0(1-3)、8.5(1)、8.6(1-2)、9.0.(1)、9.1(1)、9.1(2)、10.x
- サポートされる Cisco Unified Presence (CUP) のリリース：8.5、8.6
- Cisco Unified CM - サポートされる IM and Presence のリリース：9.0(1)、9.1(1)、10.x
- サポートされる Cisco Unified Contact Center Express リリース：8.5.1、9.0、9.0.2、および 10.x
- サポートされる Cisco Unity Connection リリース：8.6.1、8.6.2、9.x および 10.x

10.x クラスタへの移行

- サポートされる Unified CM リリース：6.1(5)、7.1(3)、7.1(5)、8.0(1-3)、8.5(1)、8.6(1-2)、9.0.(1)、9.1(1)、9.1(2)、10.0(1)
- サポートされる Cisco Unified Presence（CUP）のリリース：8.5(4)、8.6(3)、8.6(4)、8.6(5)
- Cisco Unified CM - サポートされる IM and Presence のリリース：9.0(1)、9.1(1)、10.0(1)
- サポートされる Cisco Unified Contact Center Express リリース：移行はサポートされていません。
- サポートされる Cisco Unity Connection のリリース：移行はサポートされていません。

アップグレードタスク：（アプリケーションサーバのアップグレードまたは COP ファイルのインストール）

- サポートされる Unified CM のリリース：8.6(1-2)、9.0.(1)、9.1(1)、9.1(2)、10.x
- サポートされる Cisco Unified Presence（CUP）のリリース：8.6(3)、8.6(4)、8.6(5)
- Cisco Unified CM - サポートされる IM and Presence のリリース：9.0(1)、9.1(1)、10.x
- サポートされる Cisco Unified Contact Center Express のリリース：9.0(2)、10.x
- サポートされる Cisco Unity Connection のリリース：
  - 8.6(x) から 8.6(x)
  - 8.6(x) から 9.x
  - 9.x から 9.x
  - 10.0(1) から 10.x

再起動タスク

- サポートされる Unified CM のリリース：8.6(1-2)、9.0.(1)、9.1(1)、9.1(2)、10.x
- サポートされる Cisco Unified Presence（CUP）のリリース：8.6(3)、8.6(4)、8.6(5)
- Cisco Unified CM - サポートされる IM and Presence のリリース：9.0(1)、9.1(1)、10.x
- サポートされる Cisco Unified Contact Center Express のリリース：9.0(2)、10.x
- サポートされる Cisco Unity Connection リリース：8.6(1-2)、9.x、10.x

バージョン切り替えタスク

- サポートされる Unified CM のリリース：8.6(1-2)、9.0.(1)、9.1(1)、9.1(2)、10.x
- サポートされる Cisco Unified Presence（CUP）のリリース：8.6(3)、8.6(4)、8.6(5)
- Cisco Unified CM - サポートされる IM and Presence のリリース：9.0(1)、9.1(1)、10.x
- サポートされる Cisco Unified Contact Center Express のリリース：9.0(2)、10.x
- サポートされる Cisco Unity Connection リリース：8.6(1-2)、9.x、10.x

新規 10.x クラスタをフレッシュ インストールします。

- サポートされる Unified CM リリース：10.x
- サポートされる IM and Presence のリリース：10.x
- サポートされる Cisco Unified Contact Center Express リリース：10.5(1)
- サポートされる Cisco Unity Connection のリリース：10.5(1)

再アドレス付けタスク（クラスタ内の 1 つまたは複数のノードに対してホスト名または IP アドレスを変更）

- サポートされる Unified CM リリース：10.x
- サポートされる IM and Presence のリリース：再アドレス付けはサポートされていません。
- サポートされる Cisco Unified Contact Center Express リリース：10.5(1)
- サポートされる Cisco Unity Connection のリリース：10.5(1)

クラスタ インベントリ

クラスタは、タスクで使用可能になる前に Cisco Prime Collaboration Deployment に追加される必要があります。既存のクラスタをインベントリに追加するにはクラスタ検出機能を使用します。 古いクラスタを新しい仮想マシンに移行することで新規クラスタを作成するには、[Define Migration Destination Cluster（移行宛先クラスタの定義）] ボタンをクリックします。 新規クラスタをインストールするには、[Define New UC Cluster（新規 UC クラスタの定義）] ボタンをクリックします。

クラスタの検出

クラスタの検出機能を使用すると、Cisco Prime Collaboration Deployment はすでに Unified Communications アプリケーションを実行しているサーバと通信し、そのクラスタ情報を Cisco Prime Collaboration Deployment インベントリに追加できます。

クラスタの検出操作が実行されると、Cisco Prime Collaboration Deployment はクラスタのパブリッシャと通信し、クラスタ情報を取得します。 その後、各サーバに個別に通信し、設定情報を取得するために cop ファイルをサーバにインストールし、ホスト名、IP、製品タイプ、またそのサーバに対するアクティブおよび非アクティブ バージョンに関する情報を収集します。

（注） クラスタの検出には数分かかる場合があります。 完了する前に検出をキャンセルすると、別の機会に検出手順を再起動する必要があります。 一度ディスカバリが完了したら、[Cluster Inventory（クラスタ インベントリ）] ページにリストされるクラスタ内の各ノードに対する情報を参照することができます。

（注） どのアプリケーションがサポートされるかを確認するには、「サポートされているリリース, （26 ページ）」を参照してください。

（注） クラスタに Unified CM および CUP（または Unified CM および IM and Presence）サーバが含まれる場合、クラスタの検出は Unified CM クラスタの一部として CUP または IM and Presence ノードを検出します。 クラスタが検出されると、各ノードの製品タイプおよびバージョンが [Clusters（クラスタ）] 画面に表示されます。

すでに Unified Communications アプリケーションを実行しているクラスタを検出するには、以下の手順を使用します。

手順

ステップ 1 Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションのメニューから [Inventory（インベントリ）] > [Clusters（クラスタ）] を選択して [Clusters（クラスタ）] ページにアクセスします。

ステップ 2 既存のクラスタを検出するには、[Clusters（クラスタ）] ページの最上部の [Discover Cluster（クラスタの検出）] ボタンをクリックします。

ステップ 3 [Discover Cluster（クラスタの検出）] ウィザードが表示されます。 ウィザードの手順 1 で、以下の必須情報を入力します。

- クラスタのニックネーム（このクラスタに作成した名前）
- パブリッシャ ホスト名/IP アドレス

  （注） Unified Communications Manager および IM and Presence (IM/P) の両方のノードを持つクラスタに対して、Unified Communications Manager パブリッシャを入力します。

- OS 管理者ユーザ名
- OS 管理パスワード

ステップ 4 [Next（次へ）] をクリックします。

重要 検出中、COP ファイル（ciscocm.ucmap_platformconfig.cop）がクラスタ内のすべてのノードのアクティブなパーティションに自動的にインストールされます。 この COP ファイルはクラスタ検出プロセスに対してのみ使用され、コール マネージャにその他の影響を及ぼしません。

ステップ 5 ウィザードの手順 2 で、Cisco Prime Collaboration Deployment は、パブリッシャのサーバ インベントリからクラスタ ノードのリストを生成します。 終了するまでに数分かかる場合があります。 リストが完全に生成された場合、「Cluster Discovery Process is complete（クラスタ検出プロセスが完了しました）」というメッセージが表示されます。

ステップ 6 [Next（次へ）] をクリックしてウィザードの手順 3 に進みます。

ステップ 7 各クラスタ ノードに機能を割り当てる（オプション）には、[Assign Functions（機能の割り当て）] ボタンを使用します。 [機能の割り当て（Assign Functions）] ダイアログボックスが表示されます。

ステップ 8 [機能の割り当て（Assign Functions）] ダイアログ ボックスから、[Previous（前へ）] または [Next（次へ）] をクリックして修正するノードを選択します。 ホスト名のフィールドはどのノードを選択したかを示しています。 各ノードで、1 つまたは複数の機能を割り当て、[Notes（メモ）] フィールドに機能割り当てに対するメモを追加します。

（注） 機能を割り当てると、各ノードの機能を定義することができますが、アクティブ化されるサービスに影響はありません。 この情報は、タスクのデフォルトのシーケンスを決定するために使用できます。

ステップ 9 必要なすべての機能を割り当てたら、[OK] をクリックします。

ステップ 10 [Finish（終了）] をクリックします。

[Clusters（クラスタ）] ページに、クラスタ名、製品およびバージョンおよび [Discovered（検出済み）] タイプのクラスタ タイプを示すクラスタが表示されます。 検出のステータスは [Successful（成功）] と表示されます。

ESXi ホスト サーバの追加

重要 Cisco Prime Collaboration Deployment に ESXi ホストを追加すると、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバはそのホストに NFS マウントとしてマウントされます。 将来的に Cisco Prime Collaboration Deployment マシンを削除する場合、まず ESXi ホストを Cisco Prime Collaboration Deployment から削除して、ホスト上で NFS マウントが古くなることを防ぐ必要があります。

（注） Cisco Prime Collaboration Deployment をシャット ダウンする場合、「utils system shutdown」CLI コマンドを使用することをお勧めします。

手順

ステップ 1 Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションのメニューから [Inventory（インベントリ）] > [ESXi Hosts（ESXi ホスト）] を選択して [ESXi Hosts（ESXi ホスト）] ページにアクセスします。

ステップ 2 [ESXi Hosts（ESXi ホスト）] ページの最上部で [Add ESXi Host（ESXi ホストの追加）] ボタンをクリックします。

ステップ 3 [Add Host Server（ホスト サーバの追加）] ダイアログボックスが表示されます。 次の情報を入力します。

- Hostname/IP Address
- Root login
- Root password

ステップ 4 [OK] をクリックして ESXi ホストを追加します。

移行クラスタの作成

移行タスクを作成する前に、移行クラスタを作成する必要があります。 これを行うには、まず移行元の既存のクラスタを検出します（「クラスタの検出, （28 ページ）」を参照）。 次に、以下の手順を使用して移行クラスタを定義します。

（注） 移行クラスタを定義した後、移行タスク, （35 ページ） に進んでいつどのように移行を実行するか定義します。

手順

ステップ 1 [Inventory（インベントリ）] > [Cluster（クラスタ）] を選択します。

ステップ 2 [Define Migration Destination Cluster（移行宛先クラスタの定義）] をクリックして、[Configure Destination Cluster（宛先クラスタの設定）] ウィザードを開始します。

ステップ 3 手順 1 では、[Configure Destination Cluster（宛先クラスタの設定）] ウィザードでクラスタを指定し、ドロップダウン リストから送信元の UC クラスタを選択します。 [Destination Cluster Name（宛先クラスタ名）] フィールドに名前を入力し、適切な [Destination Network Settings（宛先ネットワーク設定）] オプションを選択します。

- ネットワーク オプションを保持するには、[Use the source node network settings for all destination nodes（すべての宛先ノードに対して送信元ノードネットワークを使用）]オプション ボタンを選択します。
- ネットワーク オプションを保持しない場合、[Enter new network settings for one or more destination nodes（1 つまたは複数の宛先ノードに対する新規ネットワーク設定を入力）] オプション ボタンを選択します。

ステップ 4 [Next（次へ）] をクリックします。

ステップ 5 ウィザードの手順 2 が開きます。 [Assign Destination Cluster Nodes（宛先クラスタ ノードの割り当て）] ボタンをクリックして [Configure Destination Cluster（宛先クラスタの設定）] ウィンドウを開きます。

ステップ 6 このページで、各送信元ノードに対して宛先 VM を選択することで宛先クラスタを設定します。送信元ノード情報（ホスト名）はページの最上部に表示され、使用可能な仮想マシンがページの最下部に表示されます。 VM 名に関連付けられているオプション ボタンをクリックして VM を選択します。

ネットワーク情報を送信元ノード情報と同じまま（これがデフォルト）にするには、[Network（ネットワーク）] 入力の選択を [Use Source Node Network Settings（送信元ノード ネットワーク設定を使用）] のままにします。

このノードに新しいネットワーク情報を入力する場合は、“[Network（ネットワーク）]” ボックス エントリで [Enter New network settings（新規ネットワーク設定の入力）] を選択します。

IP アドレスを変更する必要がある場合は、次を入力してください。

- 新しい IP アドレス
- 新しいホスト名
- マスク
- ゲートウェイ

このノードに対する情報が入力されたあと、画面の最下部で [Next Node（次のノード）] をクリックしてクラスタ内の次のノードに移動します。 クラスタ内に複数のノードがある場合、送信元クラスタ内の各ノードに対してこれらの手順（VM の割り当ておよび必要に応じて新規 IP/ホスト名の入力）を繰り返す必要があります。

（注） Cisco Prime Collaboration Deployment を使用すると、クラスタ上の特定のノードに対するネットワーク情報を変更するか、すべてを変更することができます。

（注） DHCP が送信元ノードで使用されている場合、宛先ノードも DHCP を使用するように設定され、このウィザードではネットワーク設定を変更するオプションは用意されていません。

ステップ 7 すべてのノードに宛先 VM が割り当てられると、[Done（完了）] をクリックして [Configure Destination Cluster（宛先クラスタの設定）] ウィンドウを閉じます [Next（次へ）] をクリックしてウィザードの手順 3 に進みます。

ステップ 8 ウィザードの手順 3、[Configure NTP/SMTP settings（NTP/SMTP の設定）] が開きます。 このウィンドウには、送信元ノードの情報を使用して自動入力されます。 移行タスクが実行されるときに

移行ノードに適用される [Network Time Protocol (NTP)（ネットワーク タイム プロトコル（NTP））] サーバ設定を入力します。 SMTP サーバ設定を入力します（任意）。 [Next（次へ）] をクリックします。

重要 プロキシ TFTP 設定では、ネットワーク移行が「オフクラスタ」で実行される場合、プロキシ TFTP 内でそのオフクラスタ新規ホスト名と IP アドレスを手動で設定する必要があります。 オフクラスタは、TFTP 機能が特定の Unified Communications Manager クラスタの一部ではないプロキシによって実行されている状態を指します。 移行中は、その TFTP サーバ（クラスタの一部ではない）は修正されません。 そのサーバのホスト名/IP アドレスを変更したい場合、（Cisco Prime Collaboration Deployment とではなく）別のプロセスとして実行する必要があります。

ステップ 9 [Define Migration Destination（移行宛先の定義）] の手順 4、[Configure DNS Settings（DNS の設定）] が開きます。 移行クラスタ ノードに対して DNS を設定できます。 ノードに対して DNS 設定を変更するには、テーブルからノードを選択し、[Assign DNS Settings（DNS 設定の割り当て）] をクリックします。プライマリおよびセカンダリ DNS を入力し、変更を適用するには、[OK] をクリックして変更を適用します。

重要 移行時にドメイン名は変更できません。

ステップ 10 [Finish（完了）] をクリックするとウィザードが閉じられ、変更が保存されます。
作成した新規移行クラスタを反映する行がクラスタ テーブルに追加されます。

フレッシュ インストールのために新規クラスタを追加

クラスタのフレッシュ インストールに使用されるノードを定義するには、以下の手順を使用します。

手順

ステップ 1 Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションのメニューから [Inventory（インベントリ）] > [Clusters（クラスタ）] を選択して [Clusters（クラスタ）] ページにアクセスします。

ステップ 2 [Define New UC Cluster（新規 UC クラスタの定義）] をクリックします。

ステップ 3 [Define Cluster（クラスタの定義）] ウィザードが表示されます。 ウィザードの手順 1 で、クラスタ名を入力します。 [Next（次へ）] をクリックします。

ステップ 4 [Add Cluster（クラスタの追加）] ウィザードの手順 2 を使用すると、クラスタにノードを追加できます。 [Cluster Name（クラスタ名）] テーブルの最上部の [Add Node（ノードの追加）] ボタンをクリックして開始します。

ステップ 5 [Add Node（ノードの追加）] ダイアログボックスが表示されます。 このダイアログ ボックスには、名前およびホストでソートされる、すべての利用可能な VM をリストするテーブルが含まれます。 ページの最上部で、このノードに対する [Network（ネットワーク）] 設定に入力します。ページの中央で、ノードに対して [Functions（機能）] を選択し、最下部の近くでこのノードに対

して [VM] を選択します。 追加する VM を選択し、VM テーブルの下のセクションで以下の情報を入力します。

a) [Network（ネットワーク）] の下で、[Use DHCP with reservations（予約で DHCP を使用）] または [Static IP Address（スタティック IP アドレス）] を選択します。 予約がある DHCP のオプションが選択された場合、DHCP サーバ（その VM の MAC アドレスと関連付けられている）上で予約のある IP アドレスを入力する必要があります。 [Static IP Address（スタティック IP アドレス）] が選択された場合、IP アドレスとサブネットを入力する必要があります。
UCCX サーバを追加する場合は、ネットワーク設定に DHCP を使用しないでください。

b) [Functions（機能）] で、適切なチェックボックスをチェックして、VM に特定の機能を割り当ててください。 各アプリケーション タイプに対して、定義されるクラスタ内の少なくとも 1 つのノードに対して [Publisher（パブリッシャ）] 機能をチェックする必要があります。
下の [Notes（メモ）] フィールド内に、割り当てられる機能に関するメモを追加することもできます。

c) [Virtual Machines（仮想マシン）] でこのノードに対する VM を選択します。 クラスタのフレッシュ インストールに使用する VM は電源オフの状態の新規 VM である必要があります。 既存の実行される CUCM 上にはインストールしないでください。これはインストールするアプリケーションに対する適切な OVA で作成したフレッシュな VM である必要があります。

ステップ 6 [OK] をクリックします。

ステップ 7 追加した VM は [Cluster Name（クラスタ名）] テーブルにリストされます （ノードをクラスタにさらに追加するには、すべてのノードが追加されるまで手順 4 から 6 を繰り返してください）。
[Cluster Node（クラスタ ノード）] テーブルにすべてのノードが追加されたら、[Next（次へ）] をクリックします。

ステップ 8 [Configure Cluster Wide Settings（クラスタ幅設定）] ページが表示されます。 このクラスタに対する OS 管理クレデンシャル、アプリケーション クレデンシャル、セキュリティ パスワード、SMTP 設定、および証明書情報を入力します。 [Next（次へ）] をクリックします。
証明書属性は以下で構成されます。

- 国
- マニュアルの構成
- 組織単位
- 州/県
- タイムゾーン

ステップ 9 [Configure DNS Settings（DNS 設定）] 画面が表示されます。 DNS 設定はオプションです。 ノードに DNS 設定を追加する場合、ノードを選択して [Assign DNS Settings（DNS 設定の割り当て）] ボタンをクリックします。
UCCX アプリケーションが DNS を使用する必要があります。

ステップ 10 [Configure NTP Settings（NTP 設定）] 画面が表示されます。 少なくとも一つの NTP サーバを入力してください。 DNS を使用しない場合は、これは IP アドレスである必要があります。 DNS を使用する場合は、FQDN が可能です。

（注） ベスト プラクティスは、少なくとも 2 つの NTP サーバを定義することです。

[Next（次へ）] をクリックします。

ステップ 11 [Configure NIC Settings（NIC 設定）] ページが表示されます。 NIC 設定の変更はオプションです。 [Next（次へ）] をクリックして継続し、デフォルト値 1500 を使用します。 または、設定を変更する場合は、サーバを選択し、552 から 1500 までの間の MTU サイズを入力し、[Apply to Selected（選択したものへ適用）] をクリックします。 NIC 構成の設定が終了したら、[Next（次へ）] をクリックします。

ステップ 12 クラスタ内の各ノードのタイムゾーンを選択します。 タイムゾーンを選択するには、ノードを選択し、最上部のボックスから目的のタイムゾーン設定を選択し、[Apply to Selected（選択したものへ適用）] ボタンをクリックします。
すべてのノードに対するタイムゾーンの設定が終了したら、[Finish（完了）] をクリックします。

ステップ 13 新規インストール クラスタが、クラスタ タイプ [New Install（新規インストール）] で [Clusters（クラスタ）] 画面に表示されます。 クラスタは定義されていますがまだ作成されていません。 クラスタをインストールする準備ができたら、インストール タスクを作成します。 インストール タスクは定義したインストール クラスタを使用してクラスタを作成します。

タスク管理

クラスタおよび ESXi ホストが Cisco Prime Collaboration Development インベントリに追加されたら、クラスタを管理するタスクを作成できます。 各タスクには次のような共通機能があります。

- 各タスクは単一のクラスタに適用されます
- 各タスクのデフォルトのシーケンス（たとえば、どのサーバがいつ影響を受けるかなど）は、定義したサーバ機能に基づいて適用されます
- 各タスクのシーケンスは必要に応じてカスタマイズできます
- 各タスクは即時にまたは後で開始するようスケジュールできます
- タスクは、特定の開始時間なしに作成できます。 この場合、[Monitoring（モニタリング）] ページを介して適宜タスクを手動で開始できます

移行、インストール、およびアップグレード タスクでは、1 つ以上の Cisco Option Packages (COP) または ISO ファイルを選択することが必要です。 これらのファイルは、Cisco.com からダウンロードして、タスク作成の前に Cisco Prime Collaboration Deployment にアップロードする必要があります。 「adminsftp」アカウントおよび OS 管理パスワードを使用して、任意の SFTP クライアントでファイルをアップロードできます。 移行および .iso インストール ファイルは /fresh_install にアップロードする必要があります。一方、既存のサーバにインストールする必要のあるアップグレード .iso または .cop ファイルは /upgrade ディレクトリに置く必要があります。

（注） 移行およびインストール .iso ファイルは起動可能である必要があります。

移行タスク

はじめる前に

クラスタ移行を実行するには、移行タスクを作成する前に宛先仮想マシンでインストールの準備ができている必要があります。 次の作業が完了していることを確認してください。

1 （**VMware**）：新しいクラスタのハードウェアを展開して、ESXi をインストールします。

2 （**.iso ファイル**）：ターゲット リリースに対して推奨される OVA および .ISO イメージをダウンロードし、.iso ファイルの SFTP を Cisco Prime Collaboration Deployment サーバの /fresh_install ディレクトリで実行します。

3 （**VMware**）：宛先ノードに対して VM を作成するために Cisco 推奨の OVA を展開します。手順 2 でダウンロードした Cisco OVA を使用して、ESXi ホスト上に適切な数のターゲット仮想マシンを作成します（既存のクラスタ内の各サーバに対して 1 つの新規仮想マシン）。 新規 VM でネットワークを設定します。

4 （**Cisco Prime Collaboration Deployment GUI**）：Cisco Prime Collaboration Deployment インベントリに仮想マシンを含む ESXi ホストを追加します。 Cisco Prime Collaboration Deployment に ESXi ホストを追加する詳細は、ESXi ホスト サーバの追加, （29 ページ） を参照してください。

5 （**Cisco Prime Collaboration Deployment GUI**）：既存のクラスタ（送信元クラスタ）がクラスタ インベントリに表示されるように、クラスタ ディスカバリを実行したことを確認します。クラスタ検出の詳細については、クラスタの検出, （28 ページ）を参照してください。

6 （**Cisco Prime Collaboration Deployment GUI**）：MCS 送信元ノードおよびターゲット仮想マシン間のマッピングを定義するために移行クラスタ（[Inventory（インベントリ）] > [Clusters（クラスタ）]）を作成します。

重要 移行クラスタが作成されると、ユーザはすべての宛先ノードが同じホスト名/IP アドレスを保持するか、またはこれらのアドレスの一部が変更されるかを指定します。

- すべての宛先ノード オプションに対して送信元ノードの設定を使用することは、後出の移行フロー チャートで「単純な移行」と呼ばれています。
- 1 つまたは複数の宛先ノードオプションに新規ネットワーク設定を入力することは後出のフロー チャートで「ネットワーク移行」と呼ばれています。

7 （**Cisco Prime Collaboration Deployment GUI**）：電子メール通知の設定（オプション）

- [Administration（管理）] > [Email Notification（電子メール通知）] に移動します。
- 電子メール通知が設定されている場合、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバは移行タスク中に発生する可能性のあるエラー状態に関する電子メールを送信します。

8 （**Cisco Prime Collaboration Deployment GUI**）：移行タスクを作成します（次の手順を参照）。

特記事項：セキュリティが有効になったクラスタを移行する場合は CTL 更新, （125 ページ） で特別な指示を参照してください。 ネットワーク移行で移行を実行する場合（1 つ以上のホスト名またはIPアドレスが送信元および宛先ノード間で変更される場合）、移行タスクを開始する前にDNS サーバ内の宛先ノードの IP アドレスおよびホスト名を必ず更新してください。

移行タスクの作成

クラスタを新規仮想マシンに同時にアップグレードおよび移行するように移行タスクを作成または編集するには、これらの手順に従ってください。

手順

ステップ 1 メイン メニューから [Tasks（タスク）] > [Migrate（移行）] を選択します。

ステップ 2 [Add Migration Task（移行タスクの追加）] ボタンをクリックします。 [Add Migration Task（移行タスクの追加）] ウィザードが表示されます。

ステップ 3 [Source UC Cluster（送信元 UC クラスタ）] ドロップダウン リストから、移行するノードが置かれたクラスタを選択します。

ステップ 4 [Destination Cluster（宛先クラスタ）] ドロップダウン リストから、宛先クラスタまたは移行マップを選択します。 移行マップは、選択した送信元クラスタに関連付けられます。 [Next（次へ）] をクリックします。

ステップ 5 [Choose Migration Files（移行ファイルの選択）] セクションで、[Browse（参照）] ボタンをクリックして宛先クラスタ上にインストールしたい ISO ファイルを選択します。 [Choose Migration Files（移行ファイルの選択）] ウィンドウが開きます。 リストから ISO ファイルを選択し、[OK] をクリックします。

重要 ISO ファイルは、**/fresh_install** の下のディレクトリに置かれ、標準 SFTP クライアント（管理名：adminsftp、パスワード：管理パスワード）を介してアップロードされている場合にここに表示されます。 詳細は、このセクションの最初のタスク管理情報を参照してください。

ステップ 6 [Next（次へ）] をクリックします。

ステップ 7 [Start Time（開始時間）] セクションで、特定の開始時間のスケジュール、タスクの即時の開始、または将来のある時点でタスクを手動で開始するオプションから選択します。 [Next（次へ）] をクリックします。

ステップ 8 [Specify Migration Procedure（移行手順の指定）] セクションに、移行タスクのデフォルトのシーケンスが表示されます。 必要に応じて、移行手順のシーケンス手順を変更できます（たとえば、デフォルトは各サブを個別にインストールすることです。 これを手順内で複数のサブのインストールに変更できます）。 次の選択肢があります。

オプション	説明
[Pencil（ペンシル）] アイコン	手順を編集します。
[Page（ページ）] アイコン	現在の手順の後に新しい手順を追加します。

オプション	説明
X マーク	現在の手順を削除します。 手順からすべてのノードを削除すると、その手順はデフォルトで削除されます。 [Publisher（パブリッシャ）] ノードを含む手順を削除することはできません。
上矢印	手順を上に上げて先に実行されるようにします。
下矢印	手順を下に下げて先に実行されるようにします。

- [Pencil（ペンシル）] アイコンは [Edit Step（手順の編集）] ウィンドウを開きます。 使用可能なノードからこの手順に移行するノードを追加します。 使用可能なノードは、移行のために選択したものです。
- 各ノードが割り当てられる手順はノードの横に表示されます。 ノードがどの手順にも割り当てられていない場合、未割り当てと表示されます。
- 手順にすべてのノードを割り当てると、デフォルトのシーケンス付けを利用できます。
  重要 すべてのノードを割り当てるまでは次の手順に進むことができません。
- [Pause task after step completes（手順完了後タスクを一時停止）] オプションはこの手順の完了後タスクを一時停止します。 タスクを完了するには次の手順を手動で開始する必要があります。

タスクのシーケンス詳細は、このセクションの最初のタスク管理情報を参照してください。

ステップ 9 [Next（次へ）] をクリックします。

ステップ 10 [Review（レビュー）] セクションでは、選択した内容を確認できます。 新しい移行タスクにメモを追加するオプションもあります。

ステップ 11 必要な変更がない場合は、[Finish（完了）] をクリックして新しい移行タスクを追加します。

ステップ 12 新規移行タスクは、[Migrate（移行）] 画面上のテーブルに表示されます。

重要 ネットワーク移行で移行を実行する場合、すべてのサーバがインストールされた後、シーケンスは自動的に [Forced Pause（強制一時停止）] 手順を挿入してユーザが処理を実行できるようにします。 手動による処理が必要な場合の詳細については、「移行タスクの実行」を参照してください。 [Forced Pause（強制一時停止）] 手順は、編集したり移動したりできず、ノードは割り当てられていません。 CTL アップデートまたは証明書管理手順が必要な場合は送信元ノードがシャットダウンする前に実行する必要があるため、この手順は、送信元ノードが手順をシャットダウンする前に挿入されます。

移行タスクの実行

後日開始するようにタスクをスケジュールした場合、または [Manual Start（手動開始）] を選択した場合、タスクはタスク リストにリストされますが開始されません。 この場合、タスクに関連づけられている [Validation（検証）] ボタンがあります。 実行前にに検証ボタンを使用してタスクを確認するのがベスト プラクティスです。 タスクに問題（.iso ファイルがない、または VM がオフ状態ではないなど）がある場合、検証はユーザに警告するため、問題はタスク開始前に解決できます。

手動開始がスケジュールされたタスクに関して、ユーザはこのタスクに関連付けられた [Start（開始）] ボタンをクリックしてタスクを開始できます。

移行タスクの実行中、移行タスクのタイプによってユーザ操作が必要になる場合があります。 たとえば、「ネットワーク移行を伴う移行」を実行している場合、シーケンスはすべてのサーバがインストールされた後に自動的に強制一時停止を挿入します。 これにより、すべての新規サーバがインストールされた後、送信元マシンがシャット ダウンする前に移行タスクが停止します。

下のテーブルと、適切な [Migration Procedure（移行手順）] フロー チャート（下の「移行手順フロー チャート」セクションを参照）を参照して、移行タスク中にユーザの介入が必要かどうかを確認してください。

重要 移行クラスタが作成されたら、すべての宛先ノードが同じホスト名またはアドレスを保持するか、またはこれらのアドレスの一部が変更するかどうか指定する必要があります。

- すべての宛先ノード オプションに対して送信元ノード設定を使用することは下の移行手順フロー チャートで「単純な移行」と呼ばれています。
- 1 つ以上の宛先ノード オプションに対して新規ネットワーク設定を入力することは、下の移行手順フロー チャートで「ネットワーク移行」と呼ばれています。

CUCM 送信元クラスタ - リリースから	単純な移行またはネットワーク移行	CUCM の送信元クラスタ（セキュアまたは非セキュア）	移行中に実行されるユーザ プロシージャ
8.0.1 より前 6.1(5)、7.1(3)、7.1(5)	単純な移行	セキュア	移行中に必要な手順なし
8.0.1 より前	単純な移行	非セキュア	移行中に必要な手順なし
8.0.1 より前	ネットワーク移行	セキュア	移行タスクが [Forced Pause（強制一時停止）] 手順に到達したら、[Resume（再開）] ボタンをクリックします。

CUCM 送信元クラスタ - リリースから	単純な移行またはネットワーク移行	CUCM の送信元クラスタ（セキュアまたは非セキュア）	移行中に実行されるユーザ プロシージャ
8.0.1 より前	ネットワーク移行	非セキュア	移行タスクが [Forced Pause（強制一時停止）] 手順に到達したら、[Resume（再開）] ボタンをクリックします。
8.x、9.x、および 10.x 8.5(1)、8.6(1)、8.6(2)、9.0.(1)、9.1(1)、9.1(2)、10.0(1)	単純な移行	セキュア	移行中に必要な手順なし
8.x、9.x、および 10.x	単純な移行	非セキュア	移行中に必要な手順なし
8.x、9.x、および 10.x	ネットワーク移行	セキュア	移行タスクが [Forced Pause（強制一時停止）] 手順に到達したら、以下を実行する必要があります。 **1** CTL アップデート **2** 証明書の一括管理 **3** Cisco Prime Collaboration Deployment GUI のタスクを再開します。
8.x、9.x、および 10.x	ネットワーク移行	非セキュア	移行タスクが [Forced Pause（強制一時停止）] 手順に到達したら、以下を実行する必要があります。 **1** 証明書の一括管理 **2** Cisco Prime Collaboration Deployment GUI のタスクを再開します。

クラスタ内の Cisco Unified Communication Manager ノードの移行後タスク

移行タスクが正常に実行された後は、移行タスクが「ネットワーク移行」で実行された場合に、いくつかの追加手順が必要です （単純な移行が実行された場合は移行後タスクは必要ありません）。

移行タスクに成功した後にユーザ タスクを実行する必要があるか判断するには、以下のテーブル、および適切な移行使用例のフローチャートを参照してください。

CUCM 送信元クラスタ - リリースから	単純な移行またはネットワーク移行	CUCM の送信元クラスタ（セキュアまたは非セキュア）	移行後に実行されるユーザ プロシージャ
8.0.1 より前 6.1(5)、7.1(3)、7.1(5)	ネットワーク移行	セキュア	1 CTL 更新を実行します。 2 Unified CM のサービスの再起動 3 TFTP Server IP アドレスの変更 4 電話機の登録の確認
	ネットワーク移行	非セキュア	1 TFTP Server IP アドレスの変更 2 電話機の登録の確認
8.x、9.x、および 10.x 8.5(1)、8.6(1)、8.6(2)、9.0.(1)、9.1(1)、9.1(2)、10.0(1)	ネットワーク移行	セキュア	1 TFTP Server IP アドレスの変更 2 電話機の登録の確認
	ネットワーク移行	非セキュア	1 TFTP Server IP アドレスの変更 2 電話機の登録の確認

IM and Presence の移行後タスク

移行されたクラスタに IM and Presence ノードが含まれ、ネットワーク移行である場合、Release 10.x より前の IM and Presence クラスタに対して以下のインスール後タスクを実行する必要があります。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	**証明書と証明書信頼ストアを設定します。**	古いクラスタのコンポーネント信頼ストアにCAによって署名された証明書がある場合、コンポーネントの移行されたリリース 10.x クラスタに自己署名証明書があることに注意してください。また、認証局のルートおよび中間証明書は、それぞれの信頼ストアに保持されません。 古い認証局で証明書に署名する必要があります。これは最初の方法に似ています。 詳細については、『*Cisco Unified Communications Operating System Administration Guide*（*Cisco Unified Communications* オペレーティ

	コマンドまたはアクション	目的
		ング システム管理ガイド）』の IM and Presence サービスの OS プラットフォームの章を参照してください。
ステップ 2	クラスタ間ピアの設定	古いクラスタにクラスタ間ピア関係がある場合、すべてのピア クラスタから設定を削除する必要があります。 これが完了したら、新規クラスタのネットワーク詳細に基づいて適切な相互クラスタを追加します。たとえば、クラスタ A、クラスタ B およびクラスタ C はすべてクラスタ間ピアです。 クラスタ A が移行したら、古いクラスタ A からすべての相互クラスタ設定を削除し、クラスタ B およびクラスタ C にも同様に実行します。この後、新規クラスタ A のネットワーク詳細とともに相互クラスタを追加します。 古いデータから移行が適用されるため、新規クラスタ A では何も設定する必要はありません。 詳細については、『*Deployment Guide for IM and Presence Service on Cisco Unified Communications Manager*（*Cisco Unified Communications Manager* 上の *IM and Presence* サービスの展開ガイド）』を参照してください。
ステップ 3	SIP フェデレーションの再発行	古いクラスタが Microsoft OCS/Lync/AOL と SIP インタードメインでフロントエンドまたは OCS/Lync で SIP インタードメイン フェデレーションだった場合、企業はフェデレーティング ドメインの DNS-SRV を、新規ネットワーク詳細を反映するように再発行する必要があります。DNS-SRV ベースのルーティングの代わりに設定された SIP スタティック ルートが遠端にある場合は、新しいネットワーク アドレスを反映するように SIP スタティック ルートを変更する必要があります。 同様に、新規クラスタに正常にルーティングするには、すべての中間ネットワーク要素（ASA またはトラフィックを外部フェデレーションエンティティからの古いクラスタにルーティングまたは検査するその他の同様のコンポーネントを含む）を再設定する必要があります。 ドメイン間設定に対しては、「*Interdomain Federation for IM and Presence Service on Cisco Unified Communications Manager*（*Cisco Unified Communications Manager* 上の *IM and Presence* サービスに対するドメイン間フェデレーション）」を参照してください。 ドメイン間フェデレーションについては、「*Partitioned Intradomain Federation for IM and Presence Service on Cisco Unified Communications Manager*（*Cisco Unified Communications Manager* 上の *IM and Presence* に対するパーティションされたドメイン間フェデレーション）」を参照してください。
ステップ 4	XMPP フェデレーションを再発行します。	古いクラスタが任意の外部 XMPP サーバに対して XMPP ドメイン間フェデレーションのフロントエンドを実行している場合、企業はフェデレーションを行うドメインの DNS-SRV レコードを新規ネットワーク詳細を反映するように再発行する必要があります。『*Interdomain Federation for IM and Presence Service on Cisco Unified Communications Manager*（*Cisco Unified Communications Manager* での *IM and Presence* サービスに対するドメイン間フェデレーション）』を参照してください。

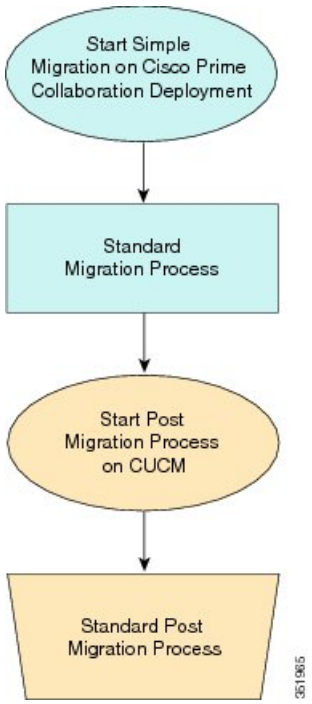
	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 5	**Jabber/CUPC 接続の設定**	JabberまたはCUPCは、古いクラスタからホスト名の情報をキャッシュし、設定をユーザのデスクトップにプッシュできないかぎり、またはそのユーザがノード名のいずれかを手動で入力しないかぎり、新規ホスト名情報を持ちません。 古いクラスタから割り当て解除され、ログインできないユーザに対するフェール セーフなアプローチでは、ユーザは（移行前に通知された）新規クラスタ内のノードのいずれかのホスト名または IP アドレスを手動で入力します。 このシナリオでは、ユーザのクライアントは、ログインのリダイレクトによって正しいホーム ノードを検出しています。

移行手順のフローチャート

以下のタスク フローをガイドとして使用して移行タスクを実行します。

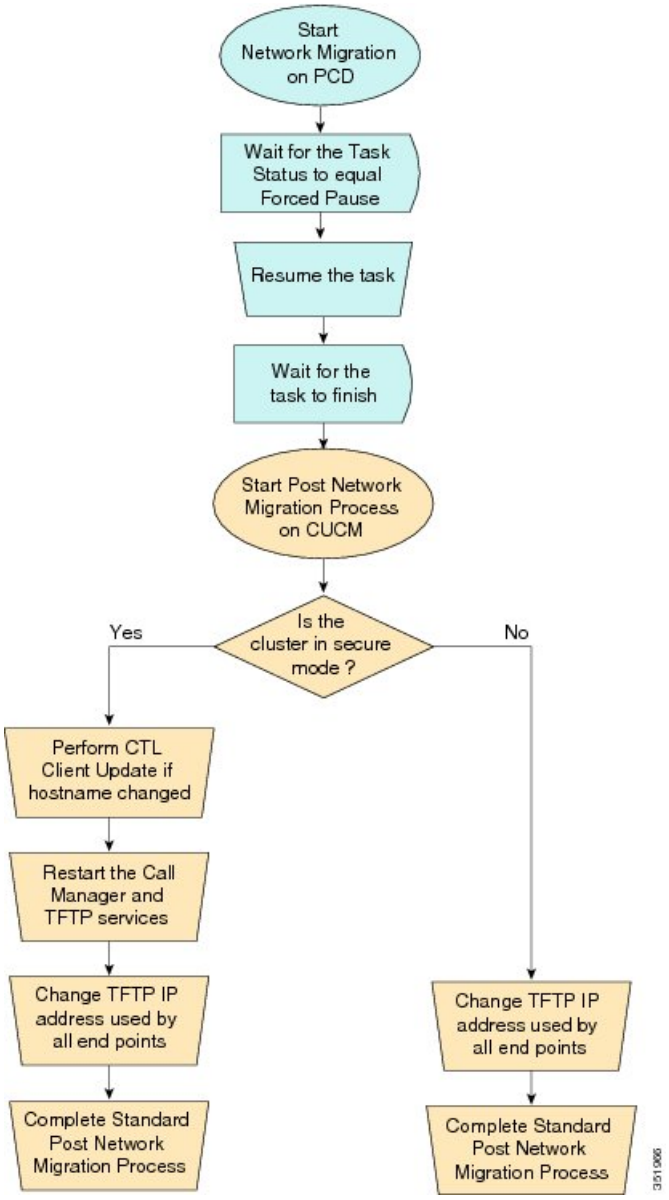
単純な移行

図 *1*：単純な移行のためのフローチャート



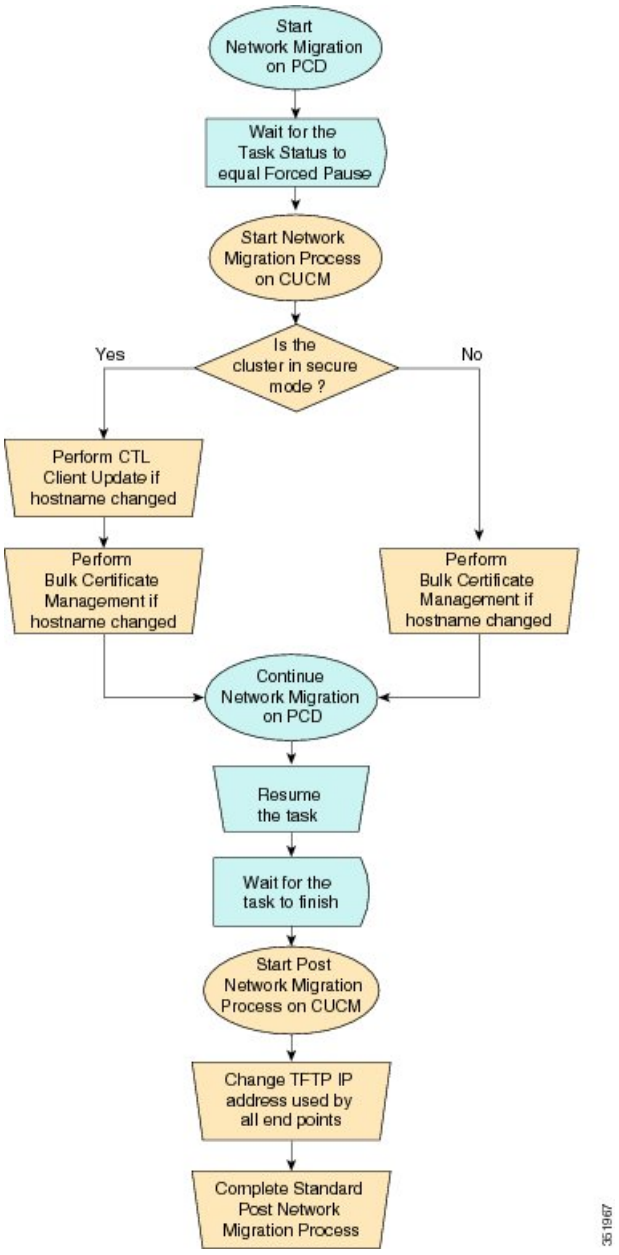
リリース 8.0.1 前の CUCM Network 移行

図 *2*：リリース *8.0.1* 前の *CUCM Network* 移行のフロー チャート



リリース 8.0.1 以降の CUCM Network 移行

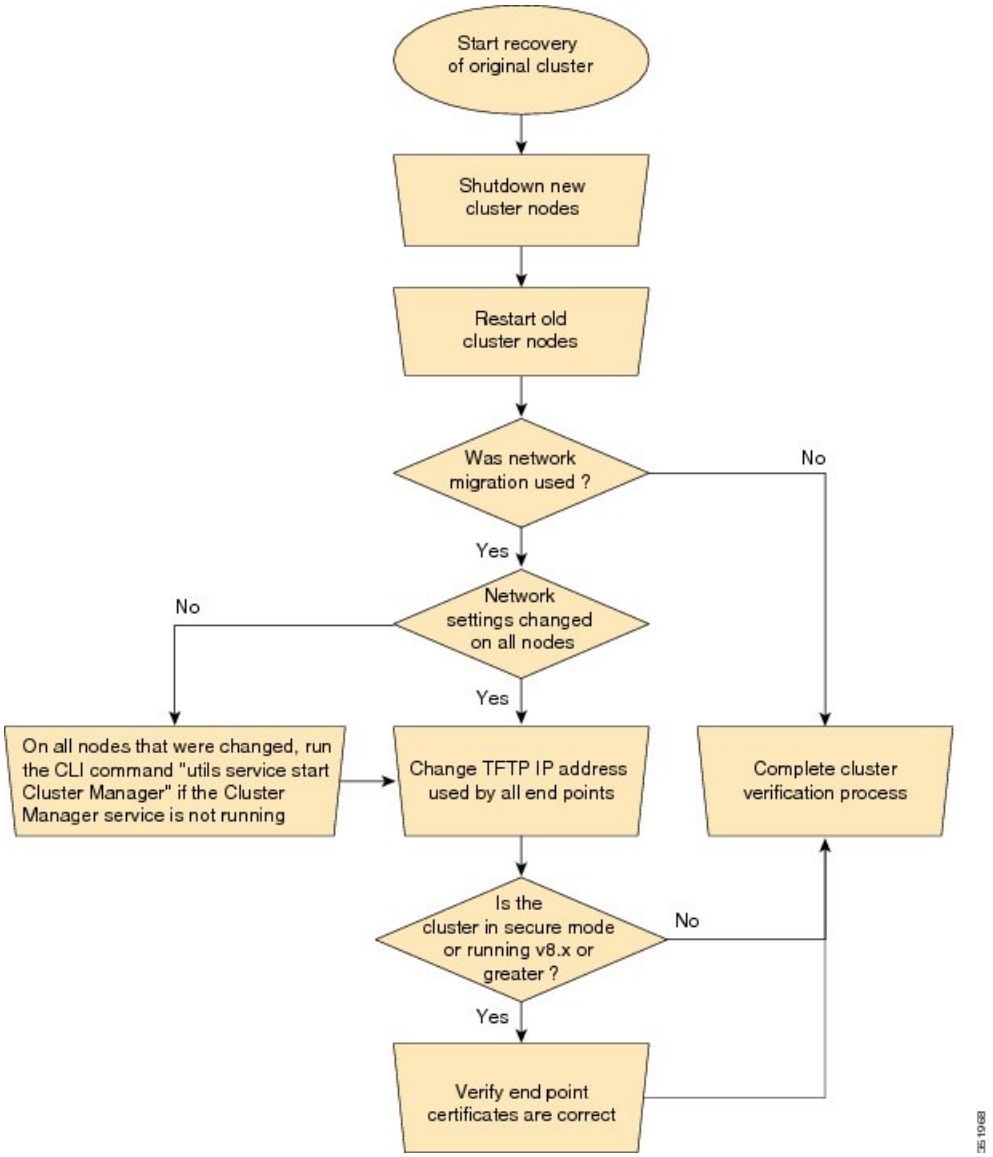
図 *3*：リリース *8.0.1* 以降の *CUCM Network* 移行のフロー チャート



送信元クラスタのリカバリ

クラスタの移行に失敗し、一部のノードが新規クラスタにインストールされた場合、以下の手順を使用してください。

図 *4*：送信元クラスタのリカバリのフローチャート



すべての送信元ノード上の Cluster Manager Service のステータスの確認

以下の手順は、1 つ以上のノードでネットワーク移行の変更があった場合に移行タスクが失敗したイベントで使用されます。 失敗後、いくつかの手順を実行して古いクラスタ ノードを再び実行することが必要になる場合があります。 使用するすべてのステップの詳細は上記のフローチャートを参照してください。 古いノードでクラスタ マネージャを再起動するために CLI コマンドを実行する詳細は以下のとおりです。

すべての古いクラスタ ノードが実行された後に、ネットワーク変更が加えられたことが予測されるすべてのサブスクライバ ノード（たとえば、ホスト名、IP アドレスまたは両方）上で以下の手順を手動で実行します。

送信元ノードでクラスタ マネージャの再起動が必要になる可能性のある使用例は以下のとおりです。

ユーザ ケース 1

パブリッシャ上でホスト名および IP アドレスの変更なし、サブスクライバ上でホスト名変更あり

> ユーザは送信元サブスクライバで Cluster Manager サービスをチェックする必要があります。

ユーザ ケース 2

パブリッシャ上でホスト名および IP アドレスの変更なし、サブスクライバ上で IP アドレス変更あり

> 送信元サブスクライバで Cluster Manager サービスをチェックする必要があります。

ユーザ ケース 3

パブリッシャ上でホスト名および IP アドレスの変更なし、サブスクライバ上でホスト名および IP アドレス変更あり

> 送信元サブスクライバで Cluster Manager サービスをチェックする必要があります。

ユーザ ケース 4

ホスト名はパブリッシャで変更なし、IP アドレスがパブリッシャで変更あり、サブスクライバではホスト名と IP の変更なし

> 送信元パブリッシャで Cluster Manager サービスをチェックする必要があります。

手順

ステップ 1 コマンド プロンプトで CLI コマンド **utils service list** を入力します。
Requesting service status, please wait... System SSH [STARTED] Cluster Manager [STOPPED]

ステップ 2 Cluster Manager Service ステータスが [STOPPED（停止）] の場合、古いサブスクライバ ノード上でサービスを開始するために以下のコマンドを入力してください。
utils service start Cluster Manager

アップグレード タスク

アップグレード タスクの作成

アップグレード タスクは、クラスタ上でソフトウェア バージョン アップグレードを実行するために使用されます。アップグレードタスクは、クラスタ内のすべてのサーバまたはサーバのサブセット上に .cop ファイルをインストールするためにも使用できます。

どのアプリケーションまたはリリースがアップグレード タスクに対してサポートされるかについては、「サポートされているリリース」を参照してください。

（注） Cisco Prime Collaboration Deployment は標準アップグレード プロセスを使用するため、標準検証ルールが適用されます。 詳細については、アプリケーション固有のマニュアルを参照してください。

アップグレード タスクを作成および編集するには、[Add Upgrade Task（アップグレード タスクの追加）] ウィザードを使用します。

1 つ以上のクラスタでスケジュールされた時間に自動的に実行されるように新規アップグレード タスクを作成または編集するには、以下の手順に従ってください。

はじめる前に

1. まだ実行していない場合は、アップグレードするクラスタに対してクラスタ ディスカバリを実行し、クラスタ インベントリに表示されるようにしてください。クラスタの検出, （28 ページ）を参照してください。
2. アップグレードする .iso ファイルをダウンロードし、このファイルを Cisco Prime Collaboration Deployment のアップグレード フォルダに SFTP します。 .cop ファイルをインストールするためにアップグレード タスクを使用している場合、SFTP クライアントを使用して .cop ファイルを /upgrade フォルダにアップロードします。
3. クラスタ内のアプリケーション サーバをアップグレードするには、そのサーバ上で Platform Administrative Web Service を必ずアクティブにしてください。

手順

ステップ 1 メイン メニューから [Tasks（タスク）] > [Upgrade（アップグレード）] を選択します。

ステップ 2 [Add Upgrade Task（アップグレード タスクの追加）] をクリックします。 [Add Upgrade Task（アップグレード タスクの追加）] ウィザードが表示されます。

ステップ 3 [Cluster（クラスタ）] ドロップダウン リストから、インストールするノードが置かれたクラスタを選択します。

ステップ 4 [Products（製品）] ドロップダウン リストから、アップグレードする製品を選択します。

ステップ 5 ノードのリストからアップグレードの一部となるノードを選択します。

ステップ 6 [Next（次へ）] をクリックします。

（注） [Next（次へ）] ボタンは、ノードが選択されていないと無効になります。

ステップ 7 対応する [Browse（参照）] ボタンをクリックしてファイル サーバからアップグレード ファイルを選択します。

（注） アップグレード ファイルを選択するオプションは、クラスタ内で現在サポートされる選択した製品タイプおよびアプリケーションに対してのみ使用できます。

ステップ 8 有効なアップグレード ファイルを選択します。

（注） ファイル サーバのすべての利用可能なアップグレード ファイルを表示するには、[Show（表示）] ドロップダウン リストをクリックします。

ステップ 9 [Choose File（ファイルを選択）] をクリックします。

ステップ 10 [Next（次へ）] をクリックします。

（注） [Next（次へ）] ボタンは、有効なアップグレード ファイルが選択されていないと無効になります。

ステップ 11 アップグレード タスクを開始する日時を選択します。アップグレードをスケジュールする以下のオプションがあります。

- [Schedule for a specific time（特定の時間に対するスケジュール）] を選択してアップグレード タスクの開始の日時を入力します。 設定する開始時間は、このオプションで表示されるタイム ゾーンで示されるとおり、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバのタイム ゾーンに基づいています。

  （注） 将来数分タスクをスケジュールするが、スケジュールされた時間が経過するまで保存しない場合、タスクは自動的に開始します。

- 手動開始でタスクを保持するには [Start task manually（手動によるタスクの開始）] を選択します。

  （注） タスクを手動で開始することを選択した場合、タスクが作成されますが、[Monitoring（モニタリング）] ページで [Start task（タスクの開始）] ボタンをクリックするか、タスク ページで [Start task（タスクの開始）] リンクをクリックするまで開始しません。

- [Finish（完了）] をクリックした後すぐにタスクを開始するには、[Start task immediately upon completion of this wizard（このウィザードが完了したらタスクをすぐに開始）] を選択します。

- [Upgrade Option to Automatically Switch to New Version after Successful Upgrade（正常なアップグレードの後に新しいバージョンに自動的に切り替えるようオプションをアップグレード）] オプションがあります。 システムを新しいバージョンに自動的に切り替えたい場合はこのオプションを選択します。 これ以外の場合は、サーバはアップグレードされますが、ソフトウェアの現在のバージョンのままになります。 この場合、ユーザはバージョン切り替えタスクをスケジュールして、アップグレードされたバージョンのソフトウェアに切り替えることができます。

ステップ 12 [Next（次へ）] をクリックします。

ステップ 13 タスクを完了するための一連の手順を指定します。 次の選択肢があります。

オプション	説明
[Pencil（ペンシル）] アイコン	手順を編集します。
[Page（ページ）] アイコン	現在の手順の後に新しい手順を追加します。
X マーク	現在の手順を削除します。 手順からすべてのノードを削除すると、その手順はデフォルトで削除されます。 [Publisher（パブリッシャ）] ノードを含む手順を削除することはできません。
上矢印	手順を上に上げて先に実行されるようにします。
下矢印	手順を下に下げて先に実行されるようにします。

- [Pencil（ペンシル）] アイコンは [Edit Step（手順の編集）] ウィンドウを開きます。 使用可能なノードからこの手順にアップグレードするノードを追加します。 使用可能なノードは、アップグレードのために選択したものです。

- 各ノードが割り当てられる手順はノードの横に表示されます。 ノードがどの手順にも割り当てられていない場合、未割り当てと表示されます。

- 手順にすべてのノードを割り当てると、デフォルトのシーケンス付けを利用できます。
  重要 すべてのノードを割り当てるまでは次の手順に進むことができません。

- [Pause task after step completes（手順完了後タスクを一時停止）] オプションはこの手順の完了後タスクを一時停止します。 タスクを完了するには次の手順を手動で開始する必要があります。

ステップ 14 [OK] をクリックします。

ステップ 15 [Next（次へ）] をクリックします。

（注） [Next（次へ）] ボタンは有効なままのため、ユーザはクリックして設定の誤りについて確認することができます。

ステップ 16 自分が作成したタスクの詳細を確認するには、[Review（レビュー）] セクションを使用します。必要に応じてタスクにメモを追加できます。 メモはタスクと共に保存され、タスクが完了前に編集された場合は表示されます。

ステップ 17 [終了（Finish）] をクリックすると、タスクがスケジュールされます。

前のタスクからのシーケンスの再利用

[Reuse Sequence from Previous Task（前のタスクからのシーケンスの再利用）] 機能は、現在作成中のタスクで以前に定義されたタスク シーケンスを使用します。 この機能は、アップグレード、再起動、バージョン切り替え、移行、および再アドレス付けタスクで役立ちます。 これを使用して、シーケンスのスクリプトを最初から作成せずに、以前に設定されたタスク シーケンスを再利用できます。

タスクの作成中にシーケンスペインでタスク ウィザードが進行し、ユーザは順番を設定したり特性を一時停止できます。 システム内に同様のタイプのタスクがある場合、このタスクからのシーケンスがデフォルト シーケンスとして提示されます。 この場合、[Use Last Configured Run Sequence（最後に設定した実行シーケンスを使用）] とラベル付けされたチェック ボックスがシーケンス テーブルのすぐ上に表示されます。チェックボックスは、以前のタスクからのシーケンスを使用する場合にオンにし、システム生成のデフォルト シーケンスを使用する場合にオフにできます。

同様のタイプのタスクとみなされるには、タスク内の選択されたクラスタ、タスク タイプ、およびノードが完全に一致する必要があります。 同様のタイプの条件を満たす複数のタスクがある場合、最も最近作成されたタスクが使用され、そのシーケンスがユーザのデフォルトとして提示されます。

アップグレード タスクの場合は、追加の要件があります。 インストールのタイプは ISO または COP ベースである必要があります。 COP および ISO インストールは別のシーケンスで実行できます。

バージョン切り替えタスク

バージョン切り替えタスクの作成

バージョン切り替えタスクは、クラスタ内の1つ以上のノードをアップグレードまたは非アクティブのバージョンに自動的に切り替えるために使用されます。

バージョン切り替えタスクを作成または編集するには [Switch Versions Task（バージョン切り替えタスク）] ウィザードを使用します。

どのアプリケーションまたはリリースがバージョン切り替えタスクに対してサポートされるかについては、「サポートされているリリース」を参照してください。

クラスタ内の 1 つ以上のノードをスケジュールされた時間にアップグレードまたは非アクティブのバージョンに自動的に切り替えるようにバージョン切り替えタスクを作成または編集するには以下の手順に従ってください。

重要 Unified CM and IM and Presence サーバがあるクラスタに対して、アップグレード タスクを作成し、後でバージョン切り替えタスクを作成して新規バージョンに切り替えることができます。このバージョン切り替えタスクはアップグレード タスクが正常に実行された後に作成できます。

はじめる前に

1. まだ実行していない場合は、バージョンを切り替えるクラスタに対してクラスタ検出を実行し、クラスタインベントリに表示されるようにしてください。クラスタの検出, （28 ページ）を参照してください。クラスタをアップグレードまたは移行するために Cisco Prime Collaboration Deployment を使用した場合は、すでにインベントリの中にあります。
2. クラスタ内の各アプリケーションに対して、そのサーバで Platform Administrative Web Service がアクティブであることを確認してください。

手順

ステップ 1 メインメニューから [Tasks（タスク）]>[Switch Versions（バージョン切り替え）] を選択します。

ステップ 2 [Add Switch Versions Task（バージョン切り替えタスクの追加）] をクリックします。 [Add Switch Versions Task（バージョン切り替えタスクの追加）] ウィザードが表示されます。

ステップ 3 [**Clusters（クラスタ）**] ドロップダウン リストから、バージョンを切り替えたいクラスタを選択します。

ステップ 4 すべてのノードを切り替えるバージョンを選択します。

（注） 複数の製品がある場合、すべての異なる製品の適切なバージョンを選択できます。1 つの製品に対してバージョンを切り替え、他の製品に対してはバージョンを切り替えないことも選択できます。

ステップ 5 [Next（次へ）] をクリックします。

ステップ 6 バージョン切り替えタスクを開始する日時を選択します。バージョン切り替えタスクをスケジュールするには以下のオプションがあります。

- [Schedule for a specific time（特定の時間に対するスケジュール）] を選択してバージョン切り替えタスクの開始の日時を入力します。 設定する開始時間は、このオプションで表示されるタイム ゾーンで示されるとおり、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバのタイム ゾーンに基づいています。

  （注） 将来数分タスクをスケジュールするが、スケジュールされた時間が経過するまで保存しない場合、タスクは自動的に開始します。

- 手動開始でタスクを保持するには [Start task manually（手動によるタスクの開始）] を選択します。

- [Finish（完了）] をクリックした後すぐにタスクを開始するには、[Start task immediately upon completion of this wizard（このウィザードが完了したらタスクをすぐに開始）] を選択します。

  （注） [Monitoring（モニタリング）] ページからタスクを開始することもできます。

- サーバが新しいバージョンに自動的に切り替えるようにするには、[Automatically switch to new version after successful upgrade（正常なアップグレード後に新規バージョンに自動的に切り替え）] の横のチェックボックスをクリックします。

ステップ 7 [Next（次へ）] をクリックします。

ステップ 8 タスクを完了するための一連の手順を指定します。 次の選択肢があります。

オプション	説明
[Pencil（ペンシル）] アイコン	手順を編集します。
[Page（ページ）] アイコン	現在の手順の後に新しい手順を追加します。
X マーク	現在の手順を削除します。 手順からすべてのノードを削除すると、その手順はデフォルトで削除されます。 [Publisher（パブリッシャ）] ノードを含む手順を削除することはできません。
上矢印	手順を上に上げて先に実行されるようにします。
下矢印	手順を下に下げて先に実行されるようにします。

- [Pencil（ペンシル）] アイコンは [Edit Step（手順の編集）] ウィンドウを開きます。 利用可能なノードのリストから、この手順でバージョンを切り替える必要のあるノードを選択します。 利用可能なノードは、バージョン切り替えタスクのために選択したものです。

- 各ノードが割り当てられる手順はノードの横に表示されます。 ノードがどの手順にも割り当てられていない場合、未割り当てと表示されます。

- 手順にすべてのノードを割り当てると、デフォルトのシーケンス付けを利用できます。

  重要 すべてのノードを割り当てるまでは次の手順に進むことができません。

- [Pause task after step completes（手順完了後タスクを一時停止）] オプションはこの手順の完了後タスクを一時停止します。 タスクを完了するには次の手順を手動で開始する必要があります。

ステップ 9 **[OK]** をクリックします。

ステップ 10 [Next（次へ）] をクリックします。

（注） [Next（次へ）] ボタンは有効なままのため、ユーザはクリックして設定の誤りについて確認することができます。

ステップ 11 自分が作成したタスクの詳細を確認するには、[Review（レビュー）] セクションを使用します。必要に応じてタスクにメモを追加できます。 メモはタスクと共に保存され、タスクが完了前に編集された場合は表示されます。

ステップ 12 [終了（Finish）] をクリックすると、タスクがスケジュールされます。

サーバ再起動タスク

どのアプリケーションまたはリリースがサーバ再起動タスクに対してサポートされるかについては、「サポートされているリリース」を参照してください。

サーバ再起動タスクの作成

再起動タスクを作成または編集するには、[Restart Task（タスクの再起動）] ウィザードを使用します。

スケジュールした時間にクラスタ内の 1 つ以上のノードを自動的に再起動するために再起動 タスクを作成または編集するにはこの手順に従います。

はじめる前に

1 まだ実行していない場合は、再起動するクラスタに対してクラスタディスカバリを実行し、クラスタ インベントリに表示されるようにしてください。 クラスタの検出, （28 ページ）を参照してください。

2 クラスタ内の各アプリケーションに対して、そのサーバで Platform Administrative Web Service がアクティブであることを確認してください。

手順

ステップ 1 メイン メニューから [Tasks（タスク）] > [Server Restart（サーバ再起動）] を選択します。

ステップ 2 [Add Server Restart Task（サーバ再起動タスクの追加）] ウィンドウをクリックします。 [Add Restart Task （再起動タスクの追加）] ウィザードが表示されます。

ステップ 3 [Clusters（クラスタ）] ドロップダウン リストから、ノードを再起動したいクラスタを選択します。

ステップ 4 テーブルから再起動するノードを選択します。 ノードを選択しないと続行できません。

ステップ 5 [Next（次へ）] をクリックします。

ステップ 6 サーバ再起動タスクを開始する日時を選択します。 再起動タスクをスケジュールする以下のオプションがあります。

- [Schedule for a specific time（特定の時間に対するスケジュール）] を選択して再起動タスクの開始の日時を入力します。 設定する開始時間は、このオプションで表示されるタイム ゾー

ンで示されるとおり、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバのタイム ゾーンに基づいています。

（注） 将来数分タスクをスケジュールするが、スケジュールされた時間が経過するまで保存しない場合、タスクは自動的に開始します。

- 手動開始でタスクを保持するには [Start task manually（手動によるタスクの開始）] を選択します。
- [Finish（完了）] をクリックした後すぐにタスクを開始するには、[Start task immediately upon completion of this wizard（このタスクが完了したらタスクをすぐに開始）] を選択します。

（注） [Monitoring（モニタリング）] ページからタスクを開始することもできます。

ステップ 7 [Next（次へ）] をクリックします。

ステップ 8 タスクを完了するための一連の手順を指定します。 次の選択肢があります。

オプション	説明
[Pencil（ペンシル）] アイコン	手順を編集します。
[Page（ページ）] アイコン	現在の手順の後に新しい手順を追加します。
X マーク	現在の手順を削除します。 手順からすべてのノードを削除すると、その手順はデフォルトで削除されます。 [Publisher（パブリッシャ）] ノードを含む手順を削除することはできません。
上矢印	手順を上に上げて先に実行されるようにします。
下矢印	手順を下に下げて先に実行されるようにします。

- [Pencil（ペンシル）] アイコンは [Edit Step（手順の編集）] ウィンドウを開きます。 使用可能なノードからこの手順に再起動するノードを追加します。使用可能なノードは、再起動のために選択したものです。
- 各ノードが割り当てられる手順はノードの横に表示されます。 ノードがどの手順にも割り当てられていない場合、未割り当てと表示されます。
- 手順にすべてのノードを割り当てると、デフォルトのシーケンス付けを利用できます。

重要 すべてのノードを割り当てるまでは次の手順に進むことができません。

- [Pause task after step completes（手順完了後タスクを一時停止）] オプションはこの手順の完了後タスクを一時停止します。 タスクを完了するには次の手順を手動で開始する必要があります。

ステップ 9 [OK] をクリックします。

ステップ 10 [Next（次へ）] をクリックします。

（注） [Next（次へ）] ボタンは有効なままのため、ユーザはクリックして設定の問題について確認することができます。

ステップ 11 自分が作成したタスクの詳細を確認するには、[Review（レビュー）] セクションを使用します。 必要に応じてタスクにメモを追加できます。 メモはタスクと共に保存され、タスクが完了前に編集された場合は表示されます。

ステップ 12 [終了（Finish）] をクリックすると、タスクがスケジュールされます。

再アドレス付けタスク

再アドレス付けタスクの作成

再アドレス付けタスクは、クラスタ内の 1 つ以上のノードでホスト名と IP アドレスの両方またはいずれか一方を変更するために使用されます。 再アドレス付け機能を使用するには、サーバはリリース 10.0 以上である必要があります。

再アドレス付けタスクを作成または編集するには、[Readdress Task（タスクの再アドレス付け）] ウィザードを使用します。

スケジュールした時間にクラスタ内に 1 つ以上のノードを自動的にアドレス変更するために再アドレス付けタスクを作成または編集するにはこの手順に従います。

はじめる前に

まだ実行していない場合は、再アドレス付けするクラスタに対してクラスタ検出を実行し、クラスタ インベントリに表示されるようにしてください。 クラスタの検出, （28 ページ）を参照してください。

手順

ステップ 1 メイン メニューから [Tasks（タスク）] > [Readdress（再アドレス付け）] を選択します。

ステップ 2 [Add Readdress Task（再アドレス付けタスクの追加）] をクリックします。 [Add Readdress Task（再アドレス付けタスクの追加）] ウィザードが表示されます。

ステップ 3 [Clusters（クラスタ）] ドロップダウン リストから、ノードのアドレスを変更したいクラスタを選択します。 クラスタ ノードを表示するには、[View Nodes（ノードの表示）] をクリックします。

ステップ 4 [Next（次へ）] をクリックします。

ステップ 5 ノードの横の [Edit（編集）] をクリックして、代替ホスト名、IP アドレス、サブネット マスクまたはゲートウェイを入力します。

（注） DHCP がクラスタ用に設定されている場合、再アドレス付けタスクを使用して編集することはできません。

ステップ 6 [OK] をクリックします。

ステップ 7 [Next（次へ）] をクリックします。

重要 [Next（次へ）] をクリックすると、Cisco Prime Collaboration Deployment は自動的に検証テストを実行します。 クラスタ上のテストが失敗した場合、失敗したテストについて説明するエラー メッセージが表示されます。 タスクの作成を継続できますが、説明されたエラーを解決しないとタスクは失敗します。

ステップ 8 再アドレス付けタスクを開始する日時を選択します。 再アドレス付けタスクをスケジュールする以下のオプションがあります。

- [Schedule for a specific time（特定の時間に対するスケジュール）] を選択して再アドレス付けタスクの開始の日時を入力します。 設定する開始時間は、このオプションで表示されるタイム ゾーンで示されるとおり、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバのタイム ゾーンに基づいています。

  （注） 将来数分タスクをスケジュールするが、スケジュールされた時間が経過するまで保存しない場合、タスクは自動的に開始します。

- 手動開始でタスクを保持するには [Start task manually（手動によるタスクの開始）] を選択します。

- [Finish（完了）] をクリックした後すぐにタスクを開始するには、[Start task immediately upon completion of wizard（ウィザードが完了したらタスクをすぐに開始）] を選択します。

  （注） [Monitoring（モニタリング）] ページからタスクを開始することもできます。

ステップ 9 [Next（次へ）] をクリックします。

ステップ 10 タスクを完了するための一連の手順を指定します。 次の選択肢があります。

オプション	説明
[Pencil（ペンシル）] アイコン	手順を編集します。
[Page（ページ）] アイコン	現在の手順の後に新しい手順を追加します。

オプション	説明
上矢印	手順を上に上げて先に実行されるようにします。
下矢印	手順を下に下げて先に実行されるようにします。

- [Pencil（ペンシル）] アイコンは [Edit Step（手順の編集）] ウィンドウを開きます。 使用可能なノードからこの手順に再アドレス付けするノードを追加します。 使用可能なノードは、再アドレス付けのために選択したものです。

  （注） 再アドレス付けは IM and Presence サーバで Cisco Prime Collaboration Deployment に対してサポートされないため、IM and Presence ノードには [Edit（編集）] ボタンがありません。

- 各ノードが割り当てられる手順はノードの横に表示されます。 ノードがどの手順にも割り当てられていない場合、未割り当てと表示されます。
- 手順にすべてのノードを割り当てると、デフォルトのシーケンス付けを利用できます。

  重要 このタスクに対して選択されたすべてのノードを割り当てるまで次の手順に進むことはできません。

- Cisco Prime Collaboration Deployment は、再アドレス付けタスクの各シーケンス手順の後に強制一時停止を自動的に挿入します。
- 再アドレス付けタスクに対して、各手順に 1 つのノードのみ割り当てることができます。 複数のノードを統合して単一の手順に割り当てることはできません。

ステップ 11 [OK] をクリックします。

ステップ 12 [Next（次へ）] をクリックします。

（注） [Next（次へ）] ボタンは有効なままのため、ユーザはクリックして設定の誤りについて確認することができます。

ステップ 13 自分が作成したタスクの詳細を確認するには、[Review（レビュー）] セクションを使用します。 必要に応じてタスクにメモを追加できます。 メモはタスクと共に保存され、タスクが完了前に編集された場合は表示されます。

ステップ 14 [終了（Finish）] をクリックすると、タスクがスケジュールされます。

再アドレス付けタスクの実行

重要　再アドレス付けタスクを実行する前に、手順（DNS サーバでのエントリのアップデートなど）を実行する必要がある場合があります。

再アドレス付けタスクを実行する前に、「*Changing the IP Address and Hostname for Cisco Unified Communications Manager*（*Cisco Unified Communications Manager* の *IP* アドレスおよびホスト名の変更）」を必ず読んでください。

後日開始するようにタスクをスケジュールした場合、または [Manual Start（手動開始）] を選択した場合、タスクはタスク リストにリストされますが開始されません。

手動開始がスケジュールされたタスクに関して、このタスクに関連付けられた [Start（開始）] ボタンをクリックしてタスクを開始します。

再アドレス付けタスクの実行中に、タスク内で再アドレス付けする複数のサーバがある場合、一部のユーザ操作が必要となる場合があります。再アドレス付けタスク シーケンスは、サーバのアドレスが変更された後にシーケンスに自動的に強制一時停止を挿入します。

これによりユーザは、再アドレス付けタスクを再開する前に、手動の手順（たとえば、DNS の変更）を実行し、サーバと関連付けられた電話機が正常に登録されてシステムが正常に複製されていることを確認できます。

詳細は、「*Changing the IP Address and Hostname for Cisco Unified Communications Manager*（*Cisco Unified Communications Manager* での *IP* アドレスおよびホスト名の変更）」を参照してください。

再アドレス付け後のタスク

サーバが正常にアドレスを変更したことを確認したら、Cisco Prime Collaboration Deployment GUI から [Resume（再開）] ボタンをクリックしてタスクを再開します。

Cisco Prime Collaboration Deployment サーバは再アドレス付けを実行するシーケンス内の次のサーバに進みます。 サーバの再アドレス付けが検証されたら、強制一時停止を待機する手順を繰り返し、サーバの状態を確認し、タスクを再開します。

インストール タスク

インストール タスクは、Unified CM または Unified CM および IM and Presence サーバを含むクラスタのフレッシュ インストールに使用できます。 このタスクを使用して既存のクラスタに新規サーバを追加することはできません。

インストール タスクの作成

はじめる前に

1　（**VMware**）：新しいクラスタのハードウェアを展開して、ESXi をインストールします。

2 （**ISO ファイル**）：ターゲット リリースに対して必要な OVA および ISO イメージをダウンロードし、.iso ファイルを Cisco Prime Collaboration Deployment の /fresh_install ディレクトリに SFTP します。

（注） ISO ファイルが起動可能である必要があります。

3 （**VMware**）：インストールするノードに対して VM を作成するために Cisco 推奨の OVA を展開します。 ステップ 2 でダウンロードした Cisco OVA を使用して、ESXi ホスト上に適切な数のターゲット仮想マシンを作成します（インストールするノードのクラスタ内の各サーバに対して 1 つの新規仮想マシン）。 新規 VM でネットワークを設定します。

4 （**Cisco Prime Collaboration Deployment GUI**）：Cisco Prime Collaboration Deployment インベントリに仮想マシンを含む ESXi ホストを追加します。 Cisco Prime Collaboration Deployment に ESXi ホストを追加する詳細は、ESXi ホスト サーバの追加, （29 ページ） を参照してください。

5 （**Cisco Prime Collaboration Deployment GUI**）：インストールするノード、およびその関連する仮想マシンを定義するために新規インストール クラスタ（[Inventory（インベントリ）] > [Clusters（クラスタ）]）を定義します （フレッシュ インストールのために新規クラスタを追加, （32 ページ）を参照）。

6 （**Cisco Prime Collaboration Deployment GUI**）：電子メール通知の設定（オプション）

- [Administration（管理）] > [Email Notification（電子メール通知）] に移動します。
- 電子メール通知が設定されている場合、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバは移行タスク中に発生する可能性のあるエラー状態に関する電子メールを送信します。

7 （**Cisco Prime Collaboration Deployment GUI**）：インストール タスクを作成します（次の手順を参照）。

8 インストール タスクを作成する前に、必ずインストールするクラスタ ノードの IP アドレスとホスト名の両方またはいずれか一方を DNS サーバに入力するようにしてください。

インストール タスクの追加

スケジュールした時間にクラスタ内に 1 つ以上のノードを自動的にインストールするためにインストール タスクを作成または編集するにはこの手順に従います。

手順

ステップ 1 メイン メニューから [Tasks（タスク）] > [Install（インストール）] を選択します。

ステップ 2 [Add Install Task（インストール タスクの追加）] をクリックします。 [Add Install Task（インストール タスクの追加）] ウィザードが表示されます。

（注） インストール タスクがない場合、[Cluster Installation（クラスタのインストール）] ポップアップ ウィンドウがウィザードを実行する前提条件と共に表示されます。 [Close（閉じる）] をクリックしてポップアップ ウィンドウを閉じます。

ステップ 3 [Installation Cluster（インストール クラスタ）] ドロップダウン リストから、インストールするノードが置かれたクラスタを選択します。

ステップ 4 [Next（次へ）] をクリックします。

ステップ 5 それぞれの [Browse（参照）] ボタンをクリックして、Unified CM Installation ファイルおよび Unified Presence Installation ファイルをサーバから選択します。

（注） ISO ファイルは、**/fresh_install** の下のディレクトリに置かれ、標準 SFTP クライアント（管理名：adminsftp、パスワード：管理パスワード）を介してアップロードされている場合にここに表示されます。 詳細は、このセクションの最初のタスク管理情報を参照してください。

（注） デフォルトでは、選択したノードにインストールされたファイルのみ表示されます。インストール ファイルを選択するオプションは、クラスタ内で現在サポートされる選択した製品タイプおよびアプリケーションに対してのみ使用できます。

ステップ 6 [Choose File（ファイルの選択）] をクリックします。

ステップ 7 [Next（次へ）] をクリックします。

（注） [Next（次へ）] ボタンは、有効なアップグレード ファイルが選択されていないと無効になります。

ステップ 8 アップグレード タスクを開始する日時を選択します。アップグレードをスケジュールする以下のオプションがあります。

- [Schedule for a specific time（特定の時間に対するスケジュール）] を選択してアップグレード タスクの開始の日時を入力します。 設定する開始時間は、このオプションで表示されるタイム ゾーンで示されるとおり、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバのタイム ゾーンに基づいています。

  （注） 将来数分タスクをスケジュールするが、スケジュールされた時間が経過するまで保存しない場合、タスクは自動的に開始します。

- 手動開始でタスクを保持するには [Start task manually（手動によるタスクの開始）] を選択します。

- [Finish（完了）] をクリックした後すぐにタスクを開始するには、[Start task immediately upon completion of this wizard（このウィザードが完了したらタスクをすぐに開始）] を選択します。

  （注） [Monitoring（モニタリング）] ページからタスクを開始することもできます。

ステップ 9 [Next（次へ）] をクリックします。

ステップ 10 タスクを完了するための一連の手順を指定します。 次の選択肢があります。

オプション	説明
[Pencil（ペンシル）] アイコン	手順を編集します。
[Page（ページ）] アイコン	現在の手順の後に新しい手順を追加します。

オプション	説明
X マーク	現在の手順を削除します。 手順からすべてのノードを削除すると、その手順はデフォルトで削除されます。 [Publisher（パブリッシャ）] ノードを含む手順を削除することはできません。
上矢印	手順を上に上げて先に実行されるようにします。
下矢印	手順を下に下げて先に実行されるようにします。

- [Pencil（ペンシル）] アイコンは [Edit Step（手順の編集）] ウィンドウを開きます。 使用可能なノードからこのステップにインストールするノードを追加します。 使用可能なノードはこのクラスタにインストールすることを選択したノードです。
- 各ノードが割り当てられる手順はノードの横に表示されます。 ノードがどの手順にも割り当てられていない場合、未割り当てと表示されます。
- 手順にすべてのノードを割り当てると、デフォルトのシーケンス付けを利用できます。
  重要 すべてのノードを割り当てるまでは次の手順に進むことができません。
- [Pause task after step completes（手順完了後タスクを一時停止）] オプションはこの手順の完了後タスクを一時停止します。 タスクを完了するには次の手順を手動で開始する必要があります。

ステップ 11 [OK] をクリックします。

ステップ 12 [Next（次へ）] をクリックします。
（注） [Next（次へ）] ボタンは有効なままのため、ユーザはクリックして設定の誤りについて確認することができます。

ステップ 13 自分が作成したタスクの詳細を確認するには、[Review（レビュー）] セクションを使用します。 必要に応じてタスクにメモを追加できます。 メモはタスクと共に保存され、タスクが完了前に編集された場合は表示されます。

ステップ 14 [Finish（終了）] をクリックすると、インストール タスクがスケジュールされます。
重要 Unified CM および IM and Presence ノードの両方でフレッシュ インストール クラスタを作成する場合、どの IM and Presence サーバがパブリッシャであるかを必ず指定するようにしてください。 後で、タスクが実行中で、Unified CM Publisher（[System（システム）] > [Server GUI（サーバ GUI）] ページ）へのサブノードのエントリを許可するために Unified CM パブリッシャ インストールの後に停止する場合、IM and Presence パブリッシャはリストに追加する最初のサーバとなります。 これは、IM and Presence の最初のノードとしてインストールされることを確実にします。

（注） Unified CM Publisher は、パブリッシャがインストールされた後、クラスタ内のすべての後続のサーバが Unified CM Administration GUI に追加されることを必要とします。 この要件のため、インストール タスクの作成中、Unified CM Publisher がインストールされた後、Cisco Prime Collaboration Deployment はシーケンス手順内に強制一時停止を自動的に挿入します。

（Publisher が正常にインストールされたあと）この強制一時停止が発生した場合、Unified CM GUI にアクセスして、Cisco Unified Communications Manager Administration を使用して、[Server Configuration（サーバ設定）] ウィンドウ内の後続のサーバ（ノード）を定義する必要があります。後続ノードの定義は、タスクを再開する前に実行する必要があります。

インストール タスクの実行

後日開始するようにタスクをスケジュールした場合、または [Manual Start（手動開始）] を選択した場合、タスクはタスク リストにリストされますが開始されません。 この場合、タスクに関連づけられている [Validation（検証）] ボタンがあります。 実行前に [Validation（検証）] ボタンをクリックしてタスクを確認するのがベストプラクティスです。タスクの開始前に検証を実行することにより、タスク内の問題（.iso がない、VM が [Off（オフ）] の状態でないなど）の存在について警告されます。 これらの問題は、タスクを開始する前に修復できます。

（注） [Validation（検証）] ボタンをクリックしてもタスクは開始されず、タスクが開始された場合に使用されるリソースの確認のみ実行されます。

手動開始がスケジュールされたタスクに関して、このタスクに関連付けられた [Start（開始）] ボタンをクリックしてタスクを開始します。

フレッシュ インストール タスクに 1 つ以上のサーバを含まれるとき、タスク実行中にユーザの介入が必要となる場合があります。 インストール タスクはまず Unified CM パブリッシャを自動的にインストールし、タスク シーケンスには強制一時停止が存在します。 この強制一時停止は、インストール タスクを停止して、ユーザが新規インストールされたパブリッシャの Unified CM GUI に移動して、クラスタ内の他のサーバを [System（システム）]>[Servers GUI（サーバ GUI）] ページから追加できるようにします。 後続ノードを定義するには、[Add New（新規追加）] をクリックし、サーバ設定を継続します。

このクラスタ内にインストールされるすべてのサブスクライバ（Unified CM サブスクライバ、IM and Presence パブリッシャおよび IM and Presence サブスクライバ）が Unified CM publisher GUI に追加されたら、Cisco Prime Collaboration Deployment GUI の [Monitoring（モニタリング）] ページに戻って [Resume（再開）] ボタンをクリックし、インストール タスクが実行を再開できるようにします。 一度タスクが再開されたら、インストール タスクが継続し、後続のサーバに Unified CM または IM and Presence サービス ソフトウェアをインストールします。

インストール後タスク

アクションは必要ありません。新規クラスタの使用を開始できます。

タスク ステータスのモニタ

Cisco Prime Collaboration Deployment タスクのステータスを確認するには、[Monitoring（モニタリング）] ページを使用します。

（注） [Monitoring（モニタリング）] ページから利用可能な情報の詳細は、「モニタリング ビュー要素, （70 ページ）」を参照してください。

手順

ステップ 1 [Monitoring（モニタリング）] ページを表示するには、メイン メニューで [Monitoring（モニタリング）] リンクをクリックします。

ステップ 2 [Monitoring（モニタリング）]ページの左側の列には、各タスクと現在のステータスを示すアイコンがリストされます。 また、タスクのタイプ（移行、アップグレード、インストールなど）およびタスクのクラスタ ニックネームも表示されます。
タスクの開始時間も表示されます。 タスクの詳細なステータスについては、この左列内でタスクをクリックして、右のパネルでそのタスクの詳細データを確認します。

ステップ 3 ページの右上のセクションは以下のデータを表示します。

- ステータス
- 開始時刻
- タスク データ（例：クラスタのニックネームや ISO 名）

タスクの詳細ログ メッセージを表示するには、[View Log（ログの表示）] をクリックします。 このログにエラーまたは警告が表示される場合、詳細を [Troubleshooting（トラブルシューティング）] のセクションで確認してください。

右上には、タスクの各種の操作を実行できるボタンがあります。 たとえば、タスクが一時停止中の場合は [Resume（再開）] ボタンをクリックしてタスクを再開します。

ボタンはタスクの現在の状態に対して有効な場合に表示されます。 たとえば、タスクが終了すると、[Cancel（取り消し）] ボタンはありませんが、代わりに [Delete（削除）] ボタンが表示されます（データをタスクから削除する場合）。

ステップ 4 ページの右下のセクションには、タスクの詳細な手順がその手順のステータスとともに表示されます。 手順の説明を開くには、その手順に対応する三角形をクリックします。
各手順には、その手順のログ メッセージを表示する [View Log（ログの表示）] リンクがあります。

（注） [Monitoring（モニタリング）] ページは 3 分ごとに自動更新されます。 自動更新を無効にするには [Disable（無効）] ボタンをクリックします。

[Monitoring（モニタリング）] ページに表示される可能性のある [Action（アクション）] ボタン

- [Start（開始）]：このボタンは、タスクが [Start Task Manually（タスクを手動で開始）] オプションで作成されると表示されます。 [Start（開始）] ボタンが選択されるとタスクが開始します。
- [Cancel（キャンセル）]：タスクをキャンセルします。 このボタンは、タスクがスケジュールされた状態または実行状態にある場合に表示されます。 タスクがすでに起動している場合、このボタンはすでに完了した手順を元に戻すことはしませんが、タスクをすぐに停止します。
- [Delete（削除）]：システムからタスクを削除します。 これはタスクとその履歴すべてを削除します。
- [Resume（再開）]：タスクが一時停止した場合にこのボタンが表示されます。 これにより、ユーザは次の手順でタスクを再開できます。
- [Retry（再試行）]：このボタンは、タスクが [Pause due to error（エラーにより一時停止）] 状態にある場合に表示されます。 このボタンをクリックすると、何らかのエラーによって失敗した最後の手順のアクションが再試行されます。

[Auto Refresh（自動更新）]

[Monitoring（モニタリング）] ページは 3 分ごとに自動更新されます。 自動更新を無効にする場合は、[Monitoring（モニタリング）] ページの左上隅にある [Disable（無効）] ボタンをクリックします。

管理ツール

E メール通知

電子メール通知機能は、特定のタスク イベントに関する電子メール通知を管理者に送信します。すべての標準タスク イベント（タスクのスケジュール、開始、成功、一時停止、失敗またはキャンセル）に対して、またはタスク エラーに対してのみ電子メールが送信されるように選択できます。 電子メールは、クラスタ検出、アップグレード、移行、バージョン切り替え、再起動、フレッシュ インストール、再アドレス付けのすべてのタイプのタスクに対して送信されます。

電子メールが送信される場合

ユーザが**標準モード**で電子メール通知を受信することを選択した場合、タスクが以下の状態になった場合に電子メールが送信されます。

- Scheduled（スケジュール済）
- Failed to Schedule（スケジュールできませんでした）
- Started（開始）
- Successful（成功）
- Failed （不合格）
- Cancelled （キャンセル）
- Canceling（キャンセル中）
- Failed to Cancel（キャンセルできませんでした）
- Paused on Error（エラーのため一時停止）
- Paused（一時停止）
- Paused – Required（一時停止 - 必須）

ユーザが**エラーのみモード**で電子メール通知を受信することを選択すると、タスクが以下の状態になった場合に電子メールが送信されます。

- Failed to Schedule（スケジュールできませんでした）
- Failed （不合格）
- Failed to Cancel（キャンセルできませんでした）
- Paused on Error（エラーのため一時停止）

電子メール アドレスの入力

エラーまたはタスク イベントが発生した場合に電子メールを受信する電子メールアドレスを入力するには以下の手順に従ってください。

手順

ステップ 1 Cisco Prime Collaboration Deployment のメイン メニューから [Administration（管理）] > [Email Notification（電子メール通知）] を選択します。

ステップ 2 必要な通知レベルを選択します。 選択できる基準は、次のとおりです。

- [Do not send notifications（通知を送信しない）] : タスク イベントが発生しても電子メールは送信されません。
- [Errors only（エラーのみ）] : エラーが発生した（タスクが失敗した）場合にのみ電子メールを送信します。 [Errors only（エラーのみ）] モードで電子メールを受信することを選択した場合、電子メールは、[Failed to Schedule（スケジュールの失敗）]、[Failed（失敗）]、[Failed to Cancel（キャンセルの失敗）]、[Paused on Error（エラーにより一時停止）] の状態にタスクが入った場合に送信されます。

- [Standard（標準）]：タスクが開始、終了、またはエラーが発生した場合に電子メールを送信します。 [Standard（標準）] モードで電子メールを受信することを選択した場合、電子メールはタスクが [Scheduled（スケジュール済み）]、[Failed to Schedule（スケジュール失敗）]、[Started（開始）]、[Successful（成功）]、[Failed（失敗）]、[Canceled（キャンセル）]、[Canceling（キャンセル中）]、[Failed to Cancel（キャンセル失敗）]、[Paused on Error（エラーにより一時停止）]、[Paused（一時停止）]、[Paused – Required（一時停止 - 必須）] の状態に入った場合に送信されます。

ステップ 3 通知したいユーザの電子メール アドレスを入力します。
複数の電子メール アドレスを入力する場合は、それらのアドレスをカンマで区切ります。

ステップ 4 （オプション）Secure Mail サーバを使用したい場合、[Email Recipients（電子メール受信者）] チェックボックスの横の [TLS] チェックボックスをオンにします。

ステップ 5 必要に応じて、メール サーバのクレデンシャル（ユーザ名とパスワード）を入力します。

ステップ 6 [Server settings（サーバ設定）] > [SMTP Server（SMTP サーバ）] を選択し、SMTP サーバの IP アドレスまたはホスト名を選択します。

ステップ 7 [Server settings（サーバ設定）] > [Port（ポート）] を選択します。デフォルトのポート番号は 25 です。
別のポートを使用する場合は、ここに入力します。セキュアなメールサーバを使用する場合は、セキュアな TLS の正しいポートを入力します。

ステップ 8 入力した電子メール アドレスを確認するには、[Send Test Email（テスト電子メールの送信）] ボタンをクリックします。
このボタンをクリックすると、受信者フィールドの各電子メールアドレスにテストメッセージが送信されます。

ヒント テスト電子メールが受信されていることを確認してください。[Send Test Email（テスト電子メールの送信）] をクリックしてもテスト電子メールが送信されない場合、SMTP サーバとポート設定をチェックして、正しく入力されていることを確認します。

ステップ 9 アドレスが正しく入力されていることを確認するには、各ユーザにテスト電子メールを受信したことを確認してもらいます。

ステップ 10 通知の変更を保存するには、[Save（保存）] をクリックします。

ステップ 11 作成した変更を無視するには、[Reset（リセット）] をクリックします。

SFTP データストア

Cisco Prime Collaboration Deployment サーバは、アップグレード、フレッシュ インストール、および移行タスクによって使用される ISO および COP ファイルを保管するのに使用されるローカル SFTP サーバとしても機能します。

リリース 10.x で、Cisco Prime Collaboration Deployment は外部 SFTP の使用をサポートしないため、インストールおよびアップグレード タスクに使用される ISO および COP ファイルを以下の手順を使用して Cisco Prime Collaboration Deployment にアップロードする必要があります。

（注） これらの手順は、Linux を使用して Cisco Prime Collaboration Deployment サーバにファイルを置く方法について説明します。 Linux の代わりに SFTP クライアントを使用するオプションがあります。

移行またはフレッシュ インストール タスク

以下の手順に従って、adminsftp アカウントおよび Cisco Prime Collaboration Deployment GUI（または任意の SFTP クライアントで CLI パスワード）を使用して ISO ファイルを Cisco Prime Collaboration Deployment に SFTP します。

手順

ステップ 1 Linux シェルから、**sftp adminsftp@<Cisco Prime Collaboration Deployment server>** と入力し、パスワードを指定します（これは CLI と GUI の両方で同じです）。

ステップ 2 ディレクトリを **fresh_install** ディレクトリに変更します。
たとえば、Linux シェルから「cd fresh_install」と入力し、Return キーを押します。

ステップ 3 ISO ファイルをアップロードします。
たとえば、「put UCSInstall_UCOS_10.0.x.xxx.sgn.iso」と入力します。

アップグレード タスク

アップグレード タスクに使用される ISO または COP ファイルを SFTP を使用して Cisco Prime Collaboration Deployment にアップロードするには以下の手順を使用します。

手順

ステップ 1 Linux シェルから、**sftp adminsftp@<Cisco Prime Collaboration Deployment server>** と入力し、パスワードを指定します（これは CLI と GUI の両方で同じです）。

ステップ 2 ディレクトリを **upgrade** ディレクトリに変更します。
たとえば、Linux シェルから「cd upgrade」と入力し、Return キーを押します。

ステップ 3 ISO ファイルまたは COP ファイルをアップロードします。
たとえば、「put UCSInstall_UCOS_10.0.x.xxx.sgn.iso」と入力します。

Cisco Prime Collaboration Deployment GUI 上で ISO ファイル名を検証または表示する方法

Cisco Prime Collaboration Deployment GUI 内で ISO ファイル名を検証または表示するには以下の手順を使用します。

手順

ステップ 1 Cisco Prime Collaboration Deployment にログインします。

ステップ 2 Cisco Prime Collaboration Deployment のメイン メニューから [Administration（管理）] > [SFTP Datastore（SFTP データストア）] を選択します。

ステップ 3 このページは、この Cisco Prime Collaboration Deployment サーバの SFTP データストアに保管されるファイルを表示および管理するために使用されます。
サーバ上に保存される ISO および COP ファイルのファイル名およびディレクトリ内の場所（たとえば fresh_install または upgrade）を表示します。

Cisco Prime Collaboration Deployment GUI を使用して Cisco Prime Collaboration Deployment SFTP サーバ上で ISO または COP ファイルを削除する方法

Cisco Prime Collaboration Deployment GUI を使用して Cisco Prime Collaboration Deployment SFTP サーバ上で ISO または COP ファイルを削除するには以下の手順に従います。

手順

ステップ 1 Cisco Prime Collaboration Deployment にログインします。

ステップ 2 Cisco Prime Collaboration Deployment のメイン メニューから [Administration（管理）] > [SFTP Datastore（SFTP データストア）] を選択します。

ステップ 3 ISO または COP ファイルの横のチェックボックスをクリックします。

ステップ 4 [Delete（削除）] をクリックします。

ステップ 5 スペースを節約するため、必要がなくなった ISO または COP ファイルを定期的に削除することをお勧めします。
これは、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバ ソフトウェアをアップグレードする前に特に重要となります。

第 4 章

Cisco Prime Collaboration Deployment 管理インターフェイス要素

次の表は、Cisco Prime Collaboration Deployment の管理インターフェイス要素を示しています。

- 共通の管理インターフェイス要素，69 ページ
- モニタリング ビュー要素，70 ページ
- タスク ビュー要素，75 ページ

共通の管理インターフェイス要素

次の要素は、Cisco Prime Collaboration Deployment の管理インターフェイスのすべてのビューで共通です。

設定	説明
About	Cisco Prime Collaboration Deployment のバージョンを提供します。 著作権および商標情報も含まれます。
ログアウト	サーバを終了します。
ヘルプ	コンテキスト依存のヘルプ情報を提供します。
情報（[i] ボタン）	現在のページの情報を提供します。
開始（フラグ ボタン）	サーバでシステム レベルのタスク実行を開始するための情報を提供します。

モニタリング ビュー要素

タスクのスケジュール設定後は、[Monitoring（モニタリング）]ページを使用してタスクをモニタおよびコントロールできます。

設定	説明
タスク キュー	Cisco Prime Collaboration Deployment 内に含まれるすべてのタスクのリスト。 これらのタスクには次のようなものがあります。 • Scheduled （スケジュール済） • Cancelled （キャンセル） • Started （開始） • Paused （一時停止） • Paused due to Error（エラーにより一時停止） • Successful（成功） • Failed （不合格） • Upgrade Tasks （アップグレード作業） • Switch Version Tasks（バージョン切り替えタスク） • Server Restart Tasks（サーバの再起動タスク） • Readdress Tasks（タスクの再アドレス付け） • Install Tasks（タスクのインストール） • Migrate Tasks（タスクの移行） [Task Queue（タスク キュー）] 内のタスクのいずれかをクリックすると、右上隅にそのタスクの詳細が表示されます。

設定	説明
タスク ステータス	

設定	説明
	[Monitoring（モニタリング）]ページの右上隅には特定のタスクに対して以下が表示されます。 • ステータス • 開始時刻 • タスク データ（例：クラスタ データ） タスクの詳細を表示するには、[View Log（ログの表示）] リンクをクリックします。 以下は、考えられるタスクのステータスを示しています。 • [Successful（成功）]：タスクがエラーなしに完了したことを示しています。 • [Started（開始）]：タスクが現在実行中であることを示しています。 • [Scheduled（スケジュール）]：タスクがスケジュールされたが開始されていないことを示しています。 • [Manual Start（手動開始）]：タスクは開始を待機しています（ユーザはこのタスクを [Start Task Manually（タスクを手動で開始）] オプションで作成しました）。 • [Canceled（取り消し）]：ユーザがタスクを実行しないことを選択したことを示します。 • [Paused（一時停止）]：タスクが一時停止状態でフィードバックを待機していることを示しています。 • [Paused due To Error（エラーによる一時停止）]：タスクがシステム内のエラーにより一時停止状態になっていることを示しています。 • [Failed（失敗）]：エラーによりタスクが停止したことを示しています。 • [Failed to Schedule（スケジュール失敗）]：発生したエラーによりタスクがスケジュールされなかったことを示しています。 • [Failed to Cancel（キャンセル失敗）]：ユーザがタスクのキャンセルを試行したが、キャンセルされなかったことを示しています。 これは通常、タスクが最終状態にある場合に発生します（キャンセルのために残されたアクションはありません）。 • [Cancelling（キャンセル中）]：ユーザがタスクのキャンセルを試行したが、タスクはキャンセルに長時間かかる状態にあることを示しています。 キャンセルされるタスクがインストールま

設定	説明
	たは移行タスク中（新規サーバ段階のインストール中）の場合は、タスクはこの状態に 1 時間以上とどまる場合があります。 [Successful Status（正常なステータス）] 状態の考えられるアクション/メッセージは以下のとおりです。 • Task completed successfully（タスクは正常に完了しました） • [Delete（削除）] : タスク データを永続的に削除します。 [Started（開始）] 状態の考えられるアクションは以下のとおりです。 • [Cancel（キャンセル）] : 選択されたタスクをキャンセルします。 • [Delete（削除）] : タスク データを永続的に削除します。 [Scheduled（スケジュール済み）] 状態の考えられるアクションは以下のとおりです。 • [Cancel（キャンセル）] : 選択されたタスクをキャンセルします。 • [Delete（削除）] : タスク データを永続的に削除します。 [Waiting for Manual Start（手動開始を待機中）] 状態の考えられるアクションは以下のとおりです。 • [Start（開始）] : タスクを開始します（このボタンはタスク作成時にオプション [manual start（手動による開始）] が選択された場合にのみ表示されます）。 • [Delete（削除）] : タスク データを永続的に削除します。 [Paused（一時停止）] 状態の考えられるアクションは以下のとおりです（ユーザがこのステップで一時停止するようタスクを設定したためにタスクはこの状態に入ります）。 • [Resume（再開）] : タスクは次の手順に継続します。 • [Cancel（キャンセル）] : 選択されたタスクをキャンセルします。 • [Delete（削除）] : タスク データを永続的に削除します。 [Paused Due To Errors（エラーによる一時停止）] 状態で考えられるアクションは以下のとおりです（システムがこのステップでエラーを検出したためにタスクはこの状態に入ります）。

設定	説明
	• [Resume（再開）]：タスクは次の手順に継続します（再開する前に、ユーザはビューログでエラーを確認し、エラーの原因となった問題を修正する必要があります。そうしないとタスクは失敗します）。[failed due to validation（検証による失敗）] の場合は再開すると再検証は最初のステップから開始されます。これ以外の場合は再開は次のステップから開始します。 • [Cancel（キャンセル）]：選択されたタスクをキャンセルします。 • [Delete（削除）]：選択されたタスクを永続的に削除します。 [Failed Status（失敗したステータス）] 状態の考えられるアクションは以下のとおりです。 • [Delete（削除）]：選択されたタスクを永続的に削除します。
[Start Task（タスク開始）] ボタン	スケジュールされたタスクに対して実行されるタスクを開始します。
[Edit（編集）] ボタン	スケジュールされたタスクに対して [Edit（編集）] ダイアログを開きます。
[Pause（一時停止）] ボタン	実行中のタスクを（次のステップで）停止します。
[Resume（再開）] ボタン	一時停止されたまたはエラーのために一時停止されたタスクを次のステップで再開します。
[Cancel（キャンセル）] ボタン	スケジュールされた、実行中、一時停止、またはエラーのために一時停止されたタスクをキャンセルします。
[Delete（削除）] ボタン	スケジュールされた、キャンセルされた、成功した、または失敗したタスクを削除します。
タスクの概要	[Task Summary（タスクの概要）] セクションには特定のタスクに対する以下の情報が含まれます。 • 送信元クラスタ • 宛先クラスタ • Unified CM アップグレード ファイル • Unified Presence アップグレード ファイル

タスク ビュー要素

アップグレード ビュー

設定	説明
スケジュールされたタスクおよび履歴テーブル	
ステータス	アップグレード タスクに関する情報を提供します。 • [Successful（成功）] : タスクがエラーなしで終了したことを示します • [Running（実行中）] : タスクが現在実行中であることを示します • [Scheduled（スケジュール）] : タスクがまだ開始されていないことを示します • [Canceled（取り消し）] : ユーザがタスクを実行しないことを選択したことを示します • [Paused（一時停止）] : タスクが一時停止状態でフィードバック待機中であることを示します • [Paused due To Error（エラーにより一時停止）] : タスクがシステム内のエラーにより一時停止状態になっていることを示しています • [Failed（失敗）] : エラーによりタスクが停止したことを示しています
開始時刻	アップグレード タスクの開始時刻を指定します。
Last Status Report Time（最後のステータス レポート時刻）	アクションが完了した時刻を指定します。完了したアクションは成功または失敗のいずれかの状態です。
クラスタ	アップグレードされたクラスタの名前を指定します
注意	[Add Upgrade Task（アップグレード タスクの追加）] ウィザードの [Review（レビュー）] の部分に注意書きを追加

設定	説明
アクション	

設定	説明
	特定のアップグレードタスクに対して以下を実行することを可能にします。 （注） タスクの状態に応じて、これらのタスクの一部のみが許可される場合があります（たとえば、すでに完了したアップグレード タスクはキャンセルできません）。 • [Scheduled（スケジュール済み）] ステータス： ◦ [Run Validation Test（検証テストの実行）]：すべてのノードが利用可能で、使用する iso が存在することを確認するために検証テストを実行します。 ◦ [Edit（編集）]：[Edit Upgrade Task（アップグレード タスクの編集）] ウィンドウを表示します。 選択したタスクを編集することを可能にします。 ◦ [Cancel Task（タスクのキャンセル）]：選択したタスクをキャンセルします。 ◦ [Delete（削除）]：選択したタスクを永続的に削除します。 • [Canceled（キャンセル）] ステータス： ◦ [Delete（削除）]：選択したタスクを永続的に削除します。 • [Started（開始）] ステータス： ◦ [Cancel Task（タスクのキャンセル）]：選択したタスクをキャンセルします。 • [Paused（一時停止）] ステータス： ◦ [Resume（再開）]：次の手順でタスクを再起動するにはこのボタンを使用します。 ◦ [View Details（詳細の表示）]：使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします。 ◦ [Start Task（タスク開始）]：タスク開始はタスクが手動で開始された場合に存在します。 このアクションでは時間は選択されません。 （注） [Start Task（タスク開始）] は、[Set Start Time（開始時間の設定）] パネルで [Start task manually（手動でタスクを開始）] オプションを選択した場合にのみ適用されます。 タスクを手動で選択すると再開オプションはモニタリング ページで使用できなくなります。

設定	説明
	◦ [Cancel Task（タスクのキャンセル）]：選択したタスクをキャンセルします。 • Paused due to Error（エラーにより一時停止）： ◦ [Retry（再試行）]：これによりタスクが再起動し、最後に失敗したタスクのアクションが再試行されます。 ◦ [Resume（再開）]：これにより、タスクが次の手順（失敗した手順の後の手順）で開始します。 ◦ [View Details（詳細の表示）]：使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします。 ◦ [Cancel Task（タスクのキャンセル）]：選択したタスクをキャンセルします。 • [Successful（成功）] ステータス： ◦ [View Details（詳細の表示）]：使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします。 ◦ [Delete（削除）]：選択したタスクを永続的に削除します。 • [Failed（失敗）] ステータス： ◦ [View Details（詳細の表示）]：使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします。 ◦ [Delete（削除）]：選択したタスクを永続的に削除します。

設定	説明
表示	ドロップダウンリストから以下のオプションのいずれかを選択することで、アップグレードタスクをステータスごとにフィルタすることを可能にします。 • [Quick Filter（クイック フィルタ）]：ステータスに基づいてタスクをフィルタします。 • [All（すべて）]：利用可能なすべてのタスクを表示します。 • [Scheduled（スケジュール済み）]：スケジュールされたタスクを表示します。 • [Canceled（キャンセル）]：キャンセルされたタスクを表示します。 • [Running（実行中）]：開始されたタスクを表示します。 • [Paused（一時停止）]：一時停止されたタスクを表示します。 • [Paused due To Error（エラーにより一時停止）]：システムのエラーにより一時停止しているタスクを表示します。 • [Successful（成功）]：成功したタスクを表示します。 • [Failed（失敗）]：失敗したタスクを表示します。
フィルタ	検索ウィンドウの最下部で検索ルールを設定するには、ステータスを選択し、[Filter（フィルタ）] をクリックします。
削除	タスクの横にあるチェックボックスをクリックし、テーブルの最上部にある [Delete（削除）] ボタンをクリックします。 このアクションは、[Failed（失敗）]、[Successful（成功）]、[Scheduled（スケジュール）]、[Paused（一時停止）] の状態に適用されます。
[Add Upgrade Task（アップグレード タスクの追加）] ボタン	[Add Upgrade Task（アップグレード タスクの追加）] ウィザードを開きます。 （注） [Add Upgrade Task（アップグレード タスクの追加）] ウィザードは、特定のアップグレード タスクに対する [Actions（アクション）] 列の [Edit（編集）] を選択することで開くことができます。
[Add Upgrade Task（アップグレード タスクの追加）] ウィザード ウィンドウ アップグレード タスクを追加する方法の詳細は、「アップグレード タスクの作成」を参照してください。	

設定	説明
[Choose Cluster（クラスタの選択）] ページ	[Choose Cluster（クラスタの選択）] ページから、クラスタおよび製品をドロップダウン リストから選択します（すべての製品が [Products（製品）] のデフォルト オプションになっています）。 一度クラスタを選択したら、[Cluster Nodes（クラスタ ノード）] テーブル内のノードのリストが表示されます。
[Choose Upgrade File（アップグレードファイルの選択）] ページ	[Choose Upgrade File（アップグレードファイルの選択）] ページから、アップグレードされる各製品に対するアップグレードファイルを選択します。 [Choose Cluster（クラスタの選択）] ページで選択した製品タイプのファイルを選択するオプションのみ利用できます。
[Set Start Time and Upgrade Options（開始時間とアップグレードオプションの設定）] ページ	[Set Start Time and Upgrade Options（開始時間とアップグレード オプションの設定）] ページから、タスクに対する開始時間を選択します。 （注） 指定された時間は、選択されたクラスタのタイムゾーンではなく、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバ時間に基づいています。 特定の時間の開始、タスクの手動による開始、またはウィザードの完了時の即時開始の設定のオプションがあります。 また、正常なアップグレードに続けて新規バージョンに自動的に切り替えるオプションもあります。
[Specify Run Sequence（実行シーケンスの指定）] ページ	[Specify Run Sequence（実行シーケンスの指定）] から、アップグレードがサーバで処理されるシーケンスを指定します。 手順のシーケンスは、特定の手順の上下矢印をクリックすることで変更できます。 手順を追加および削除したり、既存の手順を編集できます。 前回のシーケンスを再利用するには、[Use Last Configured Run Sequence（最後に設定した実行シーケンスを使用）] ボックスを選択します。 デフォルトでは、各ノードが手順にシーケンスされています。
[Review（レビュー）] ページ	[Review（レビュー）] ページは、前の手順で選択したオプションの概要を示します。 [Nodes（ノード）] フィールドにリストされるノードは表示専用で、選択することはできません。 将来の参照用に [Notes（注記）] フィールドに注記を追加することができます。

バージョン切り替えビュー

設定	説明
スケジュールされたタスクおよび履歴テーブル	

設定	説明
ステータス	バージョン切り替えタスクに関する情報を提供します。 • [Successful（成功）]：タスクがエラーなしで終了したことを示します。 • [Running（実行中）]：タスクが現在実行中であることを示します。 • [Scheduled（スケジュール）]：タスクがまだ開始されていないことを示します。 • [Canceled（取り消し）]：ユーザがタスクを実行しないことを選択したことを示します。 • [Paused（一時停止）]：タスクが一時停止状態でフィードバック待機中であることを示します。 • [Paused due To Error（エラーにより一時停止）]：タスクがシステム内のエラーにより一時停止状態になっていることを示しています。 • [Failed（失敗）]：エラーによりタスクが停止したことを示しています。
開始時刻	バージョン切り替えタスクの開始時刻を指定します。
Last Status Report Time（最後のステータス レポート時刻）	アクションが完了した時刻を指定します。完了したアクションは成功または失敗のいずれかの状態です。
クラスタ	バージョン切り替えクラスタを指定します。
注意	[Add Upgrade Task（アップグレード タスクの追加）] ウィザードの [Review（レビュー）] 部分で追加された注記

設定	説明
アクション	

設定	説明
	以下は、ステータスと対応するアクションを示しています。 • [Scheduled（スケジュール済み）] ステータス： ◦ [Run Validation Test（検証テストの実行）] : すべてのノードが利用可能で、指定したどの新規アドレスにもアクセスできないことを確認する検証テストを実行します。 ◦ [Edit（編集）] : [Edit Switch Version Task（バージョン切り替えタスクの編集）] ウィンドウを示します。 選択したタスクを編集することを可能にします。 ◦ [Cancel Task（タスクのキャンセル）] : 選択したタスクをキャンセルします。 ◦ [Delete（削除）] : 選択したタスクを永続的に削除します。 • [Canceled（キャンセル）] ステータス： ◦ [Delete（削除）] : 選択したタスクを永続的に削除します。 • [Started（開始）] ステータス： ◦ [Cancel Task（タスクのキャンセル）] : 選択したタスクをキャンセルします。 • [Paused（一時停止）] ステータス： ◦ [Resume（再開）] : 次の手順でタスクを再起動します。 ◦ [View Details（詳細の表示）] : 使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします。 ◦ [Start Task（タスク開始）] : タスク開始はタスクが手動で開始された場合に存在します。 このアクションでは時間は選択されません。 （注） [Start Task（タスク開始）] は、[Set Start Time（開始時間の設定）] パネルで [Start task manually（手動でタスクを開始）] オプションを選択した場合にのみ適用されます。 タスクを手動で選択すると再開オプションはモニタリング ページで使用できなくなります。 ◦ [Cancel Task（タスクのキャンセル）] : 選択したタスクをキャンセルします。 • Paused due to Error（エラーにより一時停止）：

設定	説明
	◦ [Retry（再試行）]：これによりタスクが再起動し、最後に失敗したタスクのアクションが再試行されます。 ◦ [Resume（再開）]：これにより、タスクが次の手順（失敗した手順の後の手順）で開始します。 ◦ [View Details（詳細の表示）]：使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします。 ◦ [Cancel Task（タスクのキャンセル）]：選択したタスクをキャンセルします。 • [Successful（成功）] ステータス： ◦ [View Details（詳細の表示）]：使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします。 ◦ [Delete（削除）]：選択したタスクを永続的に削除します。 • [Failed（失敗）] ステータス： ◦ [View Details（詳細の表示）]：使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします。 ◦ [Delete（削除）]：選択したタスクを永続的に削除します。

設定	説明
表示	ドロップダウンリストから以下のオプションのいずれかを選択することで、バージョン切り替えタスクをステータスごとにフィルタすることを可能にします。 • [Quick Filter（クイック フィルタ）]：ステータスに基づいてタスクをフィルタします。 • [All（すべて）]：利用可能なすべてのタスクを表示します。 • [Scheduled（スケジュール済み）]：スケジュールされたタスクを表示します。 • [Canceled（キャンセル）]：キャンセルされたタスクを表示します。 • [Running（実行中）]：開始されたタスクを表示します。 • [Paused（一時停止）]：一時停止されたタスクを表示します。 • [Paused due To Error（エラーにより一時停止）]：システムのエラーにより一時停止しているタスクを表示します。 • [Successful（成功）]：成功したタスクを表示します。 • [Failed（失敗）]：失敗したタスクを表示します。
フィルタ	検索ウィンドウの最下部で検索ルールを設定するには、ステータスを選択し、[Filter（フィルタ）] をクリックします。
削除	タスクの横にあるチェックボックスをクリックし、テーブルの最上部にある [Delete（削除）] ボタンをクリックします。 削除するタスクの [Actions（アクション）] 列の下の [Delete（削除）] をクリックすることもできます。
[Add Switch Versions Task（バージョン切り替えタスクの追加）] ボタン	[Switch Versions Task（バージョン切り替えタスク）] ウィザードを開きます。 （注） [Switch Versions Task（バージョン切り替えタスク）] ウィザードは、特定のスイッチ切り替えタスクに対する [Actions（アクション）] 列の [Edit（編集）] を選択することで開くことができます。
[Add Switch Versions Task（バージョン切り替えタスクの追加）] ウィンドウ バージョン切り替えタスクを追加する方法に関する情報は、[Create a switch versions task（バージョン切り替えタスクの作成）] を参照してください。	

設定	説明
[Choose Cluster（クラスタの選択）] ページ	[Choose Cluster（クラスタの選択）] ページで、ドロップダウン リストからクラスタを選択します。 一度クラスタを選択したら、製品バージョン（パブリッシャにインストールされている）をドロップダウン リストから選択する必要があります。 クラスタに複数の製品がある場合、一つ以上の製品のバージョンを切り替えないオプションがあります。 1 つの有効なバージョンを選択するかぎり先に進むことができます。
[Set Start Time（開始時間の設定）] ページ	[Set Start Time（開始時間の設定）] ページから、タスクに対する開始時間を選択します。 （注） 指定された時間は、選択されたクラスタのタイムゾーンではなく、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバ時間に基づいています。 特定の時間の開始、タスクの手動による開始、またはウィザードの完了時の即時開始の設定のオプションがあります。
[Set Run Sequence（実行シーケンスの設定）] ページ	[Specify Run Sequence（実行シーケンスの指定）] から、バージョン切り替えがサーバで処理されるシーケンスを指定します。 手順のシーケンスは、特定の手順の上下矢印をクリックすることで変更できます。 手順を追加および削除したり、既存の手順を編集できます。 前回のシーケンスを再利用するには、[Use Last Configured Run Sequence（最後に設定した実行シーケンスを使用）] ボックスを選択します。 デフォルトでは、各ノードが手順にシーケンスされています。 [Revert to Default（デフォルトに戻す）] ボタンは、手順を元の状態に戻します。
[Review（レビュー）] ページ	[Review（レビュー）] ページは、前の手順で選択したオプションの概要を示します。 [Nodes（ノード）] フィールドにリストされるノードは表示専用で、選択することはできません。 将来の参照用に [Notes（注記）] フィールドに注記を追加することができます。

サーバ再起動ビュー

設定	説明
スケジュールされたタスクおよび履歴テーブル	

設定	説明
ステータス	サーバ再起動タスクに関する情報を提供します。 • [Successful（成功）] : タスクがエラーなしで終了したことを示します。 • [Running（実行中）] : タスクが現在実行中であることを示します。 • [Scheduled（スケジュール）] : タスクがまだ開始されていないことを示します。 • [Canceled（取り消し）] : ユーザがタスクを実行しないことを選択したことを示します。 • [Paused（一時停止）] : タスクが一時停止状態でフィードバック待機中であることを示します。 • [Paused due To Error（エラーにより一時停止）] : タスクがシステム内のエラーにより一時停止状態になっていることを示しています。 • [Failed（失敗）] : エラーによりタスクが停止したことを示しています。
開始時刻	サーバ再起動タスクの開始時刻を指定します。
Last Status Report Time（最後のステータス レポート時刻）	アクションが完了した時刻を指定します。 完了したアクションは成功または失敗のいずれかの状態です。
クラスタ	サーバ再起動クラスタを指定します。
注意	[Add Restart Task（再起動タスクの追加）] ウィザードの [Review（レビュー）] 部分で追加された注記

設定	説明
アクション	

設定	説明
	以下は、ステータスと対応するアクションを示しています。 • [Scheduled（スケジュール済み）] ステータス： ◦ [Run Validation Test（検証テストの実行）] : すべてのノードが利用可能で、指定したどの新規アドレスにもアクセスできないことを確認する検証テストを実行します。 ◦ [Edit（編集）] : [Edit Upgrade Task（アップグレード タスクの編集）] ウィンドウを表示します。 選択したタスクを編集することを可能にします。 ◦ [Cancel Task（タスクのキャンセル）] : 選択したタスクをキャンセルします。 ◦ [Delete（削除）] : 選択したタスクを永続的に削除します。 • [Canceled（キャンセル）] ステータス： ◦ [Edit（編集）] : [Edit Server Restart Task（サーバ再起動タスクの編集）] ウィンドウを表示します。 選択したタスクを編集することを可能にします。 ◦ [Delete（削除）] : 選択したタスクを永続的に削除します。 • [Started（開始）] ステータス： ◦ [Cancel Task（タスクのキャンセル）] : 選択したタスクをキャンセルします。 • [Paused（一時停止）] ステータス： ◦ [Resume（再開）] : 次の手順でタスクを再起動します。 ◦ [View Details（詳細の表示）] : 使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします。 ◦ [Start Task（タスク開始）] : タスク開始はタスクが手動で開始された場合に存在します。 このアクションでは時間は選択されません。 （注） [Start Task（タスク開始）] は、[Set Start Time（開始時間の設定）] パネルで [Start task manually（手動でタスクを開始）] オプションを選択した場合にのみ適用されます。 タスクを手動で選択すると再開オプションはモニタリング ページで使用できなくなります。 ◦ [Cancel Task（タスクのキャンセル）] : 選択したタスクを

設定	説明
	キャンセルします。 • Paused due to Error（エラーにより一時停止）： ◦ [Retry（再試行）]：これによりタスクが再起動し、最後に失敗したタスクのアクションが再試行されます。 ◦ [Resume（再開）]：これにより、タスクが次の手順（失敗した手順の後の手順）で開始します。 ◦ [View Details（詳細の表示）]：使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします。 ◦ [Cancel Task（タスクのキャンセル）]：選択したタスクをキャンセルします。 • [Successful（成功）] ステータス： ◦ [View Details（詳細の表示）]：使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします。 ◦ [Delete（削除）]：選択したタスクを永続的に削除します。 • [Failed（失敗）] ステータス： ◦ [View Details（詳細の表示）]：使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします。 ◦ [Delete（削除）]：選択したタスクを永続的に削除します。

設定	説明
表示	ドロップダウンリストから以下のオプションのいずれかを選択することで、再起動タスクをステータスごとにフィルタすることを可能にします。 • [Quick Filter（クイック フィルタ）]：ステータスに基づいてタスクをフィルタします。 • [All（すべて）]：利用可能なすべてのタスクを表示します。 • [Scheduled（スケジュール済み）]：スケジュールされたタスクを表示します。 • [Canceled（キャンセル）]：キャンセルされたタスクを表示します。 • [Running（実行中）]：開始されたタスクを表示します。 • [Paused（一時停止）]：一時停止されたタスクを表示します。 • [Paused due To Error（エラーにより一時停止）]：タスクがシステム内のエラーにより一時停止状態になっていることを示しています。 • [Successful（成功）]：成功したタスクを表示します。 • [Failed（失敗）]：失敗したタスクを表示します。
フィルタ	検索ウィンドウの最下部で検索ルールを設定するには、ステータスを選択し、[Filter（フィルタ）] をクリックします。
削除	タスクの横にあるチェックボックスをクリックし、テーブルの最上部にある [Delete（削除）] ボタンをクリックします。 削除するタスクの [Actions（アクション）] 列の下の [Delete（削除）] をクリックすることもできます。
[Add Server Restart Task（サーバ再起動タスクの追加）] ボタン	[Add Server Restart Task（サーバ再起動タスクの追加）] ウィザードを開きます。 （注） [Add Server Restart Task（サーバ再起動タスクの追加）] ウィザードは、特定のサーバ再起動タスクに対する [Actions（アクション）] 列の [Edit（編集）] を選択することで開くことができます。
[Add Server Restart Task（サーバ再起動タスクの追加）] ウィンドウ サーバ再起動タスクを追加する方法にについては「再起動タスクの作成」を参照してください。	

設定	説明
[Choose Cluster（クラスタの選択）] ページ	[Choose Cluster（クラスタの選択）] ページで、ドロップダウン リストからクラスタを選択します。 一度クラスタが選択されたら、[Cluster Nodes（クラスタ ノード）] テーブルでリストされるノードが適宜変更されます。 再起動するサーバを選択します。
[Set Start Time（開始時間の設定）] ページ	[Set Start Time（開始時間の設定）] ページから、タスクに対する開始時間を選択します。 （注） 指定された時間は、選択されたクラスタのタイムゾーンではなく、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバ時間に基づいています。 開始時間には、特定の時間の指定、手動による設定、またはウィザードの完了時の即時開始の設定のオプションがあります。
[Set Run Sequence（実行シーケンスの設定）] ページ	[Set Run Sequence（実行シーケンスの設定）] から、再起動がサーバで処理されるシーケンスを指定します。 手順のシーケンスは、特定の手順の上下矢印をクリックすることで変更できます。 手順を追加および削除したり、既存の手順を編集できます。 前回のシーケンスを再利用するには、[Use Last Configured Run Sequence（最後に設定した実行シーケンスを使用）] ボックスを選択します。 デフォルトでは、各ノードが手順にシーケンスされています。 [Revert to Default（デフォルトに戻す）] ボタンは、手順を元の状態に戻します。
[Review（レビュー）] ページ	[Review（レビュー）] ページは、前の手順で選択したオプションの概要を示します。 [Nodes（ノード）] フィールドにリストされるノードは表示専用で、選択することはできません。 将来の参照用に [Notes（注記）] フィールドに注記を追加することができます。

再アドレス付けビュー

設定	説明
スケジュールされたタスクおよび履歴テーブル	

設定	説明
ステータス	再アドレス付けタスクに関する情報を提供します。 • [Successful（成功）] : タスクがエラーなしで終了したことを示します。 • [Running（実行中）] : タスクが現在実行中であることを示します。 • [Scheduled（スケジュール）] : タスクがまだ開始されていないことを示します。 • [Canceled（取り消し）] : ユーザがタスクを実行しないことを選択したことを示します。 • [Paused（一時停止）] : タスクが一時停止状態でフィードバック待機中であることを示します。 • [Paused due To Error（エラーにより一時停止）] : タスクがシステム内のエラーにより一時停止状態になっていることを示しています。 • [Failed（失敗）] : エラーによりタスクが停止したことを示しています。
開始時刻	再アドレス付けタスクの開始時刻を指定します。
Last Status Report Time（最後のステータス レポート時刻）	アクションが完了した時刻を指定します。完了したアクションは成功または失敗のいずれかの状態です。
クラスタ	再アドレス付けクラスタを指定します。
注意	[Add Readdress Task（再アドレス付けタスクの追加）] ウィザードの [Review（レビュー）] 部分で追加された注記

設定	説明
アクション	

設定	説明
	以下は、ステータスと対応するアクションを示しています。 • [Scheduled（スケジュール済み）] ステータス： ◦ [Run Validation Test（検証テストの実行）] : すべてのノードが利用可能で、指定したどの新規アドレスにもアクセスできないことを確認する検証テストを実行します。 ◦ [Edit（編集）] : [Edit Readdress Task（再アドレス付けタスクの編集）] ウィンドウを表示します。 選択したタスクを編集することを可能にします。 ◦ [Cancel Task（タスクのキャンセル）] : 選択したタスクをキャンセルします ◦ [Delete（削除）] : 選択したタスクを永続的に削除します。 • [Canceled（キャンセル）] ステータス： ◦ [Edit（編集）] : [Edit Upgrade Task（アップグレード タスクの編集）] ウィンドウを表示します。 選択したタスクを編集することを可能にします。 ◦ [Delete（削除）] : 選択したタスクを永続的に削除します。 • [Started（開始）] ステータス： ◦ [Cancel Task（タスクのキャンセル）] : 選択したタスクをキャンセルします • [Paused（一時停止）] ステータス： ◦ [Resume（再開）] : 次の手順でタスクを再起動します。 ◦ [View Details（詳細の表示）] : 使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします ◦ [Start Task（タスク開始）] : タスク開始はタスクが手動で開始された場合に存在します。 このアクションでは時間は選択されません。 （注） [Start Task（タスク開始）] は、[Set Start Time（開始時間の設定）] パネルで [Start task manually（手動でタスクを開始）] オプションを選択した場合にのみ適用されます。 タスクを手動で選択すると再開オプションはモニタリング ページで使用できなくなります。 ◦ [Cancel Task（タスクのキャンセル）] : 選択したタスクを

設定	説明
	キャンセルします • Paused due to Error（エラーにより一時停止）： ◦ [Retry（再試行）]：これによりタスクが再起動し、最後に失敗したタスクのアクションが再試行されます。 ◦ [Resume（再開）]：これにより、タスクが次の手順（失敗した手順の後の手順）で開始します。 ◦ [View Details（詳細の表示）]：使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします ◦ [Cancel Task（タスクのキャンセル）]：選択したタスクをキャンセルします • [Successful（成功）] ステータス： ◦ [View Details（詳細の表示）]：使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします ◦ [Delete（削除）]：選択したタスクを永続的に削除します。 • [Failed（失敗）] ステータス： ◦ [View Details（詳細の表示）]：使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします ◦ [Delete（削除）]：選択したタスクを永続的に削除します。

設定	説明
表示	ドロップダウンリストから以下のオプションのいずれかを選択することで、再アドレス付けタスクをステータスごとにフィルタすることを可能にします。 • [Quick Filter（クイック フィルタ）]：ステータスに基づいてタスクをフィルタします。 • [All（すべて）]：利用可能なすべてのタスクを表示します。 • [Scheduled（スケジュール済み）]：スケジュールされたタスクを表示します。 • [Canceled（キャンセル）]：キャンセルされたタスクを表示します。 • [Running（実行中）]：開始されたタスクを表示します。 • [Paused（一時停止）]：一時停止されたタスクを表示します。 • [Paused due To Error（エラーにより一時停止）]：システムのエラーにより一時停止しているタスクを表示します。 • [Successful（成功）]：成功したタスクを表示します。 • [Failed（失敗）]：失敗したタスクを表示します。
フィルタ	検索ウィンドウの最下部で検索ルールを設定するには、ステータスを選択し、[Filter（フィルタ）] をクリックします。
削除	タスクの横にあるチェックボックスをクリックし、テーブルの最上部にある [Delete（削除）] ボタンをクリックします。 削除するタスクの [Actions（アクション）] 列の下の [Delete（削除）] をクリックすることもできます。
[Add Readdress Task（再アドレス付けタスクの追加）] ボタン	[Add Readdress Task（再アドレス付けタスクの追加）] ウィザードを開きます。 （注） [Add Readdress Task（再アドレス付けタスクの追加）] ウィザードは、特定の再アドレス付けタスクに対する [Actions（アクション）] 列の [Edit（編集）] を選択することで開くことができます。
[Add Readdress Task（再アドレス付けタスクの追加）] ウィンドウ 再アドレス付けタスクを追加する方法にについては「再アドレス付けタスクの作成」を参照してください。	

設定	説明
[Choose Cluster（クラスタの選択）] ページ	[Choose Cluster（クラスタの選択）] ページで、ドロップダウン リストからクラスタを選択します。 このクラスタに関連付けられたノードで [View Nodes（ノードの表示）] をクリックします。 以下を識別する表内のノードをリストする [View UC Cluster Nodes（UC クラスタ ノードの表示）] ダイアログ ボックスが開きます。 • ホスト名 • IP アドレス • 製品 • ロール [View UC Cluster Nodes（UC クラスタ ノードの表示）] ダイアログ ボックスを編集することはできません。 [Close（閉じる）] をクリックし、[Choose Cluster（クラスタの選択）] ページに戻ります。
[Enter New Hostnames/IP Addresses（新規ホスト名/IP アドレスの入力）] ページ	[Enter New Hostnames/IP Addresses（新規ホスト名/IP アドレスの入力）] ページから、[Actions（アクション）] 列の下の [Edit（編集）] をクリックして [Edit Hostname/IP Address（ホスト名/IP アドレスの編集）] ダイアログ ボックスを開きます。 このダイアログ ボックスを使用して、再アドレス付けをするクラスタ ノードに対する新規ホスト名または IP アドレスを入力できます。 DHCP またはスタティック IP アドレスを使用するオプションがあります。
[Set Start Time（開始時間の設定）] ページ	[Set Start Time（開始時間の設定）] ページから、タスクに対する開始時間を選択します。 （注） 指定された時間は、選択されたクラスタのタイムゾーンではなく、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバ時間に基づいています。 開始時間には、特定の時間の指定、手動による設定、またはウィザードの完了時の即時開始の設定のオプションがあります。
[Set Run Sequence（実行シーケンスの設定）] ページ	[Set Run Sequence（実行シーケンスの設定）] から、再アドレス付けがサーバで処理されるシーケンスを指定します。 手順のシーケンスは、特定の手順の上下矢印をクリックすることで変更できます。 手順を追加および削除したり、既存の手順を編集できます。 前回のシーケンスを再利用するには、[Use Last Configured Run Sequence（最後に設定した実行シーケンスを使用）] ボックスを選択します。 デフォルトでは、各ノードが手順にシーケンスされています。 [Revert to Default（デフォルトに戻す）] ボタンは、手順を元の状態に戻します。

設定	説明
[Review（レビュー）] ページ	[Review（レビュー）] ページは、前の手順で選択したオプションの概要を示します。 [Nodes（ノード）] フィールドにリストされるノードは表示専用で、選択することはできません。 将来の参照用に [Notes（注記）] フィールドに注記を追加することができます。

インストール ビュー

設定	説明
スケジュールされたタスクおよび履歴テーブル	
ステータス	インストール タスクに関する情報を提供します。 • [Successful（成功）] : タスクがエラーなしで終了したことを示します • [Running（実行中）] : タスクが現在実行中であることを示します • [Scheduled（スケジュール）] : タスクがまだ開始されていないことを示します • [Canceled（取り消し）] : ユーザがタスクを実行しないことを選択したことを示します • [Paused（一時停止）] : タスクが一時停止状態でフィードバック待機中であることを示します • [Paused due To Error（エラーにより一時停止）] : タスクがシステム内のエラーにより一時停止状態になっていることを示しています • [Failed（失敗）] : エラーによりタスクが停止したことを示しています
開始時刻	インストール タスクの開始時刻を指定します。
Last Status Report Time（最後のステータス レポート時刻）	アクションが完了した時刻を指定します。 完了したアクションは成功または失敗のいずれかの状態です。
クラスタ	インストール クラスタを指定します
注意	[Add Install Task（インストール タスクの追加）] ウィザードの [Review（レビュー）] 部分で追加された注記

設定	説明
アクション	

設定	説明
	以下は、ステータスと対応するアクションを示しています。 • [Scheduled（スケジュール済み）] ステータス： ◦ [Run Validation Test（検証テストの実行）]：すべての ESXi ホストが存在し、VMが正しい状態にあり、インストールで使用する .iso ファイルが存在することを確認するための検証テストを実行します。 ◦ [Edit（編集）]：[Edit Upgrade Task（アップグレード タスクの編集）] ウィンドウを表示します。 選択したタスクを編集することを可能にします。 ◦ [Cancel Task（タスクのキャンセル）]：選択したタスクをキャンセルします ◦ [Delete（削除）]：選択したタスクを永続的に削除します。 • [Canceled（キャンセル）] ステータス： ◦ [Delete（削除）]：選択したタスクを永続的に削除します。 • [Started（開始）] ステータス： ◦ [Cancel Task（タスクのキャンセル）]：選択したタスクをキャンセルします • [Paused（一時停止）] ステータス： ◦ [Resume（再開）]：次の手順でタスクを再起動します。 ◦ [View Details（詳細の表示）]：使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします ◦ [Start Task（タスク開始）]：タスク開始はタスクが手動で開始された場合に存在します。 このアクションでは時間は選択されません。 （注） [Start Task（タスク開始）] は、[Set Start Time（開始時間の設定）] パネルで [Start task manually（手動でタスクを開始）] オプションを選択した場合にのみ適用されます。 タスクを手動で選択すると再開オプションはモニタリング ページで使用できなくなります。 ◦ [Cancel Task（タスクのキャンセル）]：選択したタスクをキャンセルします • Paused due to Error（エラーにより一時停止）：

設定	説明
	◦ [Retry（再試行）]：最後に失敗した手順を再試行します。このボタンによって、タスクは失敗した最後の手順を再試行し、タスクを再起動します。 ◦ [Resume（再開）]：次の手順でタスクを再開します。 このオプションは、失敗した手順が重要でないか、そのステップを手動で実行した場合にのみ使用してください。 ◦ [View Details（詳細の表示）]：使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします ◦ [Cancel Task（タスクのキャンセル）]：選択したタスクをキャンセルします • [Successful（成功）] ステータス： ◦ [View Details（詳細の表示）]：使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします ◦ [Delete（削除）]：選択したタスクを永続的に削除します。 • [Failed（失敗）] ステータス： ◦ [View Details（詳細の表示）]：使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします ◦ [Delete（削除）]：選択したタスクを永続的に削除します。

設定	説明
表示	ドロップダウンリストから以下のオプションのいずれかを選択することで、インストールタスクをステータスごとにフィルタすることを可能にします。 • [Quick Filter（クイック フィルタ）]：ステータスに基づいてタスクをフィルタします。 • [All（すべて）]：利用可能なすべてのタスクを表示します。 • [Scheduled（スケジュール済み）]：スケジュールされたタスクを表示します。 • [Canceled（キャンセル）]：キャンセルされたタスクを表示します。 • [Running（実行中）]：開始されたタスクを表示します。 • [Paused（一時停止）]：一時停止されたタスクを表示します。 • [Paused due To Error（エラーにより一時停止）]：システムのエラーにより一時停止しているタスクを表示します。 • [Successful（成功）]：成功したタスクを表示します。 • [Failed（失敗）]：失敗したタスクを表示します。
フィルタ	検索ウィンドウの最下部で検索ルールを設定するには、ステータスを選択し、[Filter（フィルタ）] をクリックします。
削除	タスクの横にあるチェックボックスをクリックし、テーブルの最上部にある [Delete（削除）] ボタンをクリックします。 削除するタスクの [Actions（アクション）] 列の下の [Delete（削除）] をクリックすることもできます。
[Add Install Task（インストール タスクの追加）] ボタン	[Add Installation Task（インストール タスクの追加）] ウィザードを開きます。 （注） [Add Installation Task（インストール タスクの追加）] ウィザードは、特定のインストール タスクに対する [Actions（アクション）] 列の [Edit（編集）] を選択することで開くことができます。
[Add Installation Task（インストール タスクの追加）] ウィンドウ インストール タスクを追加する方法の詳細は、「インストール タスクの作成」を参照してください。	

設定	説明
[Choose Installation Cluster（インストールクラスタの選択）] ページ	[Choose Cluster（クラスタの選択）] ページで、ドロップダウン リストからクラスタを選択します。 一度クラスタが選択されたら、[Installation Cluster Nodes（インストレーション クラスタ ノード）] テーブルでリストされるノードが適宜変更されます。
[Choose Installation Files（インストールファイルの選択）] ページ	[Choose Installation Files（インストール ファイルの選択）] ページから、ステージング クラスタにインストールするインストール イメージを選択します。 .iso イメージは、Cisco Prime Collaboration Deployment のシステム sftp サーバ上の /install ディレクトリにアップロードする必要があります。
[Set Start Time（開始時間の設定）] ページ	[Set Start Time（開始時間の設定）] ページから、タスクに対する開始時間を選択します。 （注） 指定された時間は、選択されたクラスタのタイムゾーンではなく、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバ時間に基づいています。 特定の時間の開始、タスクの手動による開始、またはウィザードの完了時の即時開始の設定のオプションがあります。
[Specify Installation Sequence（インストール シーケンスの指定）] ページ	[Specify Installation Sequence（インストール シーケンスの指定）] から、インストールがサーバで処理されるシーケンスを指定します。 手順のシーケンスは、特定の手順の上下矢印をクリックすることで変更できます。 手順を追加および削除したり、既存の手順を編集できます。 デフォルトでは、各ノードが手順にシーケンスされています。
[Review（レビュー）] ページ	[Review（レビュー）] ページは、前の手順で選択したオプションの概要を示します。 [Nodes（ノード）] フィールドにリストされるノードは表示専用で、選択することはできません。 将来の参照用に [Notes（注記）] フィールドに注記を追加することができます。

移行ビュー

設定	説明
スケジュールされたタスクおよび履歴テーブル	

設定	説明
ステータス	移行タスクに関する情報を提供します。 • [Successful（成功）] : タスクがエラーなしで終了したことを示します • [Running（実行中）] : タスクが現在実行中であることを示します • [Scheduled（スケジュール）] : タスクがまだ開始されていないことを示します • [Canceled（取り消し）] : ユーザがタスクを実行しないことを選択したことを示します • [Paused（一時停止）] : タスクが一時停止状態でフィードバック待機中であることを示します • [Paused due To Error（エラーにより一時停止）] : タスクがシステム内のエラーにより一時停止状態になっていることを示しています • [Failed（失敗）] : エラーによりタスクが停止したことを示しています
開始時刻	移行タスクの開始時刻を指定します。
Last Status Report Time（最後のステータス レポート時刻）	アクションが完了した時刻を指定します。 完了したアクションは成功または失敗のいずれかの状態です。
クラスタ	移行されるクラスタを指定します。
注意	[Add Migration Task（移行タスクの追加）] ウィザードの [Review（レビュー）] 部分で追加された注記

設定	説明
アクション	

設定	説明
	以下は、ステータスと対応するアクションを示しています。 • [Scheduled（スケジュール済み）] ステータス： ◦ [Run Validation Test（検証テストの実行）]：すべてのノードが利用可能で、指定したどの新規アドレスにもアクセスできないことを確認する検証テストを実行します。 VM が存在する ESXi ホストがマウントされていることも確認します。使用される .iso ファイルが存在することも検証します。 ◦ [Edit（編集）]：[Edit Upgrade Task（アップグレード タスクの編集）] ウィンドウを表示します。 選択したタスクを編集することを可能にします。 ◦ [Cancel Task（タスクのキャンセル）]：選択したタスクをキャンセルします ◦ [Delete（削除）]：選択したタスクを永続的に削除します。 • [Canceled（キャンセル）] ステータス： ◦ [Delete（削除）]：選択したタスクを永続的に削除します。 • [Started（開始）] ステータス： ◦ [Cancel Task（タスクのキャンセル）]：選択したタスクをキャンセルします • [Paused（一時停止）] ステータス： ◦ [Resume（再開）]：次の手順でタスクを再起動します。 ◦ [View Details（詳細の表示）]：使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします ◦ [Start Task（タスク開始）]：タスク開始はタスクが手動で開始された場合に存在します。 このアクションでは時間は選択されません。 （注） [Start Task（タスク開始）] は、[Set Start Time（開始時間の設定）] パネルで [Start task manually（手動でタスクを開始）] オプションを選択した場合にのみ適用されます。 タスクを手動で選択すると再開オプションはモニタリング ページで使用できなくなります。 ◦ [Cancel Task（タスクのキャンセル）]：選択したタスクをキャンセルします

設定	説明
	• Paused due to Error（エラーにより一時停止）： ◦ [Retry（再試行）]：最後に失敗した手順を再試行します。このボタンによって、タスクは失敗した最後の手順を再試行し、タスクを再起動します。 ◦ [Resume（再開）]：次の手順でタスクを再開します。 このオプションは、失敗した手順が重要でないか、そのステップを手動で実行した場合にのみ使用してください。 ◦ [View Details（詳細の表示）]：使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします ◦ [Cancel Task（タスクのキャンセル）]：選択したタスクをキャンセルします • [Successful（成功）] ステータス： ◦ [View Details（詳細の表示）]：使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします ◦ [Delete（削除）]：選択したタスクを永続的に削除します。 • [Failed（失敗）] ステータス： ◦ [View Details（詳細の表示）]：使用可能なすべてのタスクを表示するモニタリング ページにナビゲートします ◦ [Delete（削除）]：選択したタスクを永続的に削除します。

設定	説明
表示	ドロップダウンリストから以下のオプションのいずれかを選択することで、移行タスクをステータスごとにフィルタすることを可能にします。 • [Quick Filter（クイック フィルタ）]：ステータスに基づいてタスクをフィルタします。 • [All（すべて）]：利用可能なすべてのタスクを表示します。 • [Scheduled（スケジュール済み）]：スケジュールされたタスクを表示します。 • [Canceled（キャンセル）]：キャンセルされたタスクを表示します。 • [Running（実行中）]：開始されたタスクを表示します。 • [Paused（一時停止）]：一時停止されたタスクを表示します。 • [Paused due To Error（エラーにより一時停止）]：システムのエラーにより一時停止しているタスクを表示します。 • [Successful（成功）]：成功したタスクを表示します。 • [Failed（失敗）]：失敗したタスクを表示します。
フィルタ	検索ウィンドウの最下部で検索ルールを設定するには、ステータスを選択し、[Filter（フィルタ）] をクリックします。
削除	タスクの横にあるチェックボックスをクリックし、テーブルの最上部にある [Delete（削除）] ボタンをクリックします。 削除するタスクの [Actions（アクション）] 列の下の [Delete（削除）] をクリックすることもできます。
[Add Migration Task（移行タスクの追加）] ボタン	[Add Migration Task（移行タスクの追加）] ウィザードを開きます。 （注） [Add Migration Task（移行タスクの追加））] ウィザードは、特定の移行タスクに対する [Actions（アクション）] 列の [Edit（編集）] を選択することで開くことができます。
[Add Migration Task（移行タスクの追加）] ウィンドウ 移行タスクを追加する方法については、「移行タスクの追加」を参照してください。	

設定	説明
[Choose Source and Destination Clusters（送信元および宛先クラスタの選択）] ページ	[Choose Source and Destination Clusters（送信元および宛先クラスタの選択）] ページで、ドロップダウン リストから送信元 UC クラスタを選択します。 一度送信元クラスタが選択されたら、ドロップダウン リストから宛先クラスタ、そして [Node Mapping from Source to Destination Cluster（送信元から宛先クラスタのノード マッピング）] テーブルからノードを選択します。
[Choose Upgrade File（アップグレードファイルの選択）] ページ	[Choose Upgrade File（アップグレードファイルの選択）] ページから、アップグレードされる各製品に対するアップグレードファイルを選択します。 [Choose Cluster（クラスタの選択）] ページで選択した製品タイプのファイルを選択するオプションのみ利用できます。
[Set Start Time（開始時間の設定）] ページ	[Set Start Time（開始時間の設定）] ページから、タスクに対する開始時間を選択します。 （注） 指定された時間は、選択されたクラスタのタイムゾーンではなく、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバ時間に基づいています。 開始時間には、特定の時間の指定、手動による設定、またはウィザードの完了時の即時開始の設定のオプションがあります。
[Specify Migration Procedure（移行手順の指定）] ページ	[Specify Migration Procedure（移行手順の指定）] ページから、移行がサーバで処理されるシーケンスを指定します。 手順のシーケンスは、特定の手順の上下矢印をクリックすることで変更できます。 手順を追加および削除したり、既存の手順を編集できます。 デフォルトでは、各ノードが手順にシーケンスされています。 [Revert to Default（デフォルトに戻す）] ボタンは、手順を元の状態に戻します。
[Review（レビュー）] ページ	[Review（レビュー）] ページは、前の手順で選択したオプションの概要を示します。 [Nodes（ノード）] フィールドにリストされるノードは表示専用で、選択することはできません。 将来の参照用に [Notes（注記）] フィールドに注記を追加することができます。

関連タスク

- 移行タスク，（35 ページ）
- インストール タスク，（58 ページ）
- 再アドレス付けタスク，（55 ページ）
- サーバ再起動タスク，（53 ページ）

• バージョン切り替えタスク，（50 ページ）
• アップグレード タスク，（47 ページ）

第 5 章

Cisco Prime Collaboration Deployment の設定および管理

- サービス，113 ページ
- 制限事項，117 ページ

サービス

Cisco Prime Collaboration Deployment プラットフォームのインストール後、大部分のサービスは自動的に開始します。 各サービスに対してサービスパラメータを設定することでサービスを設定できます。 たとえばトラブルシューティングの目的などで、サービスを停止してから開始（または再起動）することが必要になる場合があります。 Cisco Prime Collaboration Deployment プラットフォーム上でコマンドラインインターフェイス（CLI）を使用して以下のタスクを実行できます。

Cisco Prime Collaboration Deployment サービス

このサービスは Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーション インターフェイスをサポートします。 Cisco Prime Collaboration Deployment アプリケーションが正しく機能するには、このサービスがアクティブである必要があります。 これは、デフォルトでアクティブです。

パフォーマンスおよびモニタリング サービス

ここでは、パフォーマンスおよびモニタリング サービスについて説明します。

Cisco Log Partition Monitoring Tool

Cisco Log Partition Monitoring Tool サービスは、設定済みのしきい値とポーリング間隔を使用して、Cisco Prime Collaboration Deployment プラットフォーム上のログ パーティションのディスク使用率をモニタする Log Partition Monitoring 機能をサポートします。

Cisco RIS Data Collector

Real-time Information Server（RIS）は、生成された重大アラームなどのリアルタイムの情報を維持します。

Cisco AMC Service

このサービス、Alert Manager および Collector サービスでは、サーバ上のリアルタイム情報を取得することが可能です。

Cisco Audit Event Service

Cisco Audit Event Service は、ユーザまたはユーザ アクションの結果による Cisco Prime Collaboration Deployment プラットフォームへの設定変更をモニタおよびログ記録します。

SOAP -ログ収集 API サービス

Cisco SOAP-Log Collection API サービスは、ログ ファイルを収集し、リモート SFTP サーバのログ ファイルの収集スケジュールを設定できるようにします。収集するログファイルの例としては、syslog、コア ダンプ ファイル、シスコ アプリケーション トレース ファイルなどがあります。

SOAP-Performance Monitoring API サービス

Cisco SOAP Performance Monitoring API サービスは、SOAP API を通じてさまざまなアプリケーションのパフォーマンスモニタリングカウンタを使用できるようにします。たとえば、サービスごとのメモリ情報やCPU 使用率などをモニタできます。

バックアップおよび復元サービス

この項では、バックアップおよび復元サービスについて説明します。

Cisco DRF Master

Cisco DRF Master Agent サービスは、CLI を使用して、必要に応じて、バックアップのスケジューリング、復元の実行、依存関係の表示、ジョブ ステータスの確認、およびジョブの取り消しを行う DRF Master Agent をサポートします。 Cisco DRF Master Agent は、バックアップおよび復元プロセス用のストレージ メディアも提供します。

Cisco DRF Local

Cisco DRF Local サービスは、DRF Master Agent の主要部分である Cisco DRF Local Agent をサポートします。 コンポーネントは、ディザスタ リカバリ フレームワークを使用するために Cisco DRF Local Agent に登録されます。 Cisco DRF Local Agent は、Cisco DRF Master Agent から受信したコマンドを実行します。 Cisco DRF Local Agent は、ステータス、ログ、およびコマンド結果を Cisco DRF Master Agent に送信します。

SFTP

Cisco Prime Collaboration Deployment は、SFTP サーバをローカルに実行します。

システム サービス

ここでは、システム サービスについて説明します。

Cisco CDP

Cisco CDP は、ネットワーク管理アプリケーションが音声アプリケーションに対してネットワーク管理タスクを実行できるように、別のネットワーク管理アプリケーションに対して音声アプリケーションをアドバタイズします。

Cisco Trace Collection Servlet

Cisco Trace Collection Servlet は、Cisco Trace Collection Service とともにトレース収集をサポートし、ユーザがトレースを表示できるようにします。 このサービスを停止すると、Cisco Prime Collaboration Deployment プラットフォームでトレースを収集または表示できません。

SysLog Viewer およびトレースおよびログ収集に対して、Cisco Trace Collection Servlet および Cisco Trace Collection Service はサーバ上で実行する必要があります。

Cisco Trace Collection Service

Cisco Trace Collection Service は、Cisco Trace Collection Servlet とともにトレース収集をサポートし、ユーザがトレースを表示できるようにします。 このサービスを停止すると、Cisco Prime Collaboration Deployment プラットフォームでトレースを収集または表示できません。

SysLog Viewer およびトレースおよびログ収集に対して、Cisco Trace Collection Servlet および Cisco Trace Collection Service はサーバ上で実行する必要があります。

ヒント　必要に応じて初期化時間を短くし、Cisco Trace Collection Servlet を再起動する前に Cisco Trace Collection Service を再起動することを推奨します。

プラットフォーム サービス

ここでは、プラットフォーム サービスについて説明します。

Cisco Tomcat

Cisco Tomcat サービスは Web サーバをサポートしています。

Cisco Tomcat Stats Servlet

Cisco Tomcat Stats Servlet は Tomcat 統計情報を収集します。

Platform Administrative Web サービス

Cisco Prime Collaboration Deployment サーバによるシステムのアップグレードを可能にするため、Platform Administrative Web サービスは、Cisco Unified Communications Manager、Cisco Unified Presence、IM and Presence サービス、Cisco Unified Contact Center Express、または Cisco Unity Connection システムでアクティブ化が可能な SOAP API です。

SNMP マスター エージェント

このサービスはエージェント プロトコル エンジンとして機能し、SNMP 要求に関連する認証、許可、アクセス コントロール、およびプライバシーの機能を提供します。

ヒント　CLI で SNMP 設定を完了した後、SNMP Master Agent サービスを再起動する必要があります。

MIB2 Agent

このサービスは、システムやインターフェイスなど、変数の読み取りおよび書き込みを行う、RFC 1213 で定義されている変数に対する SNMP アクセスを提供します。

Host Resources Agent

このサービスは、ストレージリソース、プロセステーブル、およびインストール済みソフトウェア ベースなど、ホスト情報に対する SNMP アクセスを提供します。 このサービスは HOST-RESOURCES-MIB を実装します。

System Application Agent

このサービスは、システム上にインストールされ、実行されているアプリケーションに対する SNMP アクセスを提供します。 これは SYSAPPL-MIB を実装します。

Cisco CDP Agent

このサービスは、Cisco Discovery Protocol を使用して、Cisco Prime Collaboration Deployment プラットフォームのネットワーク接続情報に SNMP アクセスを提供します。 このサービスは CISCO-CDP-MIB を実装します。

Cisco Syslog Agent

このサービスは、さまざまなコンポーネントが生成する syslog メッセージの収集をサポートします。 このサービスは CISCO-SYSLOG-MIB を実装します。

Cisco Certificate Expiry Monitor

このサービスは、システムが生成する証明書の有効期限切れのステータスを定期的に確認し、証明書の有効期限に近づくと、通知を送信します。

サービスの使用

Cisco Prime Collaboration Deployment プラットフォーム上でのサービスの開始、停止、アクティブ化、または再起動、またはサービスパラメータを設定するには、コマンドラインインターフェイス（CLI）を使用する必要があります。 起動、停止、アクティブ化または更新できるサービスは一度に 1 つだけです。 サービスが停止中の場合、サービスが停止するまで起動できないことに注意してください。 同様に、サービスが起動中の場合、サービスが起動するまで停止できません。

次のサービスは、Cisco Prime Collaboration Deployment プラットフォームをインストールするとデフォルトでアクティブ化されます。

- Cisco AMC Service
- Cisco Audit Event Service
- Cisco CDP
- Cisco CDP Agent
- Cisco Certificate Expiry Monitor
- Cisco DRF Local
- Cisco DRF Master
- Cisco Log Partition Monitoring Tool
- Cisco Platform Manager Service
- Cisco RIS Data Collector
- Cisco Syslog Agent
- Cisco Tomcat

- Cisco Tomcat Stats Servlet
- Cisco Trace Collection Servlet
- Host Resources Agent
- MIB2 Agent
- SNMP マスター エージェント
- System Application Agent

次のサービスは、Cisco Prime Collaboration Deployment プラットフォームをインストールするとデフォルトで停止されます。

- Cisco Trace Collection Service
- SOAP -ログ収集に関する API
- SOAP -パフォーマンス モニタリング API

注意 サービス パラメータに加える変更の内容によっては、システムに障害が発生する場合があります。 変更しようとしている機能を完全に理解している場合と、Cisco Technical Assistance Center（TAC）から変更の指定があった場合を除いて、サービスパラメータに変更を加えないようにしてください。

次の表は、Cisco Prime Collaboration Deployment プラットフォーム上のサービスを処理する際に必要なコマンドを示しています。

表 *6*：サービス *CLI* コマンド

タスク	コマンド
サービスおよびサービス ステータスのリストの表示	utils service list
サービスのアクティブ化	utils service activate *servicename*
サービスの停止	utils service stop *servicename*
サービスの開始	utils service start *servicename*
サービスの再起動	utils service restart *servicename*

制限事項

次のリストは、Cisco Prime Collaboration Deployment の現在の制限について説明しています。

- Cisco Prime Collaboration Deployment は診断ツールではありません。 タスクが失敗した場合、エラー メッセージがタスク リスト ページ上に表示されますが、通常の一連のツールおよび手順を使用して問題を診断し、修正する必要があります。
- SOAP サービスは、既存の OS 管理および CLI アップグレード プロセスを置き換えるものではありません。 アプリケーション GUI または CLI コマンドを使用してサーバをアップグレードすることができます。 Cisco Prime Collaboration Deployment はアプリケーション サーバでアップグレード、再起動、またはバージョン切り替えを実行する 1 つの方法です。
- ローカリゼーションは、Cisco Prime Collaboration Deployment で使用できません。 ローカリゼーションは、英語でのみ使用できます（時刻/日付形式を含む）。

第 6 章

CLI コマンドおよび DRS

- Cisco Prime Collaboration Deployment の CLI コマンド, 119 ページ

Cisco Prime Collaboration Deployment の CLI コマンド

Cisco Prime Collaboration Deployment の主要な機能（移行の作成、アップグレードおよびその他のタスク）は、Cisco Prime Collaboration Deployment GUI インターフェイス全体でサポートされます。ユーザは、GUI インターフェイスを使用して特定のタスクを作成し、タスクを実行する時間をスケジュールできます。 GUI インターフェイスはタスクのステータスもレポートします。

Cisco Prime Collaboration Deployment サーバでのソフトウェアのアップグレード、および DRS バックアップなどのその他の操作に関して、Cisco Prime Collaboration Deployment には、Cisco Unified Communications Manager Release 10.x の CLI インターフェイスと似たコマンドライン インターフェイス（CLI）が用意されています。

以下のタスクを実行するには、Cisco Prime Collaboration Deployment で CLI インターフェイスを使用してください。

- ログ ファイルの表示または取得
- DRS バックアップ デバイスの管理およびデータ バックアップまたはリストアの実行
- Cisco Prime Collaboration Deployment ソフトウェアのアップグレード
- Cisco Prime Collaboration Deployment でのホスト名、IP アドレス、またはパスワードの変更
- Cisco Prime Collaboration Deployment システムでの診断コマンドの実行

最も一般的な CLI 操作およびコマンドは、ログの取得および DRS バックアップに対するものです。 これらのコマンドの手順は以下に示されています。

Cisco Prime Collaboration Deployment ログの取得

Cisco Prime Collaboration Deployment でトラブルシューティングを実行するときは、多くの場合メイン アプリケーション ログの取得が必要です。

CLI コマンド：**file get activelog tomcat/logs/ucmap/log4j/***

Cisco Prime Collaboration Deployment メイン アプリケーション ログには以下が含まれます。

- ブラウザからの REST 要求
- UC サーバへの SOAP 要求
- データベース要求
- スケジューラ イベント（スケジュール済み、開始済み、失敗など）
- 特定のジョブ イベント（タスク、タスク アクションおよびノード）
- 例外およびエラー

Cisco Prime Collaboration Deployment 上の DRS

ディザスタ リカバリ システム（DRS）は、Cisco Prime Collaboration Deployment CLI コマンド インターフェイスから管理および起動できます。 DRS を使用すると、Cisco Prime Collaboration Deployment 上のデータのユーザ開始のデータ バックアップを実行できます（発見したサーバクラスタ、およびスケジュールされ完了したタスク） ユーザは定期的な自動バックアップを設定することもできます。 DRS には以下のような機能があります。

- バックアップの実行およびタスクの復元に対する CLI コマンド
- 事前にバックアップをスケジュールする機能、または即時にバックアップを手動で実行する機能
- リモート SFTP サーバへのバックアップをアーカイブする機能

DRS は、プラットフォームのバックアップ/復元の一環として、独自の設定（バックアップ デバイス設定およびスケジュール設定）を復元します。

重要 データ、ホスト名、サーバ IP アドレスを復元する場合、データを復元するマシンで、Cisco Prime Collaboration Deployment ソフトウェア バージョンがバックアップを実行したサーバと同じものである必要があります。

DRS CLI コマンド

DRS を使用してバックアップおよび復元を設定および実行するために使用される CLI コマンドのリストは以下のとおりです。

詳細については、Unified CM http://www.cisco.com/en/us/products/sw/voicesw/ps556/prod_maintenance_guides_list.html の DRS マニュアルを参照してください。

- utils disaster_recovery status <operation> (operation - Name of ongoing operation like Backup\Restore)
- utils disaster_recovery device list
- utils disaster_recovery device add
- utils disaster_recovery device delete

- utils disaster_recovery schedule add
- utils disaster_recovery schedule delete
- utils disaster_recovery schedule enable
- utils disaster_recovery schedule disable
- utils disaster_recovery schedule list
- utils disaster_recovery backup：DRS インターフェイスで設定されている機能を使用して、手動バックアップを開始します。
- utils disaster_recovery restore：復元を開始し、バックアップ ロケーション、ファイル名、復元する機能に対する parm を必要とします。
- utils disaster_recovery show_backupfiles：既存のバックアップ ファイルを表示します。
- utils disaster_recovery cancel_backup
- utils disaster_recovery show_registration

はじめる前に

Cisco Prime Collaboration Deployment をバックアップするためにネットワーク上でロケーションを使用している場合

1. ネットワーク保存ロケーションを設定するために SFTP サーバにアクセスできることを確認してください。 ディザスタ リカバリ システムは、IPv4 アドレスまたはホスト名/FQDN を使用して設定された SFTP サーバのみをサポートします。
2. SFTP サーバへのアクセスに使用するアカウントには、選択したパスに対する書き込み権限が必要です。

Cisco Prime Collaboration Deployment をローカル ディスクにバックアップすることもできますが、Cisco Prime Collaboration Deployment ディスクでバックアップ ファイルを保存するのに必要なスペースの量が多くなるため、これは推奨されません。

Cisco Prime Collaboration Deployment サーバの DRS バックアップの作成

Cisco Prime Collaboration Deployment サーバの DRS バックアップを作成するには、以下の手順を使用します。

手順

ステップ 1 バックアップ デバイスの追加
コマンド **utils disaster_recovery device add network** を使用します。

例：

utils disaster_recovery device add network device1 /backupdir/pcdbk 10.94.155.76 adminname 2

ステップ 2 デバイスが正しく設定されていることを確認するには、CLI コマンド **disaster_recovery device list** を実行してください。

ステップ 3 以下のコマンドを使用してバックアップを実行します。
utils disaster_recovery backup network PCD device_name：device_name は手順 1 で定義したバックアップ デバイスの名前です。

例：
utils disaster_recovery backup network PCD device1

ステップ 4 次の CLI コマンドを使用してバックアップの状態を確認します。
utils disaster_recovery status backup バックアップのステータスを確認するにはこのコマンドを使用します。 [Percentage Complete（完了した割合）] が 100、すべてのコンポーネントが [SUCCESS（成功）] を表示する場合にバックアップは完了しています。

ステップ 5 ネットワーク バックアップ デバイスには現在 Cisco Prime Collaboration Deployment システムのバックアップが存在しています。

DRS バックアップと復元の重要事項

（注） Cisco Prime Collaboration Deployment データを復元する場合、サーバにインストールされている Cisco Prime Collaboration Deployment ソフトウェア バージョンが、復元するバックアップ ファイルのバージョンと一致することを確認してください。

（注） DRS 復元を実行して、データを新しいサーバに移行する場合、新しいサーバに古いサーバが使用していたのと同じ IP アドレスとホスト名を割り当てる必要があります。 さらに、バックアップの取得時に DNS が設定されている場合、復元を実行する前に同じ DNS 設定が存在する必要があります。

（注） Cisco は、データを復元する前に Cisco Prime Collaboration Deployment のフレッシュ インストールを VM に実行することを推奨しています。

Cisco Prime Collaboration Deployment のバックアップの復元

（注） この手順は任意です。

手順

ステップ 1 **utils disaster_recovery device add network** コマンドを使用して、バックアップ デバイスを設定します。
復元の前に VM のフレッシュ インストールが推奨されるため、システムにファイルの取得元がわかるようにバックアップ デバイスを追加する必要があります。

例：
utils disaster_recovery device add network device1 /backupdir/pcdbk 10.94.155.76 adminname 2
これは、バックアップ ファイルを復元するデバイスです。

ステップ 2 CLI コマンド **utils disaster_recovery show_backupfiles** を使用してバックアップ ファイルをリストします。

例：
admin: utils disaster_recovery show_backupfiles device1
show_backupfiles command は、どのバックアップが復元可能かを示します。 バックアップはバックアップが実行された日時に基づいて指定されています。

ステップ 3 CLI コマンド**utils disaster_recovery restore network** を使用して復元を開始します。

例：
admin:utils disaster_recovery restore network b7k-vmb031 2013-10-30-15-40-54 device1
復元する機能を入力するよう促されたら PCD を入力します。 復元する機能をカンマ区切りで入力してください。 サーバ B7K-VMB031 の有効な機能は PCD:PCD です。

ステップ 4 CLI コマンド **utils disaster_recovery status restore** を使用して復元のステータスを確認します。
復元プロセスの実行中、現在の復元ジョブのステータスを確認できます コマンドが 100% 完了するまで Cisco Prime Collaboration Deployment サーバでデータを管理しないでください。 これは復元するデータの量に応じて数分かかる場合があります。

次の作業

データの復元が完了したら、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバでシステム再起動を実行してデータベースを初期化します。

Cisco Prime Collaboration Deployment サーバは、再インストール中 ESXi ホストとの接続を失います。 復元後 ESXi ホストを Cisco Prime Collaboration Deployment に再度追加することが必要になる場合があります。

第 7 章

CTL 更新

- CTL 更新, 125 ページ
- 証明書の一括管理, 125 ページ

CTL 更新

CTL アップデート実行の詳細については、『*Cisco Unified Communications Manager Security Guide*（*Cisco Unified Communications Manager* セキュリティ ガイド）』の「Security basics（セキュリティの基本）」セクションを参照してください。http://www.cisco.com/en/us/products/sw/voicesw/ps556/prod_maintenance_guides_list.html

証明書の一括管理

CTL アップデート実行の詳細については、『*Cisco Unified Communications Manager Security Guide*（*Cisco Unified Communications Manager* セキュリティ ガイド）』の「Security basics（セキュリティの基本）」セクションを参照してください。http://www.cisco.com/en/us/products/sw/voicesw/ps556/prod_maintenance_guides_list.html

証明書の一括管理は、送信元ノードと宛先ノードで手動で実行する必要があります。 送信元ノードと宛先ノードは、この時点で動作している必要があります。 電話機は送信元ノードに登録されます。

宛先および送信元ノードの証明書を管理するには、以下のセクションの手順に従ってください。

手順

ステップ 1 Destination Cluster Publisher で、Cisco Unified Operating System Administration に移動し、[Security（セキュリティ）] > [Bulk Certificate Management（一括証明書管理）] を選択します。

ステップ 2 中央 SFTP サーバの IP アドレス、ポート、ユーザ、パスワード、およびディレクトリを定義します。

ステップ 3 宛先クラスタから中央SFTPサーバにすべてのTFTP証明書をエクスポートするには、[Export（エクスポート）] ボタンを使用します。

ステップ 4 Source Cluster Publisher で、Cisco Unified Operating System Administration に移動します。 [Security（セキュリティ）] > [Bulk Certificate Management（一括証明書管理）] を選択します。

ステップ 5 手順 2 で使用したものと同じパラメータで中央 SFTP サーバを定義します。

ステップ 6 [Export（エクスポート）]をクリックして、送信元クラスタから中央SFTPサーバにすべてのTFTP証明書をエクスポートします。

ステップ 7 [Consolidate（統合）] をクリックして、中央 SFTP サーバ上のすべての TFTP 証明書を統合します。 この手順は、[Bulk Certificate Management（一括証明書管理）]インターフェイスを使用して、送信元または宛先クラスタのいずれかで実行できます。

ステップ 8 送信元クラスタで、[Bulk Certificate Import（一括証明書インポート）] をクリックして中央 SFTP サーバから TFTP 証明書をインポートします。

ステップ 9 宛先クラスタで、[Bulk Certificate Import（一括証明書インポート）]をクリックして中央SFTPサーバから TFTP 証明書をインポートします。

ステップ 10 DHCP オプション [150] またはその他のメソッドを使用して、電話機を新規宛先クラスタ TFTP サーバにポイントします。
リセットまたは電源投入後、電話機は新規宛先クラスタ ITL ファイルをダウンロードし、新規 ITL ファイル署名を既存の ITL ファイル内の証明書で認証しようと試みます。

既存の ITL ファイル内の証明書を使用して署名を認証することはできないため、電話機は送信元クラスタ上の古い TVS サーバから署名者の証明書を要求します。

電話機はこの要求を TCP ポート 2445 上の送信元クラスタ TVS サービスに送信します。

手順 1 から 9 の一括証明書交換は、新規 ITL ファイルに署名した宛先クラスタ上の TFTP 証明書で、送信元クラスタ内の TVS サービスを提供します。

TVS は電話機に証明書を返し、これにより電話機は署名を認証し、古い ITL ファイルを新しくダウンロードされた ITL ファイルで交換します。

電話機は、新規宛先クラスタから署名済みの設定ファイルをダウンロードおよび認証できるようになりました。

第 8 章

ベスト プラクティス

- クラスタ検出，127 ページ
- アップグレード，128 ページ
- ESXi ホスト，128 ページ
- VM の移行およびインストール，128 ページ
- 移行前，128 ページ
- 移行後，129 ページ
- タスクの検証，130 ページ
- Cisco Prime Collaboration Deployment シャットダウン，130 ページ
- タスクのモニタリング，130 ページ
- SFTP データストアでのファイルの管理，131 ページ
- Cisco Prime Collaboration Deployment の COW との使用 ，131 ページ
- 移行中のシーケンス，131 ページ
- サーバの再アドレス付け，131 ページ
- パブリッシャおよびサブスクライバのフレッシュ インストール，132 ページ
- Unified CM および IM and Presence クラスタのフレッシュ インストール ，132 ページ
- E メール通知，132 ページ
- テスト電子メール，132 ページ

クラスタ検出

クラスタの検出中、小さい .cop ファイルが検出中のサーバにインストールされます。 そのため、ディスカバリを開始する前に、検出するクラスタ内のサーバ上でアップグレードやCOP ファイルのインストールが実行されないことを確認してください。

アップグレード

Cisco Prime Collaboration Deployment Upgrade タスクからアプリケーション サーバ（Cisco Unified Communications Manager、IM and Presence サービス、Cisco Unified Contact Center Express、または Cisco Unity Connection）のアップグレードを開始した場合、アップグレードは Unified Communications アプリケーション GUI または CLI から起動されたのと同じ方法で機能します。 結果として、アプリケーション サーバ GUI から直接実行したアップグレードと同じアップグレード前およびアップグレード後の検証に従うことをお勧めします。

ESXi ホスト

移行またはフレッシュ インストールに使用される VM が、Cisco Prime Collaboration Deployment システムに入力された ESXi ホスト上にあることを確認してください。 この ESXi ホストは DRS または vmotion を許可するように管理することはできません。

VM の移行およびインストール

インストールする UC アプリケーションに対する適切な OVA を使用して新規クラスタに対する VM を常に作成します。 既存の VM を移行の宛先 VM として使用しないでください（新規作成した VM を使用する必要があります）。 移行失敗後、Cisco Prime Collaboration Deployment が新規 VM のインストールを開始した場合、この VM は適切な OVA を使用して新規 VM が作成された後に削除する必要があります。

移行前

送信元クラスタ

- クラスタ上で Disaster Recovery System（DRS）を使用してフルバックアップを実行することが推奨されます。
- TFTP サーバの TFTP フォルダのサイズを確認することをお勧めします。 多くのファーム エンドポイント COP ファイルが TFTP サーバ上にインストールされていて、TFTP サーバ上の TFTP ディレクトリのサイズが 2.5 GB より大きい場合、/usr/local/cm/tftp ディレクトリ内の使用しないサイズの大きいファームウェア ファイルを削除することを強くお勧めします。

以下の手順は、TFTP スペースの使用率を確認する方法について、また必要に応じて、Cisco Prime Collaboration Deployment を使用した移行を実行する前に TFTP サーバ（送信元ノード）上で TFTP ファイルを削除する方法について説明しています。

TFTP ディレクトリのディスク使用率の確認

TFTP ディレクトリのディスク使用率を確認するには、次の手順に従ってください。

手順

ステップ 1 CLI コマンドを使用してログインします。

ステップ 2 コマンド **admin:show diskusage tftp** を入力します。

ステップ 3 行 **/usr/local/cm/tftp/**（出力の最後に表示されます）に対するディスク使用率出力を確認します。

ステップ 4 **/usr/local/cm/tftp** ディレクトリのディスク使用率サイズを確認します。

（注） サイズが 2.5 GB を超過しないことが推奨されます。 超過する場合、一部のファイルを削除してサイズを削減してください（下記の手順を参照）。 これらのファイルが将来必要となる場合は、削除する前にバックアップを別のサーバにコピーします。

TFTP ファイルの削除

TFTP ファイルを削除するには、次の手順を使用します。

手順

ステップ 1 TFTP サーバの Cisco Unified Operating System Administration の GUI にログインします。

ステップ 2 [Software Upgrades（ソフトウェア アップグレード）] に移動し、[TFTP File Management（TFTP ファイル管理）] を選択します。

ステップ 3 TFTP ファイルのリストを表示するには、[Find（検索）] をクリックします。

ステップ 4 削除する TFTP ファイルのチェックボックスを選択します（複数のチェックボックスを選択することで複数のファイルを同時に削除できます）。

ステップ 5 [Delete Selected] をクリックします。

ステップ 6 ファイルを削除したら、上記の手順を使用してディスク使用率を再び確認します。

（注） クラスタに1つ以上のTFTPサーバがある場合、上記の手順を同じクラスタ内の各TFTPサーバに対して繰り返す必要があります。

移行後

以下の移行後のベスト プラクティスに従ってください。

- エンドポイントの確認

- データベース複製の確認。たとえば以下のようになります。

```
admin:show perf query class "Number of Replicates Created and State of
    Replication" ==>query class :

- Perf class (Number of Replicates Created and State of Replication)
    has instances and values:

ReplicateCount -> Number of Replicates Created = 676

ReplicateCount -> Replicate_State = 2
```

以下のリストに、Replicate_State の取りうる値を示します。

- 0：レプリケーションが開始しない。 これは、サブスクライバが存在していないことが原因です。または、Database Layer Monitor サービスが現在実行されていない上にサブスクライバをインストールした後も実行されていないことが原因です。
- 1：複製は作成されたが、数が間違っている。
- 2：レプリケーションは良好である。
- 3：クラスタ内のレプリケーションは不良である。
- 4：レプリケーションのセットアップに成功しなかった。

タスクの検証

タスクが手動開始としてスケジュールされている場合、または後で開始することがスケジュールされている場合、[Validate（検証）] ボタンが表示され、タスクの検証を手動で実行できます。VM がないこと、通信の問題、.iso ファイルがないことなどの問題を識別するため、開始前にタスクで検証を実行することをお勧めします（開始前のどの時点でも実行できます）。 検証が実行されると、システムは検出された検証の問題のリストを示すポップアップ ウィンドウを表示します。 問題が検出されなかった場合、「All validation tests passed（すべての検証テストにパスしました）」というメッセージが表示されます。

Cisco Prime Collaboration Deployment シャットダウン

最適な結果を得るには、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバをシャットダウンするときに「utils server shutdown」のコマンドを使用します。 これを実行しないと、ESXi ホストで NFS マウントの問題が生じる場合があります。

タスクのモニタリング

タスクのステータスを表示するには [Monitoring GUI（GUI のモニタリング）] ページを使用します。左側の列のタスクをクリックすると、タスク詳細が右側に表示されます。タスクの各ステップ（エクスポート、インストールなど）は詳細セクションの下の [Task Status（タスク ステータス）] テーブルに表示されます。 手順に対する追加の詳細を表示するにはその手順の横の矢印を

クリックします。 手順の中には複数のタスク アクションが含まれるものもあります。 すべてのアクションとそのステータスを表示するにはスクロール ダウンします。

SFTP データストアでのファイルの管理

SFTP データストアのページは、SFTP を使用して Cisco Prime Collaboration Deployment サーバに移動された .iso および .cop ファイルを表示します。 移行、インストール、またはアップグレード タスクでの使用のために Cisco Prime Collaboration Deployment サーバにファイルを置くには、sftp クライアントおよびログインを「adminsftp」として使用します（管理パスワードを自分のパスワードとして使用します）。

Cisco Prime Collaboration Deployment サーバに接続したら、移行またはインストール タスクで使用する .iso ファイルを **/fresh_install** フォルダにアップロードします。 アップグレード タスクで使用する.iso ファイルまたは .cop ファイルを **/upgrade フォルダ**にアップロードします。 タスクが完了したあと、.iso が別のタスクによって必要とされない場合、SFTP データストアから .iso ファイルを削除して Cisco Prime Collaboration Deployment サーバ上でスペースを節約することがベスト プラクティスです。 Cisco Prime Collaboration Deployment のアップグレード時または DRS バックアップの復元時に SFTP データストア内の .iso ファイルが多すぎる場合、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバのスペースがなくなることがあります。

Cisco Prime Collaboration Deployment の COW との使用

Cisco Prime Collaboration Deployment サーバおよび他の Unified Communications アプリケーション ノードが WAN を介して通信している場合、最小の帯域幅 100M が推奨されます。

移行中のシーケンス

移行タスクが作成されると、インストール手順ごとにサーバが 1 つあるデフォルト シーケンスが提示されます。 シーケンス画面の編集ツールは、1 つの手順に複数のサーバを配置するために使用できます。 最適な結果を得るには、1 つの手順当たり最大 6 つのサーバを含めることをお勧めします。

サーバの再アドレス付け

サーバの再アドレス付け機能を使用する場合、システムは各サーバの再アドレス付けの後に強制一時停止を適用します。 サーバが正常に変更され、次の再アドレス付け手順に進む前に電話が再度登録されたことを確認してください。

パブリッシャおよびサブスクライバのフレッシュインストール

フレッシュ インストール タスク（新規 UC クラスタ）に複数のサーバが含まれる場合、Cisco Prime Collaboration Deployment システムは最初に自動的に Unified CM パブリッシャをインストールし、パブリッシャのインストールに続いて一時停止を適用します。 この一時停止により、ユーザは新規にインストールされたパブリッシャの Unified CM GUI に移動して [System（システム）]> [Servers GUI（サーバ GUI）] に他のクラスタ サーバを追加できます。 一度このクラスタにインストールされるすべてのサブスクライバ（Unified CM サブスクライバ、IM and Presence パブリッシャおよびサブスクライバ）が Unified CM パブリッシャ GUI に追加されると、ユーザは [Cisco Prime Collaboration Deployment Monitoring（Cisco Prime Collaboration Deployment モニタリング）] ページ上の [Resume（再開）] ボタンをクリックしてフレッシュ インストール タスクの実行を再開できます。

Unified CM および IM and Presence クラスタのフレッシュインストール

Unified CM および IM and Presence ノードの両方でフレッシュ インストールを作成する場合、どの IM and Presence がパブリッシャであるかを必ず指定するようにしてください。 後で、タスクを実行していて、サブスクライバ インストール ノードの Unified CM Publisher（[System（システム）] > [Server GUI（サーバ GUI）] ページ）エントリを許可するために Unified CM パブリッシャ インストール後に停止する場合、IM and Presence パブリッシャがリストに追加する最初の IM and Presence サーバになることが非常に重要です。 これにより、IM and Presence パブリッシャが IM and Presence の最初のノードとしてインストールされることを確実にします。

E メール通知

タスクにエラーが発生した場合、タスクは一時停止してユーザの介入を待機します。 また、タスクによっては、手動介入を行えるように自動的にタスク シーケンスで一時停止します。タスク実行中に発生する可能性のある一時停止やエラーの通知を受けるために、タスク実行前に電子メール通知（標準オプション）を設定することをお勧めします。

テスト電子メール

電子メール通知を設定する場合、[Send Test email（テスト電子メールの送信）] ボタンをクリックして、Cisco Prime Collaboration Deployment メール システムが自分のメール サーバに送信可能であることを確認します。テスト電子メールを受信したことを確認します。 これはタスク実行の前に実行する必要があります。

第 9 章

Cisco Prime Collaboration Deployment のトラブルシューティング

- 移行用のディスク容量，133 ページ
- 一般的なトラブルシューティングの問題，134 ページ
- [View Log（ログの表示）] に表示されるエラー，135 ページ
- ロック エラー，139 ページ
- NFS データストア，139 ページ
- [Monitor（モニタ）] ページの一時停止状態，140 ページ
- スケジューリング，140 ページ
- サーバ接続，141 ページ
- 再起動によるタスクの失敗，141 ページ
- タスクのスケジューリング，153 ページ
- タスクのタイムアウト，153 ページ
- 移行とインストールのアップグレード，154 ページ
- 現在のタスクがキャンセル状態の場合の新規タスクの実行，155 ページ

移行用のディスク容量

多数の Unified CM サーバの同時移行に 1 つの Cisco Prime Collaboration Deployment サーバが使用されている場合、Cisco Prime Collaboration Deployment ディスクは空きスペースの少ない状態で実行され、移行タスクが失敗する場合があります。 Cisco Prime Collaboration Deployment を使用して複数のサーバを同時に移行する場合、以下のコマンドを実行してディスク サイズを増やすことができます。

手順

ステップ 1 Cisco Prime Collaboration Deployment CLI にログインし、**utils system shutdown** コマンドを入力して Cisco Prime Collaboration Deployment サーバをシャットダウンします。

ステップ 2 Cisco Prime Collaboration Deployment サーバがシャットダウンされたら、**ESXi host** に移動して、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバがある仮想マシンのディスク サイズを増加します。

ステップ 3 Cisco Prime Collaboration Deployment サーバを再起動します。

ステップ 4 Cisco Prime Collaboration Deployment サーバで利用できるディスク スペースの容量を表示するには、CLI コマンド **show status** を Cisco Prime Collaboration Deployment サーバで使用します。

一般的なトラブルシューティングの問題

段階的なイベントのログの表示

Cisco Prime Collaboration Deployment の段階的なログを表示するには、[Monitoring（モニタリング）] ダッシュボードで [View Log（ログの表示）] ボタンを使用します。

Cisco Prime Collaboration Deployment ログへのアクセス

CLI コマンドを使用して Cisco Prime Collaboration Deployment ログにアクセスして詳細を取得します。 次に例を示します。

```
file get activelog tomcat/logs/ucmap/log4j/*
```

タスク開始前に問題をチェック

タスクを開始する前に問題をチェックするには、[Validate（検証）]ボタンを使用します。 検証で問題が発見された場合、[View Log（ログの表示）] ボタンをクリックして検出された検証の問題に関する詳細を確認します。

ノード情報の不一致

Cisco Prime Collaboration Deployment に保管されたノード情報および実際のノードとの間の不一致は自動的に修正できます（たとえば、アクティブなバージョン）。 他の情報を修正するには再検出が必要です。

サーバ間の通信の確認

`network capture` CLI コマンドを使用して、サーバ間の通信を検証できます（たとえば、パケットが正しいポートに送受信されているかどうか）。

[View Log（ログの表示）] に表示されるエラー

[Monitoring（モニタリング）] ダッシュボードの [View Log（ログの表示）] ボタンを使用して、タスクの実行時に Cisco Prime Collaboration Deployment のログを段階的に確認できます。 ログを確認する場合、イベントまたはエラーが表示される場合があります。 より一般的なエラーの例、およびそれを解決するために提案されるアクションが以下に示されています。

ノードの接続/コンタクトの問題

エラー メッセージ：

- "The network diagnostic service indicates node {0} has a network issue.（ネットワーク診断サービスはノード {0} にネットワーク障害があることを示しています。） The network settings cannot be changed until the network issue is resolved.（ネットワーク障害が解決されるまでネットワーク設定を変更することはできません。）"
- "The node could not be located（ノードを検出できませんでした）"
- "The node could not be contacted（ノードにコンタクトできませんでした）"

ノードの接続/コンタクトの問題を解決するために実行できるアクションは以下のとおりです。

- 指定されたノードに対するネットワーク設定とファイアウォール設定を確認して、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバがノードと通信できるようにします。
- ノードの電源がオフになっているかどうか、ノード名のつづりが正しいかどうか、またはノードにアクセスできるかどうかを確認します。

他の接続の問題

エラー メッセージ：

- "The switch version status could not be determined.（バージョン切り替えステータスを検出できませんでした。） Please manually verify that the switch version completed.（手動で一時停止してバージョン切り替えが完了したことを検証してください。）"

問題解決のために考えられるアクションは以下のとおりです。

バージョン切り替えタスクでは、サーバが一定期間応答しない場合、切り替えに成功していても、正常に切り替えられていないように見える場合があります。 このエラーが発生した場合、応答していないサーバの CLI にログインし、**show version active** コマンドを発行してバージョン切り替えが正常に実行されたか確認します。 たとえば、UCCX サーバ上のバージョン切り替えは 60 分以上かかることがよくあります。

ノード応答

エラー メッセージ：

- "The node did not respond within the expected time frame.（ノードが予想時間内に応答しませんでした。）"
- "The upgrade service for node {0} did not send back the expected response.（ノード {0} のアップグレードサービスが期待される応答を返信しませんでした。） This is assumed to be a failure.（これはエラーと見なされます。） However, this can also happen when network connectivity is temporarily lost.（ただし、これはネットワーク接続が一時的に失われた場合に発生することがあります。） Please manually verify the upgrade status on node {0} before proceeding.（続行する前にノード {0} 上のアップグレード ステータスを手動で確認してください。）"

問題解決のために考えられるアクションは以下のとおりです。

これらのメッセージは通常、タスク実行中（インストール、アップグレードなど）に新規ノードが一定期間内に Cisco Prime Collaboration Deployment とコンタクトしない場合に表示されます。アップグレードの場合、これは 8 時間であるため、このエラーが発生したらタスクが失敗したことを意味している場合があります。 ただし、アップグレード（またはインストール）中にサーバが Cisco Prime Collaboration Deployment とコンタクトするのを妨げるネットワーク障害が発生したことを意味する場合もあります。そのため、このメッセージが表示されたら、（CLI を使用して）応答していないサーバにログオンし、**show version active** コマンドを発行してアップグレードが正常に実行されたか確認します。

データストアをマウントできない

エラー メッセージ：

- "Unable to mount datastore xxx_NFS on ESXi host <hostname>（ESXi ホスト <hostname> でデータストア xxx_NFS をマウントできませんでした）"

問題解決のために考えられるアクションは以下のとおりです。

このエラーは、NFS データストアに問題がある場合に発生します。 これは Cisco Prime Collaboration Deployment が予想外にシャットダウンした場合に発生する場合があります。 このエラーが発生した場合、ESXi ホストを確認し、古い NFS マウントをアンマウントしてください。 次に、ESXi ホストを Cisco Prime Collaboration Deployment から削除してから再度追加してください。

ESXi ホストをインベントリに追加できない

考えられる原因：

このエラーは、ESXi ホストの vSwitch ホストのネットワーキングの問題によって発生した可能性があります。

問題解決のために考えられるアクションは以下のとおりです。

- ホストに Ping を実行し、CLI コマンド **utils network ping hostname** を実行して接続性を確認します。
- ESXi ホストのライセンスが有効であることを確認します。 デモ ライセンスはサポートされていません。

- ESXi ホストへのルート アクセス権が必要であることに注意してください。 ESXi ホストのクレデンシャルを追加する場合にルートのユーザ名およびパスワードを使用します。
- ネットワーク アドレス トランスレーション（NAT）を使用している場合、Cisco Prime Collaboration およびノードと正常に通信するためには、Cisco Prime Collaboration Deployment およびクラスタ内のすべてのノードが、同じ NAT の後ろにある必要があります。

VM の電源を投入できない

エラー メッセージ：

- "Unable to power on the VM named xxx on ESXi host xxxxxxx（ESXi ホスト xxxxxxx 上で xxx という名前の VM の電源を投入できませんでした）"

問題解決のために考えられるアクションは以下のとおりです。

VM が置かれる ESXi ホストを確認します。 [Tasks and Events（タスクとイベント）] タブで、Cisco Prime Collaboration Deployment がいつ VM の電源投入を試行したかを示すタイムスタンプを確認します。 そのホストの VM の数が多すぎないか確認します。 その場合は、このクラスタに使用されていない VM の電源をオフにすることが必要になる場合があります。

VM の電源状態

エラー メッセージ：

- "The power state of VM xxxxx in ESXi host XX.XX.X.XX needs to be OFF.（ESXi ホスト XX.XX.X.XX 内の VM xxxxx の電源状態は OFF である必要があります。） The task is now paused.（タスクは一時停止されます。）"

問題解決のために考えられるアクションは以下のとおりです。

移行タスクの宛先クラスタ、または新規インストール クラスタで使用される VM が OFF 状態になっている必要があります。 このエラー メッセージが表示された場合は、指定された VM を確認します。 オフになっていない場合、電源をオフにします。 次に、タスクの再試行または再開を実行できます。

ユーザ名またはパスワードが無効

エラー メッセージ：

- "The username and/or password is not valid.（ユーザ名とパスワードの両方またはいずれか一方が無効です。）"

問題解決のために考えられるアクションは以下のとおりです。

クラスタ ページでこのサーバの管理名およびパスワードを修正します。 その後、このノードを検出できます。

Platform Administrative Web Services（PAWS）

エラー メッセージ：

- "The Platform Administrative Web Services (PAWS) is not available.（Platform Administrative Web Services（PAWS）を利用できません。）"
- "Unable to access node {0} via the Platform Administrative Web Services (PAWS) interface.（Platform Administrative Web Services（PAWS）インターフェイスを通してノード {0} にアクセスできません。）"

問題解決のために考えられるアクションは以下のとおりです。

サーバにアクセス可能であり、PAWS サービスがノード上でアクティブであることを確認します。Cisco Prime Collaboration Deployment がアプリケーション サーバ上でのサーバのアップグレード、バージョン切り替え、またはタスクの再起動のために使用される場合（たとえば、Cisco Prime Collaboration Deployment が Unified CM サーバのアップグレードに使用される場合）、アプリケーション サーバで Platform Administrative Web Service がアクティブになっている必要があります。アクティブでない場合、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバは Unified CM アプリケーション サーバと通信することができません。

{0} VMs Named {1} Were Located on ESXi Host {2}

エラー メッセージ：

- "{0} VMs named {1} were located on ESXi host {2}.（{1} という名前の {0} VM が ESXi ホスト {2} で検出されました。）"

問題解決のために考えられるアクションは以下のとおりです。

指定された仮想マシンがまだESXiホスト上に存在することを確認します。 場合によっては、VM が別の ESXi ホストに移動されることがあります。この場合、VM を保持する ESXi ホストを Cisco Prime Collaboration Deployment サーバに追加する必要があります。

Power State of VM {0} in ESXi Host {1} Needs to Be OFF

エラー メッセージ：

- " The power state of VM {0} in ESXi host {1} needs to be OFF.（ESXi ホスト {1} の VM {0} の電源状態が OFF である必要があります。）"

問題解決のために考えられるアクションは以下のとおりです。

Cisco Prime Collaboration Deploymentを VM にインストールまたは移行するには、ターゲット VM の電源がオフになっている必要があります。

CLI コマンドのタイムアウト

エラー メッセージ：

- "CLI command timed out for node {0}（ノード {0} で CLI コマンドがタイムアウトしました）"

問題解決のために考えられるアクションは以下のとおりです。

ノードのネットワーキング、接続、またはパスワードの問題を確認します。 また、コマンドがタイムアウトした間に別の操作が発生していたかどうか（たとえばCOPファイルのインストール）を確認します。

検証の問題によるタスクの一時停止

エラー メッセージ：

- "Task paused due to validation issues（検証の問題によりタスクが一時停止しました）"

問題解決のために考えられるアクションは以下のとおりです。

タスクを実行する前に、Cisco Prime Collaboration Deployment サーバは、使用される VM が利用可能かどうか、isoファイルを検出可能かどうかなどを確認するために検証チェックを実行します。 このメッセージは、検証チェックのいずれかが失敗したことを示しています。 どの検証が失敗したかの詳細はログ ファイルを確認してください。

ロック エラー

大部分の製品では、一度に 1 つのみの変更を加えることができます（たとえば、アップグレードの進行中はNTP設定を変更することはできません）。 ノードのロック中にリクエストが作成されると、以下の情報を含むロック メッセージが表示されます。

- ロックされたリソース
- リソースをロックしたプロセス ID
- ノードのホスト名

通常、数分待ってから再試行できます。 詳細については、ノード CLI を使用して、提供されたプロセス ID およびホスト名に基づいた正確なプロセスを識別します。

NFS データストア

例外およびその他の NFS 関連の問題

例外またはその他の NFS 関連の問題については、Cisco Prime Collaboration Deployment ログを参照してください。

VMware vSphere の使用

NFS データストアが使用可能であること確認するために VMware vSphere を使用します。

現在のすべてのデータストアのマウント解除および再マウント

Cisco Tomcat を再起動すると、現在のすべてのデータストアがマウント解除され、その再マウントが試行されます。

[Monitor（モニタ）] ページの一時停止状態

タスクが手動介入を待機中

移行や再アドレス付けなどの特定のタスクは、手動による介入が必要になった地点で一時停止します。 これらのタスクでは、Cisco Prime Collaboration Deployment システムが一時停止を強制的に適用します。 タスクがこのポイントに到達すると、タスクは停止し、メッセージが [Monitoring（モニタリング）] ページに表示されます。 手動の手順を必要に応じて実行し、タスクの再開の準備ができたら [Resume（再開）] ボタンをクリックします。

検証の問題によるタスクの一時停止

このメッセージが表示された場合は、[View log（ログの表示）] リンクをクリックしてどの検証が失敗したかについて詳細を確認します。

タスク アクションの失敗によるタスクの一時停止

このメッセージが表示された場合は、[View log（ログの表示）] リンクをクリックしてどのタスクが失敗したかについて詳細を確認します。

スケジューリング

スケジュール日の確認

タスクがスケジュールされていても開始していない場合、スケジュール日を確認します。

検証テスト

タスクが開始すると、一連の検証テストが実行されます。 検証エラーではタスクを一時停止します。

タスクが一時停止している理由の確認

[View Log（ログの表示）] ボタンを使用して、タスクが一時停止している理由（検証エラー、要求されるまたは必須の一時停止、特定の手順の後に 1 つまたは複数のノードが失敗したなど）を確認します。

キャンセルされたタスク

手順の中には、一度開始するとキャンセルできないものがあります（たとえばサーバの再起動など）。 タスクをキャンセルすると、手順が終了するまでキャンセル状態のままになります。

サーバ接続

接続の確認

接続性を確認するには、`utils network ping` および `traceroute` CLI コマンドを使用します。

転送および予約 DNS ルックアップの検証

`utils network host` CLI コマンドを使用して転送および予約 DNS ルックアップを検証します1。

Platform Administrative Web Services

アップグレード、再起動、およびバージョン切り替えが実行されるノードで Platform Administrative Web Services がアクティブであることを確認します。

ポートが開いていることの確認

ポート ガイドでリストされるポートが開いている（たとえば、NFS および SOAP コール バック ポートが他のネットワーク デバイスによってブロックされていない）ことを確認します。

再起動によるタスクの失敗

以下の各タスクの成功または失敗は、Prime Collaboration Deployment サーバが移行中にクラスタ内の各サーバから応答を得ることができるかどうかに依存しています。 サーバへの接続が失われた場合、または Prime Collaboration サーバがタスク中に再起動する場合、タスクは正常に完了してもエラーを表示する場合があります。

インストール タスクの失敗

問題

インストール タスクの各手順の成功または失敗は、Prime Collaboration Deployment サーバが移行中にクラスタ内の各サーバから応答を得ることができるかどうかに依存しています。

考えられる原因

インストール タスク中に Prime Collaboration サーバが再起動すると、インストールは正常に完了していてもエラーを表示する場合があります。

次のテーブルは、タスクがアプリケーション サーバ上で正常に完了したかどうかを確認する手順、そしてこのタイプのエラーから回復する方法について説明しています。

ソリューション

表 7：**展開例**：**マルチノード クラスタ展開**

If	解決策
障害は最初のノードでのインストールの際に発生します	1 同じクラスタ ノードで新規フレッシュ インストール タスクを作成する必要があります。 （注） Cisco Unified Communications Manager および IM and Presence サービスなどの Unified Communications 製品の場合、Cisco Prime Collaboration Deployment は後続のノードをクラスタから個別にインストールするインストール タスクをサポートしません。 2 宛先クラスタに関連付けられた ESXi ホストの VM のステータスを確認します。 任意の VM に電源が投入され、インストールされたら、これらの VM を削除して OVA を再展開します。 （注） 詳細は、インストール タスクに関するトピックを参照してください。
インストールが最初のノードで正常に実行されたが Prime Collaboration Deployment が接続を失った後に後続のノードで失敗する	1 Cisco Unified Communications Manager などの障害が発生した Unified Communications VM ノードにログインし、手動でインストール状態を確認します。 詳細は、Unified Communications 製品マニュアルを参照してください。 2 すべての新規クラスタ ノードで新規インストール タスクを作成します。 インストールされたすべての VM の削除、新規 VM を作成するために推奨される OVA の再配備、および新規インストール タスクの作成を実行することでインストール プロセスを再起動する必要があります。 （注） VM 名が以前の設定から変更される場合、新規フレッシュインストールクラスタを追加し、新規フレッシュインストールタスクを作成し、そのタスクを実行する必要があります。 3 宛先クラスタに関連付けられた ESXi ホストの VM のステータスを確認します。 任意の VM に電源が投入され、インストールされたら、これらの VM を削除して OVA を再展開します。 （注） 詳細は、インストール タスクに関するトピックを参照してください。

アップグレード タスクの失敗

問題

アップグレード タスクの各手順の成功または失敗は、Prime Collaboration Deployment サーバがアップグレード中にクラスタ内の各サーバから応答を得ることができるかどうかに依存しています。

考えられる原因

Prime Collaboration サーバがアップグレード タスク中に再起動した場合、アップグレードは正常に完了した場合でもエラーを表示することがあります。

次の表は、タスクがアプリケーション サーバ上で正常に完了したかどうかを確認する手順、そしてこのタイプのエラーから回復する方法について説明しています。

ソリューション

表 *8* : 展開例 : マルチノード クラスタ展開

If	解決策
障害は最初のノードのアップグレードの際に発生します	

If	解決策
	1 どの手順に成功し、どの手順が失敗したか確認するには、[Monitoring（モニタリング）] ページでタスクのステータスを確認します。 2 Cisco Unified Communications Manager などの最初の Unified Communications VM ノードにログインし、ソフトウェアバージョンとアップグレードステータスを確認して、このノードが正常に新バージョンにアップグレードされたか検証します。 詳細は、Unified Communications 製品マニュアルを参照してください。 3 最初のノードのアップグレードが正常に行われた場合、後続ノードで新規アップグレード タスクを作成できます。 4 最初のノードのアップグレードに失敗した場合、すべてのノードで新規アップグレード タスクを作成できます。 5 アップグレード タスクが自動バージョン切り替えで設定されている場合、Unified Communications 製品ノード上でアクティブおよび非アクティブなパーティションのステータスをチェックします。 自動バージョン切り替えが Unified Communications 製品ノードで失敗した場合は、バージョン切り替えを実行します。 詳細は、Unified Communications 製品マニュアルを参照してください。 （注） バージョン切り替えが必要な場合で、新規アップグレード タスクに自動バージョン切り替えが設定されている場合、これは後続のノードで新規アップグレード タスクを実行する前に実行する必要があります。 （注） アップグレード タスクが COP ファイルをインストールするために作成された場合、COP ファイルのインストール ステータスを Unified Communications ノードで直接検証します。

If	解決策
アップグレードが最初のノードで正常に実行されたが Prime Collaboration Deployment が接続を失った後に後続のノードで失敗する	1 Cisco Unified Communications Manager などの失敗した Unified Communications VM ノードにログインし、ソフトウェア バージョンとアップグレード ステータスを確認して、このノードが正常に新バージョンにアップグレードされたか検証します。詳細は、Unified Communications 製品マニュアルを参照してください。 （注） 後続のノードが正しい新規バージョンを表示する場合、Prime Collaboration Deployment でアップグレードタスクを再作成する必要はありません。 2 後続ノードで、新規バージョンが非アクティブなパーティションで表示され、古いバージョンがアクティブなパーティションで表示されており、アップグレード タスクが自動バージョン切り替えを実行するように設定されている場合、自動バージョン切り替えを Cisco Unified Communications Manager で手動で実行するか、Prime Collaboration Deployment を使用してバージョン切り替えタスクを作成する必要があります。 3 アップグレード タスクが自動バージョン切り替えで設定され、後続のノードがバージョンを正しく表示しない場合、バージョン切り替えを実行します。 詳細は、Unified Communications 製品マニュアルを参照してください。 （注） アップグレードタスクが COP ファイルをインストールするために作成された場合、COP ファイルのインストール ステータスを Unified Communications ノードで直接検証します。

移行タスクの失敗

問題

移行タスクの各手順の成功または失敗は、Prime Collaboration Deployment サーバが移行中にクラスタ内の各サーバから応答を得ることができるかどうかに依存しています。

考えられる原因

移行タスク中に Prime Collaboration サーバが再起動すると、移行は正常に完了していてもエラーを表示する場合があります。

ソリューション

Prime Collaboration Deployment が接続を失った後に移行タスクが失敗した場合、移行プロセス全体を再起動することをお勧めします。 移行タスクを再起動する場合、新規タスクを作成する必要があります。 展開がマルチノードのクラスタの場合、以下の手順に従うことができます。

1. どの手順に成功し、どの手順が失敗したか確認するには、[Monitoring（モニタリング）] ページでタスクのステータスを確認します。
2. 送信元ノードがシャット ダウンした場合、ノードの電源を手動で投入する必要があります。

（注） シャット ダウンされたすべての送信元ノードでこの手順を繰り返して行ってください。

3. 失敗した移行タスクを削除します。
4. 失敗した移行タスクに関連付けられる宛先移行クラスタを削除します。

（注） 送信元クラスタを削除する必要はありません。

5. 宛先クラスタに関連付けられた ESXi ホストの VM のステータスを確認します。 任意の VM に電源が投入され、インストールされたら、これらの VM を削除して OVA を再展開します。

（注） 詳細は、移行タスクに関するトピックを参照してください。

バージョン切り替えタスクの失敗

問題

バージョン切り替えタスクの各手順の成功または失敗は、Prime Collaboration Deployment サーバがバージョン切り替え中にクラスタ内の各サーバから応答を得ることができるかどうかに依存しています。

考えられる原因

Prime Collaboration サーバがバージョン切り替えタスク中に再起動する場合、バージョン切り替えは、正常に完了した場合でもエラーを表示することがあります。

次のテーブルは、タスクがアプリケーション サーバ上で正常に完了したかどうかを確認する手順、そしてこのタイプのエラーから回復する方法について説明しています。

ソリューション

表 *9*：展開例：マルチノード クラスタ展開

もし	解決策
障害は最初のノードのバージョン切り替えの際に発生します	**1** 最初の Unified Communications VM ノード（たとえば、Cisco Unified Communications Manager）にログインし、アクティブおよび非アクティブなパーティションの両方でソフトウェアバージョンを手動で確認します。詳細は、Unified Communications 製品マニュアルを参照してください。 **2** 最初のノードがアクティブなパーティションの古いバージョンをまだ表示しており、新規バージョンが非アクティブなパーティションにある場合、Prime Collaboration の同じノードで新規バージョン切り替えタスクを作成し、そのタスクを再度実行します。

もし	解決策
バージョン切り替えが最初のノードで正常に実行されたが Prime Collaboration Deployment が接続を失った後に後続のノードで失敗する	1 後続の Unified Communications VM ノード（たとえば、Cisco Unified Communications Manager）にログインし、ソフトウェアおよびバージョン切り替えステータスをチェックして後続のノードが正しいバージョンで正常に起動しているかどうか確認します。 2 後続ノードがアクティブなパーティションで正しい新規バージョンを表示する場合、Prime Collaboration Deployment でバージョン切り替えタスクを再作成する必要はありません。 3 後続ノードが非アクティブ パーティションで新規バージョンを表示しており、古いバージョンがアクティブなパーティションにある場合、後続ノードではバージョン切り替えは失敗します。 後続ノードでバージョン切り替えを手動で実行するか、Prime Collaboration Deployment でのみ後続ノードで新規バージョン切り替えタスクを作成できます。

タスク再アドレス付けの失敗

問題

再アドレス付けタスクの各手順の成功または失敗は、Prime Collaboration Deployment サーバがクラスタ内のすべてのサーバから応答を得られるかどうかに依存しています。

考えられる原因

Prime Collaboration サーバが再アドレス付けタスク中に再起動すると、再アドレス付けに成功した場合でもエラーが通知されることがあります。

次のテーブルは、タスクがアプリケーション サーバ上で正常に完了したかどうかを確認する手順、そしてこのタイプのエラーから回復する方法について説明しています。

ソリューション

表 *10*：展開例：マルチノード クラスタ展開

If	解決策
障害は最初のノードの再アドレス付けの際に発生します	1 最初の Unified Communications VM ノード（たとえば、Cisco Unified Communications Manager）にログインし、ネットワーク設定が正常に変更されたことを確認します。 詳細は、Unified Communications 製品マニュアルを参照してください。 2 ネットワーク設定が最初のノードで正常に変更されたことを確認したら、Prime Collaboration Deployment 上の次のノード上で新規再アドレス付けタスクを作成し、このタスクを実行します。 ネットワーク設定が最初のノードで正常に変更されていない場合、Prime Collaboration Deployment の両方のノードで新規再アドレス付けタスクを作成し、このタスクを再実行します。

If	解決策
再アドレス付けタスクが最初のノードで正常に実行されたが Prime Collaboration Deployment が接続を失った後に後続のノードで失敗する	1 最初の Unified Communications VM ノード（たとえば、Cisco Unified Communications Manager）にログインし、ネットワーク設定が正常に変更されたことを確認します。 詳細は、Unified Communications 製品マニュアルを参照してください。 2 ネットワーク設定が最初のノードで正常に変更されたことを確認したら Prime Collaboration Deployment の最初のノードで新規再アドレス付けタスクを作成する必要はありませんが、後続のノードで新規再アドレス付けタスクを作成する必要はあります。ネットワーク設定が最初のノードで正常に変更されなかった場合、Prime Collaboration Deployment 上の最初のノードおよび後続のノードで新規再アドレス付けタスクを作成し、新規タスクを実行します。 3 ネットワーク設定が正常に変更された場合、Prime Collaboration Deployment のネットワーク設定が正しいことを確実にするために、このクラスタに対するクラスタ ディスカバリをアップデートします。 1 [Clusters（クラスタ）] 画面で、クラスタ内のノードを示す三角形をクリックします。 2 ネットワーク設定を確認して、必ず [Cluster Nodes（クラスタ ノード）] テーブルに新しいネットワーク設定（たとえばホスト名）が表示されるようにします。 3 正しいネットワーク設定が表示されない場合は、クラスタ内の各ノードに対する [Refresh Node（ノードのリフレッシュ）] のリンクをクリックします。

サーバ再起動タスクの失敗

問題

サーバ再起動タスクの各手順の成功または失敗は、Prime Collaboration Deployment サーバがサーバ再起動中にクラスタ内の各サーバから応答を得ることができるかどうかに依存しています。

考えられる原因

Prime Collaboration サーバがサーバ再起動中に再起動する場合、サーバ再起動は正常に完了してもエラーを表示する場合があります。

次のテーブルは、タスクがアプリケーション サーバ上で正常に完了したかどうかを確認する手順、そしてこのタイプのエラーから回復する方法について説明しています。

ソリューション

表 *11*：展開例：マルチノード クラスタ展開

If	解決策
障害は最初のノードのサーバ再起動の際に発生します	**1** 最初の Unified Communications VM ノード（たとえば、Cisco Unified Communications Manager）にログインし、再起動のステータスを手動でチェックします。 **2** 最初のノードが再起動されていない場合は、すべてのノードで新しいサーバ再起動タスクを再作成し、タスクを再度実行します。
サーバ再起動が最初のノードで正常に実行されたが Prime Collaboration Deployment が接続を失った後に後続のノードで失敗する	**1** 2 番目の Unified Communications VM ノード（たとえば、Cisco Unified Communications Manager）にログインし、再起動のステータスを手動でチェックします。 **2** 後続のノードが正常に再起動した場合、新規サーバ再起動タスクを再作成する必要はありません。 後続ノードが再起動していない場合、後続ノードにのみ新規サーバ再起動タスクを作成します。

タスクのスケジューリング

スケジュールされているが開始されていないタスク

タスクがスケジュールされていても開始していない場合、スケジュール日を確認します。

検証エラー

タスクが開始すると、一連の検証テストが実行されます。 検証エラーではタスクを一時停止します。

タスクの一時停止の原因

タスクが一時停止している理由（検証エラー、要求されるまたは必須の一時停止、特定の手順の後に 1 つまたは複数のノードが失敗したなど）を確認するには、[View Log（ログの表示）] ボタンをクリックします。

キャンセルできないタスク

タスクの中には、一度開始するとキャンセルできないものがあります（たとえば、サーバの再起動など）。 タスクをキャンセルすると、手順が終了するまでキャンセル状態のままになります。一度開始したらキャンセルできない他のタスクはサーバ ノードのインストールです。

タスクのタイムアウト

結果の手動による確認

すべての Cisco Prime Collaboration Deployment タスクには、タスクと製品のタイプに応じて、30 分から 10 時間の内蔵タイムアウトがあります。 Cisco Prime Collaboration Deployment がその期間内に期待される結果を受信しない場合、実際のプロセスが成功した場合でも Cisco Prime Collaboration Deployment はエラーを示します。 ユーザは手動で結果を確認し、偽陰性を無視する必要があります。

再アドレス付けのタイムアウト

再アドレス付け中、VLAN の変更が要求される場合、Cisco Prime Collaboration Deployment はそのノードに対して予期されるアップデートを受信しません。 その結果、再アドレス付けは、実際の再アドレス付けプロセスが成功した場合にもタイムアウトします。

リソースの問題によるノードの遅延

VMware vSphere を使用して、ノードを遅延させているリソースがないか検証します。ディスク、CPU、およびメモリの問題によって、ログインが通常より遅くなる場合があります。これにより、クラスタ検出中に接続タイムアウトの問題が発生する場合があります。

ネットワークの輻輳

アップグレード、インストール、および移行中に大型のファイルがネットワークに渡ってプッシュされるため、ネットワークの輻輳によりタスクのログインに長時間かかる場合があります。

移行とインストールのアップグレード

VM が起動しない

移行またはインストール中に、付属のインストール ISO を使用して VM が起動しない場合、BIOS の VM の起動順序を検証してください。 正規の Cisco OVF を使用して新規作成された VM のみを使用することをお勧めします。

VM が見つからない

VM が見つからない場合、vMotion が無効になっていることを確認します。

アップグレード ファイルのリストが空

アップグレード用の iso ファイルのリストが空の場合、アップグレードするクラスタ内の 1 つ以上のサーバに停止した既存のアップグレードがある可能性があります。 CUCM 側のアップグレードプロセスが停止したため、ファイルリストは空と表示されます。そのため、ファイルはアップグレードできず、有効ではありません。アプリケーション サーバ CLI からアップグレードを試行すると、メッセージ「The resource lock platform.api.network.address is currently locked（リソース ロック platform.api.network.address が現在ロックされています）」が表示される場合があります。

この問題から回復するには、CUCM サーバの再起動を試行します。

アップグレード ISO または COP ファイルがタスク ウィザードに表示されない

アップグレード ISO または COP ファイルがタスク ウィザードに表示されない場合、[Administation（管理）] > [SFTP Datastore（SFTP データストア）] メニュー オプションから PCD サーバの正しいディレクトリにアップロードされていることを確認します。 使用されるディレクトリは通常タスク ウィザードの先頭に表示されます。

アップグレード ISO はすべてのノードに対して有効である必要がある

アップグレード ISO は、ウィザードでリストされるためにタスク内のすべてのノードで有効である必要があります。 リストされない場合、タスクにパブリッシャが含まれることまたはパブリッシャがすでにアップグレードされていることを検証します。

リリース 10.x 以降の製品

リリース 10.x 以前の製品の大部分は、一般的なアップグレードおよびインストール失敗のメッセージのみをレポートします。 ユーザは失敗したノードに直接アクセスし、従来のツールおよび製品固有のプロセス（たとえば、アップグレード ログを参照するには RTMT または CLI）を使用して問題を診断する必要があります。

現在のタスクがキャンセル状態の場合の新規タスクの実行

フレッシュ インストール タスクの再実行

以下の処理は、プロセス内の現在のタスクがキャンセルされる場合に新規タスクを再実行するための手順の概要を示しています。 詳細については、タスク管理に関するトピックを参照してください。

手順

ステップ 1 最も最近のタスクのステータスを検証するにはタスク ログを参照してください。

a) VM の電源がオンで、フレッシュ インストールタスクが宛先 VM でまだ進行中の場合、新規 VM を作成するには、VM の電源をオフにしてから削除し、OVA を再展開します。 新規 VM には同じ名前を使用できます。

b) VM の電源がオフで、フレッシュ インストールが VM 上で開始されていない場合、VM をオフのままにしてください。

ステップ 2 クラスタをチェックして、クラスタ内の任意のノードがアクティブなバージョンとディスカバリ ステータスでアップデートされたことを確認します。

a) ノードのいずれかが新規バージョンでアップデートされたかまたはディスカバリ ステータスの場合、同じ VM とインストール設定を含めて新しい名前で新規クラスタを作成します。

b) クラスタ内のノードが更新されていない場合、フレッシュ インストール タスクを再作成する場合にクラスタを再使用します。

ステップ 3 新規インストール タスクを作成して実行します。

移行タスクの再実行

以下は、現在の移行タスクがキャンセル処理中である場合に同じ送信元および宛先クラスタに対して移行タスクを再実行するための手順の概要を示しています。 詳細については、タスク管理に関するトピックを参照してください。

手順

ステップ 1 最も最近のタスクのステータスを検証するにはタスク ログを参照してください。

a) VM の電源がオンで、移行タスクが宛先 VM でまだ進行中の場合、新規宛先 VM を作成するには、宛先 VM の電源をオフにし、削除して、OVA を再展開します。 新規 VM には同じ名前を使用できます。
b) VM の電源がオフで、移行が VM 上で開始されていない場合、VM をオフのままにしてください。

ステップ 2 新規タスクを実行する前にソース クラスタ上でノードのステータスを確認してください。

a) 送信元ノードの電源がオフの場合、送信元ノードの電源をオンにし、移行タスクを再実行する前にノードが実行状態にあることを確認してください。
b) ネットワーク移行の場合、送信元ノードは電源オンのままとなっている場合があります。

ステップ 3 クラスタ検出は、送信元ノードで再実行する必要はありません。

ステップ 4 アクティブなバージョンまたは検出ステータスでノードがアップデートされていないことを宛先クラスタで確認してください。

a) 宛先クラスタ内の任意のノードがアプリケーションまたはディスカバリ ステータスの適切なバージョンでアップデートされた場合、同じ送信元クラスタで新しい名前を付けて、同じ宛先 VM を選択することで新規移行宛先クラスタを作成します。
b) 宛先クラスタ内のノードがアプリケーションまたは検出ステータスの新規バージョンでアップデートされていない場合、後で新規移行タスクを作成する場合に移行宛先クラスタを再利用できる場合があります。 これが可能でない場合は移行宛先クラスタを新しい名前で再作成します。

ステップ 5 同じ送信元クラスタおよび新しい宛先クラスタを持つ新規移行タスクを作成します。

ステップ 6 新しいタスクの実行を開始します。